
グリーン・シールド

高階 桂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーン・シールド

【Nコード】

N8048G

【作者名】

高階 桂

【あらすじ】

著名な軍事評論家を父に持つ女子高生、城山渚。彼女が突如召喚されてしまったのは、異世界にある知的な哺乳類が多数生息するキヤリエスという奇妙な王国であった。巨大昆虫ヴォーゲオスの脅威に悩まされているキヤリエス王国を守っているのは、キヤリエス王国空軍（RQAF）と名乗る人類の傭兵部隊であり、それを指揮しているのは元帝国海軍航空隊の零式艦戦乗りにして渚の曾祖父でもある城山重光。渚は重光に、将来RQAFの司令職を継ぐよう懇請される。人生をRQAFに捧げたくない渚は、なんとかしてヴォー

ゲオスの脅威を取り除こうと奮闘するが……。生物学的SF風味の異世界冒険ものです。

ブローグ

コロンベラ島 1943年

「早く入れ！ 急げ！」

富岡軍曹は臨時に預かっている部下たちを急いで防空壕に押し込めた。自らは壕の入り口に陣取り、海軍の将校から鯖の缶詰八個と交換に譲ってもらった七倍の搜索用双眼鏡を取り出す。

……なんて数だ……。

レンズには、南洋特有のコバルトブルーの空を背景に、米軍の双発中型機群が映っていた。B25かB26だろう。ざっと見て、四十前後か。その周囲には、双胴形式が特徴的な双発小型機が飛び回っている。一見すると、米軍爆撃機に味方戦闘機が攻撃を仕掛けているように思えるが、これは単に高速のP38が鈍足の爆撃機に速度を合わせようと動いているだけだ。いわゆるバリカン機動である。「どうやら、徹底的にここを潰す気らしいですな」

いつの間にか富岡の隣にしゃがみこんでいた古参の井上上等兵が、のんびりとした口調で言った。洪面で双眼鏡を下ろした富岡に、火を点けた『桜』を差し出す。

「残しちゃ勿体ないですわ、班長」

富岡は洪面のまま受け取って、口に咥えた。井上が、根元近くまで吸った自分の分を旨そうに吹かす。井上の言う通りだった。『桜』は戦地では手に入りにくい煙草であり、富岡ら下士官兵が吸う機会が少ない。この爆撃で命を落とす可能性がある以上、今のうちに吸っておくべきだ。

「皆にも吸わせてやれ」

富岡は顎で壕内を指した。防空壕といっても、お粗末なものである。浅く穴を掘り、椰子の幹を並べ、余った土砂を被せ、擬装用に雑草を植え付けただけのいわば応急掩蓋陣地に過ぎない。米軍機の

至近弾を受ければ、ひとたまりもあるまい。

富岡らは八八式七センチ野戦高射砲六門、九八式高射機関砲二門を定数とする陸軍独立高射砲中隊の所属だった。海軍が飛行場を設営したこの島の防空能力向上のために派遣され、近くの丘の上に布陣したのが半年前のこと。当初は楽な勤務であった。敵と言えば思い出したように訪れる偵察任務を帯びた単機のB24程度で、たいてい緊急離陸した海軍の零式艦戦がすぐに追い払ってくれた。

情勢が急転したのはちょうど一週間前だった。突如襲来した二十機を越える米艦載機群が海軍飛行場を中心に銃爆撃を繰り返し、海軍在地機の大半を破壊した。独立高射砲中隊も応戦し、各分隊合わせて六機撃墜を報じたが……富岡はその数字を信用していなかった。今までの経験から、よほど幸運に恵まれないと八八式七高で敵機を落とすことはできないと確信していたからだ。

次の空襲は二日後だった。今度現われたのは陸軍機の戦爆連合十数機。主に狙われたのは、高射砲中隊であった。椰子林をかすめるほどの超低空で飛来したB25が、十三ミリ機銃を撃ちまくりながら遅延信管付きの爆弾を投下する。発砲で機首をびかぴかと光らせたP38が、ゴム林に逃げ込んだ兵を執拗に追いまわす。米軍機が去った時には、全ての高射砲と高射機関砲が鉄屑と化していた。中隊長以下陸軍将校は全滅。中隊の下士官兵もその九割が死傷した。富岡が無傷で生き延びたのは奇跡に近かった。

富岡は煙草を吹かしながら丘の下の方海軍飛行場を眺めた。もはや稼動機はないと聞いている。陸軍側も防空に使えるような武器は九六式軽機一丁のみ。むろん、そんな豆鉄砲で米軍機に立ち向かうほど富岡は愚かではなかった。馬鹿げた無駄遣いをするよりは、米軍の上陸に備えて弾と人命を温存しておくほうが、よほど気が利いている。

「そろそろ入りましようや」

吸い終わった『桜』を赤茶けた水溜りに落とした井上上等兵が、富岡の肘をつついた。轟々たる米軍機の爆音が、すでに小さな島を

押しつぶさんばかりに響き渡っていた。

富岡と彼の部下……先日の攻撃で生き残った中隊員のうち数名を束ねた臨時分隊のひとつ……は狭い壕内で爆撃が終わるのを待った。投下される爆弾の軌道を意志の力で捻じ曲げようとするかのように、鬼気迫る形相で壕の天井を睨んでいる者。一心不乱に口の中で念仏を唱えている者。うつろな目で、時折揺れる壕の床を眺めている者。観念したのか、静かに瞑目している者……。井上上等兵は配給煙草の『八紘』をほぐしてはまた巻き直すことで時間を潰し、富岡は諦めに似た心境で腕組みし、壕の壁面の一点を見つめていた。

爆弾が炸裂するたびに、壕は揺さぶられた。音と振動から判断すると、主に狙われているのは海軍飛行場のようだった。もはや陸軍陣地は無力化したと、米軍は考えているのだろう。それでも、数回至近に投弾があり、そのたびに壕は激しく揺さぶられ、天井や壁から土くれが剥がれ落ち、壕内が土埃で満たされた。機銃掃射が壕を直撃した時は、さしもの井上上等兵も手にした煙草を落とし、富岡も慌てて身を縮めた。浅い角度で乱射された十三ミリだったらしく、天蓋を貫通することはなかったが、それでも弾が土を突き抜け椰子の幹に突き刺さる鈍い音は、全員の肝を冷やした。

米軍機が去ると、富岡は部下を引き連れ負傷者救護のために丘を駆け下りた。

飛行場は惨憺たるありさまだった。何棟もあつた建物は土台を残すのみ。いたるところに、大小の弾孔が開いている。

「おい、誰がいるか？ 海軍さん！」

富岡は呼ばわった。だが、たなびく灰色の煙と立ち込めた硝煙の臭いの中から返事は聞こえてこなかった。

「……血の臭いがしませんぜ」

井上上等兵が、言う。

富岡は部下を散開させて、生存者の発見に努めた。だが、誰も生存者はおるか、死体すら発見できなかった。それどころか、まだ何

機が残っていたはずの零式艦戦も消えていた。掩体とともに破壊されたかと考えて搜索してみたが、たとえ火災にあつても燃え残るはずの発動機の残骸すら見当たらなかった。

「なぜ、誰もいないんだ。どこ行っちゃったんだ、海軍さんは」

富岡は首をひねった。

「爆撃でばらばらになっちゃったのかな」

「馬鹿言え。それなら血溜まりがあるはずだ」

一人の二等兵が口にした意見を、井上が即座に否定する。

「稼働機がなかったんだから、空中退避したはずもないし……」

「海へ逃げたんじゃないですか？」

「まさか。浜にあつた伝馬船一隻で、全員が逃げきれぬ訳はない」

「ゴム林へ逃げ込んだのだろう」

「それなら、もう戻ってきてもいいはずだが……」

富岡らは首をひねりつつ、搜索を打ち切った。

それから十日後、富岡ら陸軍の生き残りは沖合に現われた海防艦に收容され、飛行場は放棄された。その時点になつても、海軍将兵たちの行方は杳として知れなかった。富岡らはルソン島で二ヶ月間留め置かれ、その間に行方不明だった海軍将兵のうち将校の大半と下士官兵の一部が、かなり離れた小島で発見されたという噂を聞いた。おかしい話だった。浜に伝馬船は残されていたのに、どうやってその島に渡つたのだろうか？ 残る将兵の行方は、依然として不明のままだった。

富岡らはその後内地へと戻され、そこで新編された三式十二センチ高射砲の部隊に配属され、後の本土防空戦に参加し、幸運なことに全員が生き残った。

プロローグ（後書き）

プロローグをお届けします。お読みいただきありがとうございます。『女子高生なんて出てこないやんけ！』という突っ込みがあるといけませんので、第一話も同時投稿いたしました。ご挨拶はそちらの後書きに書かせていただきます。

1 謎の村

「おりゃーっ！」

まっすぐに枯れ枝で作ったドリルの先端から白い煙が漂い出したのを認めた城山渚は、気合を入れなおして右手に握った弓の往復速度を速めた。左手に握られた押さえ板によって上部を保持されているドリルが、巻きついていて靴紐により高速で回転し、倒木を利用した発火台のくぼみを激しく擦りたてている。

頃合よしと見た渚は、弓と押さえ板を手放すと、破り取ったレディースコミック誌のページに載せた火口……砕いた樹皮と枯れた苔を、細かく裂いた紙と混ぜたもの……を発火台のくぼみに押し付けた。軽く息を吹きかけ、着火を促す。

ぽつと、小さな炎があがった。火口に充分に火が回ったことを確認してから、渚はそれを点火材……枯れ枝を薄く削いだもの……の上に置き、火の具合を確かめつつ削り屑と紙片を加えていった。炎が見る見る大きくなり、白っぽい煙が上がり始める。

「はっはっは。『シロクマ』の娘をなめたらあかんぜよ」

渚は昔テレビで見た仁侠映画の台詞をもじって、無意味に威張った。父親は元SAS士官が書いたサバイバル教本の翻訳も手がけている。その娘が初歩的な火熾し程度に失敗したのでは、物笑いの種であろう。渚は焚き火に太目の枝を加えていった。簡単には消えないまでに炎があがったところで、一番太い枯れ枝を放り込む。そうなるから初めて、渚は生木の枝を削って作った串に刺した魚を炙り始めた。

魚は合計八匹。一番の大物で体長20センチくらいある。釣りを趣味としない渚には名前までは判らなかったが、側面に楕円の斑点がいくつあるところなど、図鑑などで見たことがある鱒に似ている。おそらく、その仲間なのだろう。川に何匹もいるのを見つけ、ためしにいわゆる『ガチンコ漁法』……水面に接している岩に石を

ぶついたりハンマーで叩いたりして水中に衝撃波を生じせしめ、魚を気絶させて捕まえるという禁断の……日本国内の大部分の河川で禁止されているやり方……を敢行したところ、十五分ほどでこれだけの戦果を挙げることができたのである。

「……疲れた」

ため息混じりに言い、渚は発火台として活躍してくれた倒木の上に座り込んだ。あらためて、周囲の風景を見渡す。延々と続いているならかな丘陵地帯。点在する濃緑色の小さな森。やけにまぶしい太陽が燦々と輝く青い空には、真つ白な千切れ雲が浮かんでいる。やや乾いた空気は、かすかに枯れ草のような匂いを含んでいた。

呆れるくらい人工物に乏しい……いや、人為的なものがない風景だった。人家はもちろん、道路も送電線も電波塔も見当たらない。植林がなされた形跡すらない。どう考えても、神奈川県内ではない。今時、丹沢の山奥だつてもう少し賑やかである。

魚が焼けるのを待ちながら、渚は携帯電話を取り出した。祈るような気持ちで、電源を入れる。

表示時刻は16:32。その隣には、やはり圏外の表示が出る。財布を取り出し、もう一度レシートに記された時刻を確認する。10:15。……とすると、もう六時間以上もここにいることになる。渚はため息混じりに電源を落とした。携帯は、圏外にいる場合自ら電波を飛ばして中継局を探そうとするから、電源を入れっぱなしにしておく急速に電池を消耗してしまうのだ。圏外ではこまめに電源を落とすのが、サバイバルの基本である。

「どこなよ、こっ」

ぼそりと呟いてみる。

今から六時間十分ほど前に、渚は自宅から徒歩四分半のコンビニにいた。お菓子数点と雑誌三点……女性誌、テレビ情報誌、レディースコミック誌……合計税込み千六百八十五円を購入し、千円札二枚と五円硬貨一枚を出して、三百二十円のお釣りをもらった。それは間違いない。倒木に立てかけてあるコンビニのロゴ入りポリエ

チレン袋の中には、買った物すべてが入っているし、ここにレシートもある。

買った物を終え、コンビニを出て家に向かって歩き出したのも確かである。最近廃業し、更地になった蕎麦屋の前を通ったのも覚えていいる。その先、よく玄関先で雉トラの野良猫が昼寝している家の前を通り、猫がいない……行きの時もいなかった……のを確認したあたりで、記憶は曖昧になる。

気が付いたときには、見たこともない土地の芝草の上でへたり込んでいた。犯罪にでも巻き込まれたかと思ってとりあえず携帯を開いてみたが、圏外で役に立たない。仕方なく、ロスト・ポジションの場合のセオリー通り、近くの高所……この場合は丘の上……に登って見たところ、数メートルの川幅を持つ緩やかな流れを発見したので、それに沿って川下へと歩いてきたのである。

……やはり誘拐だろうか。

合理的でない説明なら、いくつも頭に浮かんだ。UFOにさらわれた、異世界に召喚された、タイムスリップした、突然テレポーターション能力が芽生えた、等々。しかし、合理的かつ論理的に考えれば、答えはひとつしか出てこない。

誘拐。

渚の父……城山拓真は一部業界では有名人である。『シロクマ』の愛称で知られる軍事評論家として何冊も著作を出しているし、様々な専門誌やマニア向け雑誌に記事を書いたりコラムを持ったりしている。某民放テレビ局とも懇意で、軍事ネタのレポーターや北鮮がミサイルを発射した時のコメンテーターとして仕事もさせてもらっている。最近では、サブカルチャーに造詣が深いこともあり、ゲームの監修にも手を伸ばしている。

かく言う渚も、ごくごく一部では有名人と化していた。父親のコレで、軍事マニア向け雑誌三誌に『城山汀』という安直なペンネームでイラスト入りコラムを書かせてもらっているのだ。手違いで『AFVジャーナル』のホームページに写真と現役女子高生という正

体が載せられたことからファンが急増し、一時は月に百通近く『手紙』……純然たるファンレター以外を含む……が届く事態になったほどだ。いまはかなり沈静化しているが、それでも週に四、五通は怪しい手紙や宅配便が自宅に届けられる。

……ギャラに目がくらんだ『シロクマ』が某テレビ局にあたしを売った。

渚がたどり着いたもつとも合理的な説明がこれであった。『現役女子高生のガチンコ無人島サバイバル』とかなんとかくだらない企画。こうしている間にも、超望遠カメラと隠しカメラが撮影を続けているに違いない。

……違いない。

違う。

渚は一度も染めたことのないセミロングの髪をかきあげた。そのような企画、おそろしく予算を食うだろう。渚が自由意志で行動し、移動する以上、それらを漏れなく収録するためには何百台もの隠しカメラが必要なはずだ。そこまで金を使うバラエティー番組など、成立し得ない。

……合理的でない説明の方が、信憑性が高そうな気がしてきた……。

渚は不意に寒気を覚えて、焚き火ににじり寄った。実際、空気がややひんやりとしてきている。気温としてはまだ二十度近くはあるだろうが、連日三十数度を越える猛暑に慣れた身体には、爽やかな涼風も寒々しいと感じなかった。なにしろ、恐ろしく軽装である、紺色のぴつちりとしたタンクトップと、膝上20センチほどのデニム地のタイトスカート。素足にピンクのスニーカー。日焼け防止の白いキャップ。

「そろそろいいかな」

独り言をつぶやきながら、渚は鱈に似た魚が刺さる串をいったん抜き、裏面が焼けるように配置しなおした。

女性誌の厚手のページを濾紙の要領で折ったものをカップ代わりに手にして、渚は川に近付いた。流れが速く、かつ水が澄んでいるところを選び、水深20センチあたりの水を汲む。それを飲みながら、渚は淡泊な味の焼き魚を胃に流し込んだ。五匹食べたところで満足した渚は、レザーマンツールのマルチツール『ウェーブ』を取り出し、ナイフの刃を出すと、残る三匹の頭を切り落とした。

『ウェーブ』は父親から贈られたもので、なんと十二歳の誕生日プレゼントだった。どう考えても女の子への贈り物として適切であるとは思えないが……おかげで火を熾す道具を作れたのだから、『シロクマ』に先見の明があったと言えるうか。渚はレディースコミックのページ数枚を使って魚を丁寧に包んだ。コンビニで買った菓子はまだ手付かずのまま残してある。傷みやすい食料から消費し、保存の利くものは非常用に取っておくというのも、サバイバルの基本中の基本である。

火種を運ぶのはとりあえず諦め、ボウドリル……渚が作った火熾しの道具……や串、炭化した枯れ枝など役に立ちそうなものをすべて拾い集め、コンビニ袋に入れる。借用していた靴紐をスニーカーに通した渚は、川の流れに沿って再び歩みだした。

それを見つけたのは、携帯によれば20:05のことであった。丘の麓に、集落があった。戸数はせいぜい十数戸と言うところだろうか。周辺には、一見してそれとわかる畑が広がっている。防風林や柵などはない。そして、集落の中から左手のほうへと伸びている赤茶けた細い道が一本。渚のいる川岸からは、単なる地面に穿たれた溝でしかない粗雑な用水路が掘られており、澄んだ水が畑のあちこちへと供給されている。

太陽はいまだ沈まずに、西とおぼしき空に浮かんでいた。感覚としては……初秋の午後四時といったところか。

「助かった……と思うんだけど」

渚は安堵しながらも、慎重に集落の観察を続けた。どうにも怪し

げな集落である。第一に、立ち並ぶ家がどれも小さすぎるし、地味すぎる。家というよりも、小屋と言ったほうがふさわしいくらいだ。伸びている道もありにも細く、みすばらしい。獣道よりは多少まし、といった程度である。電柱の姿は一本も見えないから、電気も固定電話も通じていないようだ。

……日本ではあるまい。

渚はそう見当をつけた。山深いところならば、いまだに電気が通じていないところがあってもおかしくはない……実際、小学生の時にランプ生活をしてにしている温泉宿に渚自身宿泊したことがある……が、今の日本でこのような広々とした丘陵地帯に電化されていない地区があるはずがない。

なぜ外国にいるのか？ やはり某テレビ局の関与だろうか？

渚は頭を振った。そんなこと、今考えても仕方がない。集落があるのならば、人がいるだろう。とにかく誰かと接触して、情報を得なければならぬ。渚はコンビニ袋をつかみ直すと、足早に集落へと向かった。

近付くにつれ、集落の細部が見分けられるようになった。

やはり、日本ではありそうになかった。ごく簡単に整形した石を積み上げた基礎に丸太で柱を立て、その間に単純に板を張り渡しただけの壁。もちろんすべて平屋である。屋根は藁葺きとはまた違ったなにかの植物を利用して葺いてあるようだ。自動車、電気や内燃機関を利用した農耕具、テレビ用の八木アンテナやパラボラアンテナなどは影も形もない。

……タイムスリップ説が正しいのか？

そう思い至った渚はふと足を止めた。それならば、色々と筋が通ってくる。何百年も昔の神奈川の農村なら、こんな風に見えてもおかしきはあるまい。

……おや。

渚から見て集落の右手の畑に、動きが見えた。渚は眼を凝らした。どうやら、誰かが農作業をしているらしい。

しばし考えてから、渚は167センチの身体をやや沈めて、慎重に歩き出した。なんとなく、いやな予感がしていた。この集落の様子から見て、畑にいるのは只者ではあるまい。よくて日本語を一言も理解しない外国人。下手をすれば鎌倉時代くらいの農民。もつとひどければ、渚の姿を見たとたんに奇声を発し、蛮刀かなにかを振りかざして襲ってくるかもしれない。

幸いなことに、件の畑と渚の間には、緑の葉を茂らせた小さな茂みがあった。渚はその茂みを盾にしながら、足音を忍ばせて畑に近付いていった。茂みにたどり着くと、ひとつ深呼吸をしてから、そろそろと首を伸ばして向こう側を覗いてみる。

コアラが一匹、鋤を振るって畑を耕していた。

渚は息を呑んだ。いったん首を引つ込め、眼の周囲を軽くマツサージしてから、再び首を突き出す。

どう見てもコアラだった。灰色の柔らかそうな毛。大きな黒い鼻。特徴的な丸い耳。ただし、巨大である。おそらく……体長は1メートルを優に越えるだろう。それが、器用に鋤を振るっている。

……やっぱりテレビ局の企画か。いや、着ぐるみにしてはリアルすぎる。

渚は熟考した。仮にあのコアラが本物だとしても、話し掛けて見る気にはなれなかった。日本語が通じるわけがない。ひよつとしてオーストラリア訛りの英語なら……まさか。

いずれにしても、もつと色々調べる必要がある。

わき目も振らずに鋤を振るうコアラに気付かれないようにその場を離れた渚は、足音を忍ばせて集落に向かった。途中作物と思しき緑の植物が栽培されている畑で足を止める。どう見ても、コアラの好物ユーカリではない。なんとなくアブラナに似た植物だったが、茹でたブロッコリーを思わせる濃い緑色をしている。

ひよつとするとコアラがそろそろ歩いているかと思われた集落の中は、静けさに満ちていた。渚は恐る恐る家々の間へと足を踏み入れた。聞き耳を立ててみるが、人の気配もコアラの気配もない。

立ち並ぶ家は近くで見てもやはりみすばらしかった。ペンキやニスなどの人工的な塗料が使われている形跡はない。窓はあるものゝむろんガラスなど嵌まっておらず、ただの開口部に黄土色の革か布のようなものを吊っただけの代物だ。入り口と思われるところにも同じく黄土色の『カーテン』が掛かっている。

……あれ一枚あれば、シヨールの代わりになるな……。

剥き出しの肩に肌寒さを感じていた渚は、そんなことを考えつつ埃っぽい道を慎重に歩んだ。やがて、集落の中心部らしいちよつとした広場に出た。真ん中あたりに、切石を膝くらいの高さに円筒状に積み上げ、上に板を被せたものがある。渚は周囲に眼を配って安全を確認してから、そこまで歩んでみた。石組みの脇に、ロープを縛り付けた木桶があることに気付く。

井戸だ。

渚は木桶を拾い上げてみた。きれいで、湿り気を帯びている。頻繁に使われている証拠だろう。不意に喉の渴きを覚えた渚はコンビニ二袋を置くと、蓋の板を外してみた。新鮮な水の匂いが、ぷんと鼻に届く。ロープを握って、木桶を井戸の中へとそろそろと入れてみる。しばらくすると、ロープがふつと軽くなった。水面に木桶が着いたのだ。ロープを適当に揺らして木桶の中に水が入るようにした渚は、頃合を見て、引き上げにかかった。

重い。

渚は唸りながら、徐々にロープを引き上げていった。滑車の発明というのは偉大だったなあ……などと感慨にふけりながら、渚はロープを手繰り続けたが……それが不意に軽くなった。

……水がこぼれたか？

とつさに渚はそう考えたが、次の瞬間、ロープを握る腕さえも後上方に引っ張られたことに気付いた。びっくりして思わずロープを手放した渚だったが、木桶は落ちることなく、見る間に彼女の眼前へと水を満たしたまま上がってきた。

渚は振り向いた。

彼女の傍らで、コアラがロープを握っていた。

渚とコアラの眼が合う。

渚は動けなかった。コアラも動かなかった。ただロープを支えたまま、静かにたたずんでいる。

先ほど畑を耕していたコアラとは別の個体のようだった。ずっと小さい……体長は１メートル以下だろう。それが、あまり知性の感じられない黒い大きな眼で渚を見上げている。その傍らに、取っ手のついた空の木桶が置かれていた。

……水を汲みに来たのか？

とりあえず、襲ってくる気配はないようだ。渚は色々な意味で強張った筋肉を無理やり動かして、水が満たされた木桶を手にとった。視線は、コアラの眼から離さない。離れたら襲われるのではないか、という不安感があった。

思い切って、木桶をコアラに向けて突き出してみる。

ごく自然な動作で、コアラが両手を差し伸べ、木桶を受け取った。そして器用な手付きで、持参の木桶に水を注ぎ込む。水は三分の二くらいまで木桶を満たした。

コアラが動いた。びびって思わず飛び退いた渚を無視し、慣れた手付きでロープ付きの木桶を井戸に投げ込み、するすると引き上げ始める。

自分の木桶を満たしたコアラは、まだ水の残る木桶を渚に押し付けると、自分の木桶を持ってすたすたと歩み去った。

……よく判らない。

渚は首をかしげつつ、木桶に手を突っ込んで中の水を掬い出し、飲んだ。きれいな水だった。三口目を含んだところで、渚はやっと周囲の異常な状況に気付いた。

あちこちの家から、コアラが顔を覗かせていた。その数……十匹はいいようか。

「ははは。ども」

適当なことを言いながら、コンビ二袋を拾い上げた渚はその場を

逃げ出そうとした。だが、歩み始めた渚の目の前に、ひときわ体の大きなコアラが立ちふさがる。体長は、渚よりも優に20センチは低い、これだけの体格ならばその筋力は熊並みだろう。押しのけるわけにもいかず、渚は足を止めた。焦って逃げ道を探すが、そろそろ家々から出てきたコアラたちに、渚はいつの間にか完全包囲されていた。数もいつの間にも二十匹前後に増えている。コアラ特有の無表情さが、なんとも不気味だ。

渚の脳が打開策を探った。だが、ろくなアイデアは浮かばなかった。コアラの弱点など知るわけもないし、『ウェーブ』のナイフ刃ごときではとても対抗できないだろう。……いっそ、死んだふりでもするか？

巨大コアラが黒い鉤爪のついた手を伸ばし、渚の腕を取った。やさしいといえるほど、丁寧な取り方だった。

「ど、どうしたいのかな？」

強張った笑みを浮かべる渚の背中に、巨大コアラの腕がまわる。

コアラの体臭だろうか、わずかな獣臭さが、鼻をつく。半ば引き摺られるようにして、渚は一軒の家の中へと連れ込まれた。

1．コアラは肉食ではない。

2．コアラは怖がったそぶりは見せなかった。したがって、過去に人間を見たことがある可能性が高い。

3．家や井戸、農耕の様子からしてこれらコアラはそれなりに知的である。

……などと指折り数えて、渚はとりあえず殺されることはないと思ひ込もうとした。

コアラの家の内部はまことに質素なものであった。寢床だろうか、あるいは保存食なのだろうか、乾燥した植物の葉や茎が積まれた一角。水が満たされた大きな壺がひとつ。なんに使うのか判らない特大の漬物石のようなものが二つ……椅子なのか？ 床には、畳半畳ほどもある植物繊維の平べったい塊……見た目も手触りも乾燥系瓜

にそっくり……が、何枚も敷き詰めてある。

渚はそこに大人しく座っていた。向かい側……唯一の出口側には、例の巨大コアラが短い脚を器用に折りたたんで座っている。いまさらじたばたしても仕方がない。かえって危険な相手だと思われ、警戒されるだけである。

……これで、タイムスリップ説とテレビ局説は消えた。

渚は頭を抱えてわめき散らしたい気持ちをぐっところえて、状況を客観的に分析しようとした。こうなってくると、UFO説も怪しい。異世界なのか？ それとも『コアラの惑星』？ ……馬鹿な。それとも『コアラの里』？ ……それじゃお菓子だよ。

ひとり突っ込みをしながらしばらく待つうちに、家の中に新顔のコアラがのっそりと入ってきた。手に、クリーム色のさほど大きくはない物体をふたつ載せている。

巨大コアラが、新顔コアラからその物体をひとつ受け取って、なぜか自分の肩にひょいと載せた。次いで近づいた新顔コアラが、渚にもその物体を差し出す。渚は躊躇しながらも、それを受け取った。見た目も大きさも、それはシロップをかける前のカスタードプリンによく似ていた。掌でぶるぶると震えている様は、そっくりしか言いようがない。違いといえば、見た目よりも重いことと、結構温かいことくらいか。出来たてなのか？

食物を与えて歓待しようというわけだろうか。渚はそっと匂いを嗅いでみた。かすかに甘い匂いがする。バニラに似た、柔らかい匂い。

「食べるな。それは食べ物ではない」

巨大コアラが言った。

そのプリンそっくりの物体の名は、グエと言らしい。

「ひとつひとつの塊が個体であると同時に、巨大な集合体の一部でもあるのだ」

渚の問いかけに、巨大コアラはそう答えてくれた。

「グエは触れている者の気持ちを汲み取り、発した言葉の意味合いを別のグエに伝える。情報を受け取ったグエはその意味を別の言葉に直し、触れている者に教えてくれるのだ」

「はあ。便利なものね」

有体に言ってしまうえば、感情移入補助機能つき万能翻訳機代用生物、といったところらしい。

「そなた、空飛ぶ善き者たちの客人であろう？」

巨大コアラが、訊く。

「……そうらしいけど」

やや逡巡した後、渚は曖昧にそう答えた。空飛ぶ善き者たちが何者だか知らないが、コアラたちが渚の正体をそう思い込んだ上で友好的に接していてくれるのなら、とりあえず否定すべきではない。「若い者をキツネの村まで走らせた。あそこにはモトローラがあるから、明日には迎えが来よう」

「モトローラ？」

渚は首をひねった。モトローラといえば、アメリカの高名な通信機器メーカーである。無線機や携帯電話の分野では、かなりのシェアを誇っている。それが、キツネの村（コアラだけじゃないのか！）にあるということは……。

人間がいるのだ。この世界には。

「まあ、くつろがれるがよい。食事でも運ばせよう」

「食事はありがたいけど……」

渚は苦笑した。大皿に盛られたユーカリの葉でも出てきた日には、笑うしかない。

「安心されよ。人間の好む食物くらい、知っておるでな」

「……すっごい食べにくいんだけど」

出された食事は思ったよりまともなものであった。大きな鉢一杯の水。よく茹でである正体不明の白っぽい肉の塊。セロリに似た植物の茎三本。胡桃にそっくりなナッツが盛られた木碗。どう見ても

リンゴにしか見えない果実ひとつ。傍らには高級旅館の仲居さんのごとく、一匹のコアラが控えていてくれる。

食べにくい原因はギャラリーの存在にあった。七匹ほどのコアラが押し付けてきて、渚を注視しながら座っているのだ。いずれも身体が小さいから、おそらく子供なのだろう。人間を見かけても驚かない程度に慣れてはいるが、それでもその存在は興味深いものらしい。……外国人旅行者を見かけた昭和三十年代の田舎の小学生といったところか。

出て行ってくれ、と言いたいところだが、あいにく仲居役のコアラを含めてだれもグエを載せていない。しばらく考えた末に渚はコンビニ袋を探り、中から三冊の雑誌を取り出した。適当なページ……もちろん写真やイラストが派手なところ……を開き、仔コアラたちに差し出す。

すぐに仔コアラたちは読書に夢中になった。書物を読む習慣はないらしく、ページをめくる手付きはぎこちないが、新たな絵や写真が現われるたびにはしゃいでいるのが判る。渚はそれを横目にしつつ、添えられていた木製の二股フォークを使って食事を開始した。おっかなびつくり噛んでみた肉は思ったよりも柔らかく、塩気が少なくて美味しいとは言えなかったが、鶏肉に似た味わいだった。植物の茎は味も香りもセロリにそっくりで、青臭い野菜が苦手な渚には食べられなかった。リンゴはまず間違いなくリンゴだった。果肉がやや柔らかく、『ふじ』によく似た味と食感だ。ナッツは胡桃よりも甘く感じられた。

食事を終わると途端に眠気が襲ってきた。携帯を取り出し、時刻をチェックする。22:18。夜型人間の渚にしてみれば、これから元気が出てくるといった時間帯である。だが、今日はもう限界のようだった。なにしろ十時間近くに渡って慣れぬ山歩きをしたのだ。……シャワーとか要求しても無理だろうな。

渚は雑誌の取り合いをしている仔コアラを眺めながらそう考えた。このコアラたちが入浴の習慣を持っているとは考え難い。水浴びく

らいはするのも知れないが、いくら相手がコアラとはいえ彼らの前に裸をさらす気にはなれなかった。

……結局、異世界に飛ばされたと言うわけか。

自分の置かれた状況をもう一度吟味した上で、渚はそう結論付けた。翻訳生物の力を借りてとはいえ喋る巨大コアラが存在するなどというふざけた世界など、通常ではありえない。いささか安直だとは思うが、よくファンタジー映画やアニメ、あるいは小説に出てくるような『異世界』に居るのだと考えざるを得ない。……これからどうすべきだろうか？

最優先で考慮せねばならぬことは、まず身の安全だろう。次いで、健康の維持。これもサバイバルの基本である。映画であれば、主役は冬の海に落ちたりしても決して風邪などひかないが、現実はそのはいかない。医者もおらず薬局もないところにおいては、軽い疾患でも命取りになりかねないのだ。そして可能性がある限り、元の世界へと戻る算段をつけねばならない。……どうやってかは、知らないけど。

巨大コアラの言を信用すれば、明日には空飛ぶ善き者たちの迎えがくる。渚のことをその客人だと思い込んでいることから見て、その連中が渚のような人間である可能性は高いだろう。運が良ければ、彼らが元の世界へと帰る方法を知っているかもしれない。

……だめだ。眠いや。

渚はそれ以上の思考を諦めた。窓に掛かった粗い織り方の布越しにも、外の光が薄れてきているのがわかる。こちらの世界にも、やはり夜があるのだ。コアラたちにもう寝ることを判らせようと、部屋の隅に行つてごろりと横たわる。察した仲居コアラが、仔コアラたちに鋭い口調で何か言う。仔コアラたちは意外にあっさりと家から出て行つたが、雑誌は三冊とも手にしたままだった。何匹かが渚に向かつて一声ずつ掛けていったが……おやすみなさいとでも言うてくれたのだろうか。

仲居コアラがささやくように何か言いながら、糸瓜座布団を渚の

身体に何枚か掛けてくれる。渚は眼を閉じた。
……ノミとかいたら、やだな。

1 謎の村（後書き）

第一話をお届けします。本作は生物学的SF風味の異世界空戦もの中篇小説です。あくまでSF分は風味ですので、ご理解のほどを。投稿は週一回、土曜日の予定です。ゆつくりとしたペースですが、一話の分量が結構ありますし、新作が書きあがるまでのつなぎ連載ですので、ご容赦下さい。これでなんとか三ヶ月ばかり時間を稼げば、次は新作をお届けできる……かもしれません（汗） 本作は数年前に書いたものであり、年代設定も数年前になっております。ご注意ください。

では前作および前々作をお読みいただいたありがたい読者様へのご挨拶を。まことに申し訳ありません。今回も空ものです。執筆順に言えば、本作 バタメモ 殻竿の順になります。最初に断言しておきますが、本作はハッピーエンドです（笑） どうぞ安心してお楽しみ下さい。

2 サン格拉斯の男

夜型人間にしては、渚は寝起きのいい方であった。
むくりと起き上がる。

眠った時と同じ、コアラの家の中であった。

…… やっぱり、夢じゃなかった。

目覚めたら自分の部屋とか、病院のベッドの上とか、授業中にうたた寝しただけとかの展開を期待していたのだが、現実は甘くなかった。渚はため息をつく、身体を覆っていた糸瓜座布団を取り除けた。

室内には誰もいなかった。外はもう明るくなっており、窓をふさいでいる布に開いた穴から差し込んだ陽光が、いまだ用途のわからない漬物石にまばゆい円を描いている。夕食の後片付けはなされていたが、水の鉢だけは残されており、そこには一杯に清水が張られていた。

ばりばりっ、という音が外から聞こえる。

渚は素早く立ち上がった。そうだ、この音で目覚めたに違いない。なんらかの機械音。おそらくは、エンジンが発する音響。人間がいる証拠。機械文明の奏でる醜惡な音楽。

渚は慌てて外へと飛び出した。コアラたちも音を聞きつけたらしく、三々五々家から出てきつつある。

渚は音源を捜した。

それは空にあり、低速で移動していた。…… ヘリコプターだ。

渚は巨大コアラの言葉を思い出した。…… 空飛ぶ善き者たち。

ダークグリーンに塗られた比較的小型のヘリコプターは、村はずれの空き地へと向かい徐々に高度を下げていった。渚は足早にそこへと向かった。コアラたちも集まりつつあったが、彼らは空き地の周囲に立っているだけで、決して中央部に立ち入ろうとしていないことに、渚は気付いた。コアラたちはヘリコプターがどういうもの

で、それが今から何をしようとしているのか知っているのだろう。

渚が空き地へとたどり着いたのは、ヘリコプターが着陸する数秒前だった。居並ぶコアラたちの後ろに立つ。どのコアラよりも渚の方が背が高いので、着陸を見物する分には何ら支障がなかった。

ヘリはアルエートエーエーだった。フランス製の、古い……たしか初飛行は1960年代のはずである……がベストセラーとなった機体である。キャビンの後上方に剥き出しになっているターボシャフトエンジンが、いかにもクラシックな感じだ。

やかましい音と風を巻き起こしながら、アルエートエーエーが高度を下げる。テイルブームに、黒いブロック・レターで『RQAF』と描いてある以外に、マークやロゴの類は記されていない。何の略だろう？ AFは当然エアフォース（空軍）だろう。ロイヤル・カタル？ いや、カタルはたしか王国とは名乗っていないはずだ。他にQから綴る国なんてあっただろうか？ 渚は思い出せなかった。あるいは、全く別の組織の略称なのか。色からすると、軍隊かなにかの所属っぽい。

アルエートエーエーの降着装置は、スキッドではなくタイヤである。三つのタイヤが、緑の芝草を押し潰す。パイロットがクラッチを切り、ローターが空転を始める。

キャビンのスライド式ドアが開く。中から現われたのは、コアラではなく人間だった。空色のカバールを身に付け、濃いサンダラスを掛けた外国人男性。身長は百八十センチを軽く越すだろう。顔立ちは明らかにヨーロッパ系だが、やや浅黒い。髪は黒くて、ちよつとウェーブしている。歳は三十前後くらいか。サンダラスのせいかも知れないが、イタリアかフランスのギャング映画の端役俳優といった雰囲気だ。

降りてきたその男性は、居並ぶコアラに臆することなく、すたすたと渚に向けて歩み寄ってきた。渚の前にいたコアラがさつと脇に寄る。その男性は快活そうな笑みを浮かべながら、渚に向かって右手を差し出しつつ、何か言った。辛うじて、『パルドン』と『マ

ドモアゼル』という単語だけが聞き取れた。

……わ、フランス語だ。

反射的に右手を差し出し握手しつつ、渚はうろたえた。巨大コアラからもらった（あるいは、貸してもらっただけか？）グエを忘れてきたことに気付いたのだ。男性の左肩には、ちょこんとグエが載っている。

「あー、ボンジュール、ムッシュウ。ケ……じゃなくて、ジュ、マ、なんだっけ」

慌てる渚を見て、男性がポケットからグエをつかみ出した。安堵の息を漏らす渚の肩に、そっと載せてくれる。

「これでいいだろう」

途端に、男性の言葉が判るようになった。

「……ありがとう」

「えらく手間取ったぞ。こんなところに現われるなんて。向こうで指定された場所にいなかったのか？」

「……はあ？」

男性の言葉に、渚は怪訝な顔で問い返した。『指定された場所』とはいったい何のことだろうか？ 意味が判らない。……さしものグエも、日仏翻訳は苦手なのか？

「まあいい。乗っていてくれ。俺は、村長に礼を言っておく」

男性が、親指でヘリコプターを指す。渚はうなずいて、エンジンをかけたままのアルエートエーエーに向かった。キャビンの中に、頭を突っ込む。機内は狭かった。四人掛けのベンチのような簡素な座席があり、その前方に操縦席を含むシートがふたつ。右側の主操縦席に座るフライトヘルメット姿の人物が振り返り、白い歯を見せた。まだ若い男性だ。この人も先ほどの男性と同様浅黒いが、顔立ちはもつと東南アジア的である。肩の上のグエを見て、渚は安堵した。言葉で苦労しなくて済む。

「やあ。遠慮しないで座ってくれ」

男性が大声で言う。エンジンが掛かったままなので、機内はそう

とうやかましかった。渚はしばし戸惑ってから……何しろキャビンの床の高さが腰近くまであるので、ミニスカートでよじ登るにはちよっと勇気がいる……左手にパイプ状の足掛けがあるのを見つけ、それを利用してキャビンに入り込んだ。笑顔のパイロットが、無理やりに身体をひねって手を差し出す。

「ミゲル・ヴィダノ。ミゲルと呼んでくれ」
「城山渚です」

渚の名乗りを聞いて、ミゲルの笑みが大きくなった。

「そうか、シロヤマというのか。お嬢さんは」

渚はシートベルト付きの後席に腰を下ろした。ほどなく、先ほどの男性が乗り込んできた。

「忘れ物はないか？」

渚はしばし考えた。携帯と財布、それに『ウェーブ』は身につけている。雑誌は仔コアラたちに持ち去られてしまった。新しいグエはもらった。コンビ二袋にはまだ手付かずの菓子と、焼き魚三匹が残っているが……いまさら取りに戻るほどのものではない。

「ないわ」

「よし。ミゲル、離陸してくれ」

スライド式ドアを閉めた男性が、言う。

「了解」

ミゲルがクラッチを繋ぎ、止まっていたローターが回り始めた。

「自己紹介しておこう。エリック・ユステールだ」

サングラスの男が、名乗る。……姓名からして、おそらくフランス人だろう。

「城山渚です」

「シートベルトを締めろ。ミゲルの操縦は荒いからな」

渚は慌ててベルトを締めた。……自動車の後部座席のものとないて変わらな、ちやちなベルトだ。

「こいつも必要だな」

エリックと名乗った男性が、左側の操縦席からフライトヘルメッ

トをふたつ拾い上げた。ブームマイクの付いているヘリ用のタイプではなく、古いジェットパイロット用のものらしかった。エリックが、自分でひとつを被り、残るひとつを渚に差し出す。

傷だらけで、あまり清潔そうでないヘルメットだったが、渚は文句を言わずに被った。とたんに、エンジンの騒音が和らぐ。

ぐらりとヘリコプターが揺れ、地面を離れた。垂直上昇して高度を稼いでから、機首を下げ、加速する。

「どこ行くんですか」

渚は口をエリックのヘルメットに近づけて訊いた。

「Fベースだ」

……ベースってことは、軍事基地なのだろうか。

「どこなんです、ここ？」

「詳しい話は後にしよう。この騒音じゃ、会話は重労働だからな」
エリックが、声を張り上げた。

「風景でも楽しんでくれ。三十分近くのフライトになるから」
仕方なく渚は、窓外へと眼を転じた。後部座席横の窓は幅一メートル、高さ五十センチくらいあって、視界は良好だ。ヘリコプターはそれほど高いところは飛んでいない。眼下を丘が流れ、樹林が飛び去ってゆく。遠くに見えている灰色の線は、河だろうか道だろうか。

不意に、渚の眼に街が飛び込んできた。コアラの集落よりずっと大きな街だ。整然と立ち並んだ家屋がいくつかの街路を形成し、四方へと車でも通れそうな立派な道が伸びている。平屋建てだが、一般の家屋よりももっと大きな建物も眼についた。学校か何かだろうか。相変わらず機械文明の証拠たる電柱やコンクリートを使った建造物、自動車などの姿はない。小さ過ぎて細部は見極められないが、多くの住人が街路を歩んだりたたずんだりしているのが判った。彼らもコアラなのだろうか。それとも、別の動物か。あるいは、人間なのか。

街との遭遇をきっかけにしたかのように、眼下は急に賑やかにな

った。畑や集落、川に掛かった橋、何の用途か定かでない石造建築物などが、次々と現われる。渚は飽かずそれらを眺めた。どうやらアルエートIEEEはこの妙な文明の中心地に近付いてゆくらしい。

渚の感覚で三十分が経過したところ、前方に空港らしきものが見えてきた。白っぽい滑走路と、広々としたエプロン。大きないくつもの建物。あれが、Fベースだろうか。

パイロットのミゲルが、無線交信を始めた。タワーを呼び出し、進入許可を求めている。交信相手は、Fベースコントロール、と聞こえた。

「そろそろ到着だ」

ずっと腕組みをして微動だにしなかった……寝ていたのかも知れないが、サングラスのせいで定かではない……エリックが、あくび混じりに言った。

「あれがFベースね」

「そうだ。正式にはフルステンベルク・エアベース。長くて面倒くさいからFベースで通っている」

ヘリコプターが旋回し、高度を下げ始めた。Fベースの細部が見えてくる。建物のいくつかは普通の鉄筋コンクリート造りのようだ。管制塔と思しきタワーも見える。頂部には、オープン・ラティス式のレーダーアンテナが付いており、それがゆっくりと回転していた。向こう側のいくつかの大きな建物は、格納庫だろう。エプロンには飛行機も並んでいる。いずれも小さく、日本の空港で普通に見られるような大型のジェット旅客機は一機もない。どうやら、飛行機はみな小型の軍用ジェット機のようなのだ。渚は機種を識別しようと眼を凝らした。直線翼のMB326かMB339、デルタ翼のコンパクトなA-4が三機、ホークみたいに見える低翼機、高翼のアルファジェットかS211と思しき機体、ミラージュIIIから5、見間違いない後期型のファイター、おそらくL-39、これも間違えようのないハンター、A-7、二機のF-5といったところが、ずらりと並んでいる。……旧式な戦闘機や攻撃機と、新しいとは言

えぬ練習機が中心のようだ。機種もその生産国もばらばらで、どう見ても普通の正規空軍の装備とは思えない。まるで一昔前の航空ショーの展示機列線か、航空博物館の野外展示場のようだ。

すこし離れたところには駐車場があった。タンクローリーを含む数台のトレーラーやトラックと、もっと小さな車は何台か停めてある。さらに離れたところには円筒形の貯油タンクが数基並んでいる。渚の眼は、Fベース周囲に等間隔に設けられた円形の土盛りと、その中心に据えられたいびつな形の物体を見つけ出した。一見すると布かなにかで覆われた銅像か野外展示の彫刻作品に見えるが、軍事基地の周辺にそんなものが並んでいるはずがない。まず間違いなく防水カバーを掛けられたSAM（地対空ミサイル）かAAA（対空砲）だろう。

アルエートIEEIがさらに高度を下げる。軽い衝撃とともに、着陸した。ミゲルがエンジンを切るのを待ってから、エリックがスライドドアを引き開ける。

エリックの手を借りて、渚はヘリコプターを降りた。あらためて古臭い機体をしげしげと眺める。

「ずいぶん年季が入っているみたいだけど……」

「それを言わんでくれ。アルエートIEEIは名機だぞ」

「このRQAFって、なに？」

渚はテイルブームの四文字を指差した。

「ロイヤル・キャリエス・エア・フォースの略だ」

「……キャリエス王国空軍？」

渚の地理の成績は悪くない。だが、キャリエスなどという国に聞き覚えはなかった。

「そうだ。言ってみればRQAFは国王と契約した傭兵空軍だ。……」

「まあ、詳しい説明は落ち着いてからにしよう」

エリックが、渚の身体をじろじろと見る。不意に渚は赤面した。昨日はお風呂に入れなかったし着替えもしていない。そうとう薄汚れた姿のはずだ。おまけに、タンクトップとミニスカートという軽

装である。

「宿舎へ行こう。まずはシャワーと着替えだな」

案内された宿舎は狭かったが、きれいであつた。リゾートホテルの一番安いシングル部屋、といった程度のグレードだろうか。

「これを着てくれ」

エリックが、ビニール袋に入つた衣類とシューズを渡してくれた。「シャワーはそっちだ。湯は出るが、無駄遣いしないでくれ。終わったら、ドアを出てまっすぐ右に行けば、食堂に出る。そこで待っているから」

そう言い置いて、エリックが出てゆく。

渚はとりあえず渡された衣類を調べた。淡いオレンジ色のカバーオールと、ベージュのボディースーツのような下着、厚手のソックス、それに簡素な白いブラとショーツが入っていた。いずれも新品らしい。サイズは合っているようだ。シューズはありふれたバスケットシューズのように見えた。靴底には『メイド・イン・タイワン』と記されている。こちらも、サイズはぴったりだった。……直接測つたわけでもないのに、即座にこれだけサイズの合う衣類を用立てることはまず不可能だろう。この着替えは、渚がこの世界に現われることを、エリックらが予期していた証左といえる。

渚はバスルームで念入りに身体を洗い上げた。さっぱりとしたところであてがわれた服を身につけ、ざつと部屋を調べてみる。備え付けの備品は、見事なまでの多国籍だった。LGのテレビに東芝のDVDプレーヤー。ハイアールの小型冷蔵庫。電気ポットはフィリッポスのロゴがついている。渚は試しにテレビの電源を入れてみたが、リモコンをいくらいじってもひとつも電波を捕まえることができなかった。あきらめて、部屋を出る。言われた通りに左へと歩んでゆくと、すぐに広々とした部屋に出た。いくつものテーブルが置かれ、壁際にはずらりと自動販売機が並んでいる。そのうちのいく

つかは、日本の街角にあってもおかしくないブランドの飲料を売っていた。

エリックはすでにテーブルのひとくに座り、マグカップの飲料をすすっていた。サングラスは外しているので、想像していたよりもずっと柔和な薄茶色の眼が見えている。テーブルの上には、よく使い込まれて縁がぼろぼろになった紙製の書類フォルダが置かれていた。

渚を見てすっと立ち上がったエリックが、椅子を引いてくれた。渚は礼を言って座った。このあたり、さすがにフランス人男性である。

「腹が減っているなら、何か食べるといい。中途半端な時間だから、あまりいいものはないが……」

「ぜひいただきます」

朝食抜きは渚はそう応じた。

「フリーメスになっているから、好きなものを取って食べればいい。スウェーデン方式……いや、カフェテリアみたいなものだったほうがいいやすいかな」

マグカップを持って立ち上がりながら、エリックが説明した。端にあるカウンターに、銀色に光る保温式の寸胴や食物を盛ったアルミパンがずらりと並んでいる。渚は盆をひとつ取ると、それに適当に食物を盛った。エリックが、自分のマグカップにコーヒーのお代わりを注ぐ。

カウンターの奥は、厨房だった。渚はどんな人がこの料理を作ったのかと覗き込み、あやうく爆笑しかけた。

白い前掛けを着け、中華包丁で野菜を刻んでいるジャイアント・パンダなんて、ギャグ以外のなにものでもあるまい。

「ムッシュUPか。腕は確かだよ」

なぜパンダが、という問いに、エリックが澄まして答えた。たしかに料理は美味しかった。特にスープは絶品だった。和洋中

どの味ともとれる微妙な無国籍の味わいだったが、実に旨い。

「いろんな国の奴が働いてるからな。自然に味が無国籍になる」

渚の指摘に、エリックがにやりと笑う。

「……俺もいつも間にかこんな薄いコーヒーを旨いと思うようになった」

「さて」

一通り食べ終えて人心地がついた渚は、あらためてエリックを見据えた。

「ここ、どこなの？」

「キャリエス王国北部辺境地区のフルステンベルク・エアベースというのが正確な答えだな。もちろん、こんな答えで君が納得するはずはないが」

しごく真面目な表情で、エリックが続ける。

「映画が何かで見たことがあるだろう。主人公が、まったく別な世界へ……言わば異世界へ飛ばされちまう話を」

「異世界なの、ここ？」

「……というよりも、どこか別の惑星だろうと言われている。地球と繋がっているけどな」

「別の惑星？」

「どこにあるかは知らんが」

エリックが、いかにもヨーロッパ人らしい仕草で肩をすくめた。

「日が暮れたら、夜空を見上げてみるといい。知っている星座はひとつも見えないから。月は大小あわせて七個もあるしな。ちなみに、ここの一日は二十六時間と七分程度だ。一年はなんと二年半近い」

「めまいがしてきたわ」

渚は頭を振った。異世界に来てしまったということは薄々気付いてはいたものの……とんでもないところに来てしまったようだ。

「住民は、あのコアラとかの動物なの？」

「そうだ。知的な哺乳類が住人だ。人間はいない。地球からやってきた我々を除いてね。他にも色々動物がいるが、人間に匹敵するほ

ど知的なのはいない」

「あたしは何でここに連れてこられたの？」

「……それはおいおい判ることになっている」

渚の質問を、エリックがはぐらかす。

「別に悪意があるわけじゃない。目的を知らせないのは、先入観なくこの世界を見学して欲しいからだ」

「見学？」

「そう。君はいわばRQAFのゲストなんだ。俺はその案内役を仰せつかっただけだ。……おそらく君が一番心配しているのは、元の世界に帰れるかどうかだと思うが……それについては安心してくれ。希望すれば、いつでも帰ることができる。それは保証する。俺も、半年に一回くらいは帰ってる」

エリックが、断言する。

「どうやって帰るの？」

「猫どもの力でだ」

「猫ども？」

「キャリエス王国国王陛下直属の技術者集団さ。平たく言えば、宮廷魔術師どもだな。この世界の猫は、自由に地球との間を行き来できるんだ。他の人間や物品を移動させることもできる。……地理的な精度はやや甘いがね」

「……どうやってそんな芸当が……」

「俺に聞かれてもわからんよ」

エリックが、ゆっくりと首を振った。

渚はぬるくなってしまった紅茶を一口飲み下した。誰の意思によつてかは教えてもらえなかったが、渚が計画的にこの世界に連れて来られたことは確かなようだ。とりあえず、このエリックは悪意ある人物ではないと判断していいだろう。……少なくとも、黒幕たる誰かさんの真の目的が判明するまでは。

「じゃあ、この国……キャリエス王国について聞かせて」

「よし。……こいつを見てくれ」

エリックが、書類フォルダから一枚の紙を抜き出した。

それは一枚の多色刷りの地図だった。海と思われる水色の中に、サツマイモを連想させる細長い形状の島が浮かんでいる。

「これが、キャリエス島だ。縮尺は百万分の一。この尖った岬がある方が、北になる。……ああ、北というのは磁方位ではなく、便宜上チャートの上で天頂方向を北と呼称しているんだが……島は南北に約五百キロと言ったところだ。幅は最も広いところで百二十キロ見てのとおり、細長い島だ」

エリックが、地図を指差しながら説明する。

「最も南側、濃い緑に塗ってあるところが大森林地帯で、住人は住んでいない。そのすぐ北側から平原地帯が始まる。住人の大多数はそこに住んでいる。あの赤い丸が王都の位置だ。すぐそばにある紫色の四角がオームラA B。R Q A Fの本拠があるところだ」

「オームラ？」

「ベースの名前さ。あちこちにあるオレンジ色の丸が、地方都市だ。オームラから北へ約百キロ行った紫の四角が、このFベース。この周辺は辺境地区と呼ばれる丘陵地帯になっていて、見てのとおり街は少なく、当然住人の数も少ない。ここから三十キロほど北上すると、キャリエス王国の領域が終わる」

渚は地図をしげしげと眺めた。島の北部には大まかな地形が描き込まれてはいるが、街や施設を表す記号が絶無であることに気付く。「島の北のほうはどうなってるの？」

「高原地帯は、ヴォーゲオスの領域さ。我々の、敵だ」

「ヴォーゲオス？」

「知ってるだろう？ 例の虫さ」

エリックが、フォルダの中を探って一枚の写真を取り出した。二十五センチ×二十センチくらいの大きなものだ。

写真には、一匹の昆虫と思しき生物が写っていた。地面に横たわったところを写したもののようだ。甲虫の一種らしく、カブトムシに似た印象だが頭部が細長く、そこだけ見ると蜂のようにも見える。

胸部と腹部は一体化したかのように繋がっており、かなりスマートだ。前肢も妙な形をしていた。まるで先端に卓球のラケットを付けているかのような。色はやや光沢のある濃い黄土色で、砂漠地帯の軍隊が車両や航空機の塗色として多用するサンドブラウンに見えないこともない。……全体の形状をしいて例えれば、カミキリムシに蜂の頭部をくつつけたような、というところか。

「見たことのない昆虫ね。何なの？」

「これがヴォーゲオスだ。正確には、DDと呼ばれるヴォーゲオス」
「DD？」

「ドブリュートなんか・ダリヴァン。ここの学術語で、飛行する戦士と言う意味だ。ドブリュートなんかが長い上に発音しにくいんで、通常DDと呼ばれている」

「この昆虫がどうかしたの？」

「俺たちの敵さ。RQAFは、飛行昆虫DDを倒すために設立された傭兵空軍なんだ」

「……たかが昆虫相手にジェット戦闘機を飛ばすの？」

渚は呆れた。ネズミ駆除に対戦車誘導ミサイルを持ち出すようなものではないか。あるいは、サメ退治に原子力潜水艦を出港させるようなものか。

「たかが昆虫と言うな。スケールを理解してから言ってくれ」

エリックが、別の写真を滑らせてよこす。

今度も横たわるDDの写真だったが、すぐ脇に人間がしゃがんでいた。

「……でかい。」

渚は息を呑んだ。DDは昆虫の常識を超えた大きさだった。写っている人間の大きさと比すれば、おそらく全長五メートルくらいはあろう。

「信じられない……」

渚は首を振った。状況が状況でなければ、どこか外国のふざけたタブロイド紙がでっち上げた合成ジョーク写真にしか見えない。

「連中の巡航飛行速度は百八十ノット。最高速度は二百五十ノット近く出る。ヘリコプターじゃ追いつけないし、ターボプロップのC O I N機でもろくにアドバンテージを得られない」

「二百五十ノット!」

渚の眼が点になった。メートル法に直せば、時速四百六十キロというとてもない高速である。いくら大きいとはいえ、昆虫ごときがそれほどの高速で飛行できるのだろうか?

「実際飛んじまうんだから仕方がない。秘密は上翅じょうしにある。昆虫に詳しいか?」

エリックが訊く。渚は首を振った。さしもの彼女も昆虫に関しては、ごく普通の女の子と同様興味も知識もない。

「有翅の昆虫は通常二つの羽根……前翅と後翅を一對ずつ持っている。トンボや蝶の羽根を思い浮かべてくれればいい。甲虫では前翅が上翅と呼ばれる硬いカバーに変化し、後翅はその内部に折りたたまれている。だから飛行に際して使われるのは後翅だけで、ゆえに甲虫はトンボやハエや蜂に比べ飛ぶのが下手くそだ。だが、D Dはとんでもないことをやってのけた」

エリックが言葉を切り、薄笑いを浮かべる。

「翼を持つ動物は、すべてが羽ばたきによって推進力と揚力を同時に生み出して飛行している。鳥だろうが、蝶だろうが、蝙蝠だろうが、それは変わらん。人間も長い間同じ方法を試みて、ことごとく失敗してきた。ヴォアザン兄弟やライト兄弟が成功したのは、翼を揚力発生の手段に限定し、別個に推進機関を設けたからだ。そう。D Dは巡航の際に、後翅を推進力を得るために使っている。身体の左右に張り出された上翅が大きな揚力を生み出すんだ」

「……はあ」

「進化の妙というやつかな。D Dの上翅の断面形は、その昔にN A C Aが開発したんじゃないか思えるほどに見事な翼断面をしている。しかも、前縁と後縁は柔軟な材質でできており、飛行速度に応じて翼面積や断面形状を変化させることができる。身体自体も空気抵抗

が少なく、大きさの割には軽量だ。……なにしろ、フルモノコック構造だからな」

エリックが笑う。フルモノコック構造というのは、外皮だけで構造を支える様式のことである。たしかに、甲虫は外骨格で身体を支えているだけだ。

「しかし……これくらいは手紙に書いてあつただろう。手紙を読まなかったのか？」

エリックが、怪訝そうな表情で訊ねる。

「……手紙？」

「COの手紙だ。……受け取らなかったのか？」

「怪しい手紙の類は受け取らないようにしているけど……」

渚はとりあえずそう答えた。いわゆるファンレターの受付は各掲載誌の編集部気付のものしか受け取っていない。本来住所を公表していない自宅に送りつけられる手紙や小包の類は、気持ち悪いのでその大半は即座にゴミ箱行きとなる。

「だから自宅にいなかったんだな。どうりで、コアラの村なんて変なところに現われたわけだ」

エリックが、嘆息した。

「どういうこと？」

「猫どもの移動の魔術を正確に行うには、二点間の位置があらかじめ判明していることが必要なんだ。もしずれがあれば、移送先の出現予定位置も大幅にずれてしまう。君の場合出発地が自宅、移送先がFベース近傍になっていた」

エリックが、身振りを交えて説明する。

「COってのは、コマンダー・オフィサーのこと？」

渚は訊いた。英語圏の軍隊、特に空軍では指揮官を意味する一般的な呼称である。

「そうだ」

「その手紙って……」

不意に鳴り出したブザーのような耳障りな音響に、渚の問いが中

断される。

「おっと。ヴォーゲオスのお出ましのようだ」

エリックが素早く立ち上がる。渚も、釣られるように腰を浮かした。

「どうしたの？」

「ヴォーゲオス。正確に言えばDDの出現さ。ちょうどいい。ブリーフィングルームに一緒に来てくれ」

2 サン格拉斯の男（後書き）

第二話をお届けします。用語解説 アルエートIEI/フランスのシュド・アビアシオンが製造したSA316およびその改良型SA319 オープン・ラティス/レーダーアンテナ形状のひとつ。やや湾曲し、むき出しになったラティス状で、対水上/対空搜索や航空管制などに多用される MB326/イタリアのアエルマツキが製造した直線翼練習機兼軽攻撃機 MB339/MB326の後継として開発された直線翼練習機兼軽攻撃機 A-4/ダグラスがアメリカ海軍艦上攻撃機として開発したデルタ翼機 ホーク/イギリスのホーカー・シドレーが開発した練習機。アメリカ海軍採用のT-45のベースでもある アルファジェット/フランスのダッソーと西ドイツ（当時）のドルニエが共同開発した練習/攻撃機 S211/イタリアのSIAI・マルケッティが開発した練習機 ミラージュIEI/フランスのダッソーが開発したデルタ翼戦闘攻撃機 ミラージュ5/ミラージュIEIの攻撃機バージョン フィッター/ロシアのスホーイ設計によるSu-7/17/22系列のNATOコードネーム L-39/チェコスロバキアが開発製造した練習機 ハンター/イギリスのホーカー・シドレー開発の戦闘攻撃機 A-7/アメリカのLTV開発の艦上攻撃機 F-5/アメリカのノースロップ開発の戦闘攻撃機 AB/Air Base 航空基地 COIN機/COINはCounter Insurgency（対暴動）の意味 軽度な戦闘に使用される対地攻撃機 ヴォアザン兄弟/ガブリエル&シャルルのフランス人兄弟 ヨーロッパで二番目に動力飛行を成し遂げた NACA/National Advisory Committee for Aeronautics 国立航空諮問委員会 アメリカ政府が航空技術発展のために設立した組織 のちのNASAの母体である

3 アルファジェットC

ブリーフィングルームは、学校の教室くらいの広さがあった。よく会議室などにあるようなキヤスター付きの大きな黒板と、何脚ものパイプ椅子、壁に張られた地図や表の類なども、教室らしい雰囲気づくりに一役買っている。もっとも、地図に描かれていたのは見たこともない地形であったが。

すでに部屋の中には十名ほどの人々が集まっていた。ほぼ半数が白い肌のヨーロッパ系だが、アフリカ系が二人、東洋人、アラブ系らしい人、それに東南アジアあたりと思しき淡い褐色の肌の痩せた人がいた。色の違いはあれど、全員が同じようなカバーオール姿だ。……女性だ。

渚は同性の姿を認めて急に嬉しくなった。黄色味の強い金髪をショートボブにした、三十前後と思しききれいな人だった。着ているのは、ややくすんだ真紅のカバーオールだ。その女性が、渚の姿を認めて薄く微笑んだ。

「よし、みんな集まったな」

集った人々の中で一番年上……五十は越えているだろう……の男性が、大きな声を張り上げた。頭頂部が禿げ上がった、目つきの鋭い男で、ちよつとジャック・ニ科尔ソンに似ている。やや小柄だが、凄まじく分厚い胸板をしていた。

「例によってマス・トラックを捉えた。規模はブルー。四機出した」

ニ科尔ソン似の男が、ちよつとしゃがれ気味の声で言う。

「XO、いいチャンスだから、俺がこのお嬢さんを連れて出ますよ」
すかさず、エリックが言った。XOと呼ばれたニ科尔ソン似の男……ということ、副長なのだろう……が、渚を一瞥してからエリックに視線を戻し、軽くうなずく。

「……いいだろう。ウィングマンは？」

「ホルヘで」

「そうこなくっちゃな、相棒」

やや小柄で瘦身の若い男性が、そう言いながらエリックの背中をどしんと叩いた。

「あとは誰を連れてゆく？」

XOが続けて訊く。

「アラートの二人で構わないでしょう」

「ヴァーリヤ、ブラサーン。行けるな」

「もちろんです」

「稼がせてもらいます」

金髪の女性と、東南アジア系の男性が相次いで答える。

「よし。行つて来い」

XOが深くうなずきつつ、静かに言った。

「俺の愛機だ」

「はあ」

エリックが自慢げに紹介してくれたのは複座の練習機、アルファジェットだった。イルカを思わせるずんぐりとした胴体に、高翼の後退翼。胴体側面、主翼の付け根左右に抱え込まれるように付いているやや小さ目のファンジェットエンジン二基。絞り込まれた後部に突っ立っている垂直尾翼。練習機だから、当然複座である。

すでにアルファジェットは、滑走路端の脇にあるいわゆるアラートエリアに引き出されていた。機首前方にはコンクリートの分厚い壁を土嚢で覆った掩体があり、万一搭載火器が暴発しても、他所に被害が及ばないようにしてある。機体には二人の男性と一匹のアライグマ……体長は一メートル以上ある……が張り付いて、飛行前点検に取り組んでいる。

見た感じ全長は十二、三メートルくらい、横幅は十メートルもない比較的小柄な軍用機である。練習機といってもむろん武装できるし、エンジンパワーもあるから旧式の亜音速ジェット戦闘機よりも

運動性能は良い。フランスと当時の西ドイツが共同開発した機体で、フランスが練習機として、西ドイツが軽攻撃機として大量採用した。渚の記憶では、輸出にもまずまず成功したはずである。

「アルファジェットEね」

渚は記憶をたどってそう言った。練習機タイプは、フランス語の『エコール』（学校）の頭文字を取ってそう呼ばれていたはずだ。『ほぼ正解だ。アルファジェットC。Eの輸出型だ』

渚は腰をかがめて機体の下を覗いた。胴体下部には大きなガンパツクが装着されており、左側に太い砲身が見えている。おそらくDEF A30ミリ機関砲だろう。翼下の合計四つのパイロンには、見慣れぬ小さ目のガンポッドが吊られていた。

「FNのHMP-400だ。口径は12.7ミリ。DD相手には、これで充分だ。20ミリを使う奴も多いし、UPK-23を好む奴もいるが。……おっと、紹介しとこう。機付長のベネンデレントだ」とことごと近付いてきたレッドカンガルを、エリックが渚と引き合わせた。大きな作業用エプロンに、工具がやたらと詰まったベルトを締めている。渚はカンガルと握手を交わした。

「渚を乗せておいてくれ」

エリックが言い、外部点検のために機体の周囲を回り始めた。

「ちよつと待つて。わたしが乗るの？」

「DDを見せとく必要がある。ちと早いが、COの意向だからな。大丈夫、危ないことはない」

機首アクセスパネルの閉まり具合を目視点検しながら、エリックが答える。

「Gスーツは？」

「必要ない。Gはプラスもマイナスもそれほどからん。……そうだ、トイレは済ませておけよ」

真顔で、エリック。

渚は急いでカンガルが指し示す建物へと飛び込んだ。

渚は今まで軍用ジェット機に乗ったことはない。これもいい経験

だろう。アルファジェットでは、ロシア取材でSu-27UBに乗ったことがあると、ことあるごとに吹聴しているシロクマにはかなわないが。

渚はカンガルーに促されるままにインテイク外側に設けてある蹴り込み式の足掛け……ご丁寧に赤枠で示してある……を使い、後席に潜り込んだ。カンガルーにレッグストラップを含むハーネスを締めてもらい、合成皮革の手袋とヘルメットを受け取る。……酸素マスク付きの、ちゃんとしたフライトヘルメットだ。カンガルーが身を乗り出して、ホースとラジオのコードをコネクターに繋ぐ。ついでにいじっていったのは、ラジオのボリュームだろうか。

「頼むから、何も触るなよ」

外部点検を終え、前席に乗り込んできたエリックが、機内インターフォンを通じて注意を促す。

「判ってるわよ」

応えながら、渚は違和感を覚えた。本来この機体は練習機であり、その場合訓練生が前席に、教官が後席に着くのが基本である。エリックが一人で乗る場合は、当然視界のいい前席に座るはずだから、渚が後ろに乗るのは当然といえば当然なのだが……。

カンガルーが再び顔を見せ、手を伸ばして渚が座るシートのセイフティ・ピンを抜いていった。

「エンジンスタートする」

エリックが宣言した。外部電源により、エンジンの回転が始まる振動が、渚の尻に伝わってきた。渚は眼前の計器パネルを注視した。右側エンジン回転計と排気温ゲージの数値がピンと跳ね上がり、着火したことを告げた。次いで、左側エンジンも回り出す。ほどなくカンガルーがまたコックピットに頭を突っ込んできた。渚のシート of セイフティ・ハンドルを上げてロックしてくれる。

「外部電源カット。キャノピーを閉める」

エリックが言った。モーターの唸りと共に、後席のキャノピーがゆっくりと下がってゆく。

「アーミングする。手を外から見える位置に出しておけ」

エリックに言われ、渚は両手を計器盤覆いの上に載せた。整備員が兵装に取り付いている最中に発射スイッチなどに手が触れないようにするための予防措置である。むろん、コックピットの兵装マスタートスイッチはオフになっているから、仮に渚が操縦桿のトリガーを引いたとしても何も起こらないはずだが、パイロットというのは万全を期したがる人種なのである。

赤いリボンがついたセイフティ・ピンを手にしたカンガルーが、確認を求めるかのようにそれをコックピットに対してかざしてみせる。

「ホルへ。行けるか？」

エリックが、別の場所で離陸準備を進めるウィングマンの様子をラジオで尋ねた。

渚のヘッドセットにも、雑音混じりの応答が聞こえる。……あれ。聞こえた声は、意味不明の外国語であった。グエが、翻訳してくれなかったのだ。

「こちらエリック・エレメント。Fベースコントロール、離陸許可を」

「エリック・エレメント。ベクター010。ウィンド280。5ノット。ランウェイ・クリア」

コントロールからの声も、渚には単なる航空英語にしか聞こえなかった。

……そうか。

グエは単なる翻訳機ではない。外国語を直接訳すのではなく、グエ同士が情報をやり取りした上で意識してくれるのだ。したがって、グエ同士がやりとり……ある種のテレパシーなのだろう……できない無線越しでは、翻訳が不可能なのだ。

「エリック・エレメント、了解。……いくぞ、お嬢さん」

いよいよアルファジェットが動き出した。一回だけブレーキのテストを行っただけで、すぐに滑走路端に達する。すぐにホルへの機

もやってきて、アルファジェットの右後方についた。渚は慎重に首をひねって、機種を確かめた。デルタ翼のミラージュだ。若干機首が細めに見えるので、おそらくはミラージュ5だろう。ミラージュIEIからレーダーを取り除き、燃料と兵装搭載量を増した対地攻撃重視タイプである。左右の翼内舷パイロンに、20ミリと思われる大きなガンポッドを吊っている。

「エリック・エレメント。離陸する」

エリックがブレーキを解くと、アルファジェットが弾かれたように滑走を開始した。すぐに離陸速度に達し、機首上げとなる。五百メートル足らずの滑走しかしていない。……キロ単位で滑走するジェット旅客機とは雲泥の差である。

キャノピーが青空で満たされる。渚は慎重に後ろを振り返った。右後方三十メートルほどのところに、ホルへのミラージュ5がぴたりと付いている。……いかにもプロらしい、見事なフォーメーション・テイクオフだ。

アルファジェットが水平飛行を開始し、ホルへの機が右手後方というルーズなフォーメーションの位置に退いてから、初めて渚はエリックに話し掛けた。それほど高い高度は飛んでいない。高度計によれば三千フィート……約千メートルといったところか。

「ねえ、TACネーム……じゃない、パーソナルコールサインとか使わないの？」

渚は慌てて言い直した。TACネームというのは航空自衛隊用語であり、他国のパイロットには通用しない単語である。

返ってきたのは、楽しそうな笑い声だった。

「必要ない。飛んでいるのは俺たちだからな。通信規則も簡明、簡略そのものだ。混信の心配もない。傍受されることもない。ここには民間航路も制限空域もなし。ICAOもFAAもない。低空を飛んでも高圧送電線を怖がらなくていい。市街地上空を低空飛行しない限り、ここの空はやりたい放題だ」

「航法とかは？」

「原則的には地文航法だな。勝手知つたる狭い島だから、有視界飛行なら充分通用する。戦闘の場合はFベースの北西にあるヒルトツプ・コントロールにある三次元レーダーの管制に従う。悪天候の場合は、FベースとオームラのTACAN（戦術航空航法システム）を使う。DDは夜間や雨天の際には飛ばないから、問題ない」

「ふうん」

いとも単純なやり方である。縦横に民間航空路や自衛隊機用の回廊、米軍管制空域に各空港の管制空域などが重層的に置かれ、昼間ならば常に百以上の機体が在空していることがあたりまえの日本の空から見れば、ここキャリエス島の空は空っぽに等しい。

「ミッションを説明しておこうか。敵は南下してくるDD。写真で見た通りの超大型飛行昆虫だ。規模はブルー。つまり五十匹以下の群ということだ。これらが、知的哺乳類の街に到達する前に迎撃する。俺とホルヘが主力となって叩き落とし、ヴァルヴァラ・エレメントが撃ち漏らしたDDを片付ける」

「ヴァルヴァラってのは、あのブロンド美人のことね。彼女、何に乗ってるの？」

「Su-22Mだ」

「じゃあ、ロシア人？」

「そうだ。元ロシア空軍大尉殿さ。ウィングマンのプラサーンは元タイ王国空軍で、F-5Eに乗っている」

Su-22Mはロシア製可変翼攻撃機Su-17後期型の輸出タイプである。F-5Eはアメリカ製の軽快なベストセラー戦闘爆撃機だ。

「DDは九日ないし十日に一回、大規模な襲撃を仕掛けてくる。この場合の規模は、ほとんどがオレンジ……五百未満二百五十以上だ。これとは別に、不定期に小規模で襲ってくるがよくある。規模は大半がブルーで、たまにイエローの場合がある。百未満五十以上だな。今回の襲撃は、不定期のほうだ。DDは凶暴で、市街地に達するとここに住人たちに対し襲い掛かってくる。だからその前に一

匹残らず空から叩き落す必要があるんだ。そのために国王陛下に雇われた傭兵部隊がRQAFさ」

「国王に雇われた傭兵空軍ねえ……」

渚の脳裏にシロクマの愛読書でもある有名な航空コミックスが浮かんだ。

「ねえ、COって額に傷があつたりしない？」

「いや。そろそろ仕事にかかるぞ……ヒルトップ。バンディット（敵機）の位置を」

「エリック・エレメント。005。12マイル」

「エリック。……三十秒したら百八十度の水平旋回でDDどもの後ろにつける。そうしたらエンゲージ（交戦）だ」

自分の名前だけで通信受領したエリックが、接敵戦術を説明してくれる。

「やつらは通常三千フィートあたりを飛んでくる。……対地高度で言えば二千五百から二千三百くらいだな」

対地高度二千五百から三百といったら、八百メートルほどか。有視界飛行のヘリコプターが飛んでいるような高度である。……付近に高い山でもあれば、危険極まりない。

「安心しろ。このあたりは低い丘ばかりだ。もちろん、高層建築物も送電線もない。慣れているし、急激な機動はしない」

渚の不安を感じ取ったか、エリックがなだめるような口調で言う。「……訊き忘れてたけど……DDってどんな武器を持つてるの？」

「空対空装備はない。怖いのは空中衝突とFOD（エンジンの異物吸入）だ。それさえ気をつければ、まず問題はない。十分に近付いて、一連射するだけだ。DD一匹につき、二十ドルのボーナスがもらえる。ちなみに、コンバットソーティ一回に付き手当が五百ドル出る」

……二十ドルに五百ドル。安いんだか高いんだか。

「エリック・エレメント。ライトターン……ナウ」

「エリック」

ヒルトップ・コントロールからの指示を受けたアルファジェットが、緩やかに右旋回を始めた。おそらく、ホルへのミラーージュもぴたりとついてきているはずだ。旋回が終わり、機首が南を向く。この先のどこかに、DDの群が飛んでいるのだろう。

「エリック・エレメント。タリー」

エリックが、DD視認を告げる。渚は眼を凝らしたが、キャノピー越しの空には染みひとつ見えなかった。……さすがにプロだ。エリックの眼は鋭い。

「ホルへ。左を頼む。ヴァルヴアラ・エレメント。あとは頼む」
エリックがラジオで告げる。

と、渚の眼にもDDの姿が飛び込んできた。黒胡麻のような点が、前方の空にある。

その点が、見る見る大きく、かつ薄い色になってゆく。DDの群なのだろう。すぐに、個々の点が見分けられるようになった。そしてその点々が、急速に膨れ上がってゆく。

「エリック。DDは約二十。エンゲージ」

すでに戦闘態勢へのスイッチが入ったのか、早口になったエリックが、そう告げた。

渚はキャノピー越しにぐんぐんと大きさを増してゆくDDを凝視した。左右に張り出した上翅のせいで、滑空する褐色の鷗を後ろから眺めているようにも思える。各DDはかなりの間隔を空けて飛行しているようだ。その相対位置関係に、編隊飛行中の航空機や渡り鳥の飛翔のような規則性は見られない。

「いくぞ」

エリックの宣言とともに、アルファジェットの機首がわずかに振られた。狙われたDDの姿が、見る間に細部さえ見分けられるほどに大きくなる。

……ぶつかる。

そう渚が覚悟した瞬間、エリックが発砲した。二条の曳光弾が、渚の視界を走る。あっと思う間もなく、アルファジェットの機首が

上がった。視界からサンドブラウンの塊が消え、軽い左バンクとともに別のDDが眼前に迫る。

再び発砲。二条の曳光弾。

機首が上がり、すぐに戻る。今度は右バンク。

三匹目のDD。発砲。緩上昇。

「いったん離脱し、もう一度後方からエンゲージする」

エリックが告げた。渚は息を止めていたことに気付き、マスクから冷たい酸素を吸い込んだ。

二度目の航過で仕留めたDDは二匹だった。DDたちはやや散開し、増速したものの、積極的に逃走を図るでもなく、あつさりと撃墜された。エリックが、渚のために機をDDたちの正横につけ、ホルヘが攻撃するところを見せてくれた。ミラージュの主翼下に吊られた20ミリガンポッドが火を噴き、命中弾を喰らったDDが弾かれたように前に飛び出し、ぐらりと傾いて落ちてゆく。

「FODが怖いから、徹甲弾と曳光弾しか使わない」

エリックが説明した。ホルヘのミラージュは四匹を撃破し、渚の視界から加速して消えた。

「ヴァルヴァラ。残数は？」

「フォア」

「ヴァルヴァラ・エレメント。後は任せる。エリック・エレメントは二十秒後にバグアウト」

「ヴァルヴァラ」

「ホルヘ」

受領通知の音が、相次いで聞こえる。

「あの二人にも多少は儲けさせてやらないとな。さて、帰るぞ」

エリックが、機首を南へと向けた。すぐに、ホルヘのミラージュがジョインナップしてくる。

「たぶん言い古されているとは思うけど……まさにバグアウトね」

渚はそう言って、微笑んだ。バグアウトとは、戦場空域離脱を意味する用語である。

「そうだな」

返ってきたエリックの一言は、いかにも楽しげだった。

「とりあえず、デブリーフィングに付き合ってくれ」

Fベースに帰還すると、エリックがそう言つて渚の腕を取った。トリーニングされたアルファジェットにはさっそくカンガルーらが取り付き、燃料の補給と点検を始めている。

渚は促されるままに、ブリーフィングルームに入った。エリックとホルへの与太話をそれとなく聞きながら出されたコーヒーを飲んでいるうちに、ヴァルヴァラ・エレメントの二人……金髪美人とタイ人青年が帰ってくる。

デブリーフィングはいとも簡単なものだった。用紙に墜としたDの数を書き込み、XOに口頭で報告が行われる。全部で五分とかなかった。

「あとでガンカメラと照合し、DD撃墜のボーナスが給与に加算される」

XOが去ると、エリックがそう説明した。

「給与つて、幾らぐらい貰えるの？」

「……各個人の契約条件による」

他の三人にちらりと視線を走らせながら、エリック。

「今までの実績、RQAFでのキャリア、などなどが考慮される。

まあ、一般の空軍パイロットよりは貰っているがな。むしろありがたいのはボーナスだ。DD撃墜や通常のコンバットソーティだけでなく、偵察などのややリスクの高いミッションはいい金になる。

あとFベース勤務手当、予備パイロット手当、その他諸々の諸手当も馬鹿にはならん」

「ふうん」

やや歯切れの悪いエリックの物言いに、渚はそれ以上突っ込むことを諦めた。

「さて。本日の業務は終了だ。せっかくだからこの面子でパーティ

「と、い、こ、う。お嬢さんの初出撃を記念して、だ」

「にやにやしなから、ホルヘが言い出す。」

「いいわね」

「お付き合いしますよ」

「ヴァルヴァラとブラサーンが同意する。」

「俺も異存はないが……？」

「エリックが、渚の顔を覗き込む。」

「もちろんいいわ」

渚は内心躊躇しながらも、同意した。パーティに興味がないわけではないが……状況が状況だけに、はたしてそんな呑気なことをしていいのだろうか、と言う気もする。

「よし。……1800にバーへ集合だ。遅れるなよ」

ホルヘが念を押す。

3 アルファジェットC（後書き）

第三話をお届けします。 用語解説 ウイングマン／二機編隊の僚機およびそのパイロット アラート／警戒待機 エレメント／二機編隊 Su-27UB／ロシアの戦闘機 Su-27の複座練習機型 ICAO／International Civil Aviation 国際民間航空機関 FAA／Federal Aviation Administration アメリカの連邦航空局。運輸省の下部機関 地文航法／地上の地形、地物などを参照し、自機の位置を確認しながら行う航法

4 多国籍パーティー

部屋に戻ると、新しい服が届けられていた。……今着ているのと変わらないカバーロールと、下着のセットだ。渚はさっそくシャワーを浴びると、着替えた。

すっかり時間の感覚を失っている渚だったが、時計を見ると十八時まではまだ三時間ばかりの間がある。ベース内の見学でもしようかと考えていると、ドアにノックがあった。

開けてみると、予想通りエリックが立っていた。

「入ってもいいか？」

「どうぞ」

断る理由もないので、渚はあっさりと招じ入れた。エリックが、ドアを開け放したまま入ってくる。

「まずは俺の恋人を紹介しておこう」

いたずらっぽい笑みを浮かべて、エリック。

「恋人？」

「サビーヌ。来い」

エリックが、戸口に向かってそつと呼びかける。

四本の短い脚をちょこちょこと動かしながら現われたのは、なんとも可愛らしい小動物だった。大きさも形もフェレットによく似た細長く、しなやかな生き物だ。毛色はレモンのような鮮やかな黄色で、腹のほうは白い。ただし尻尾はフェレットのそれよりも長く、体長と同じくらいある。頭部はフェレットよりもっと平らで小さく、首も長いので、イイズナの方に近いかも知れない。

フェレットもときはエリックに近づくと、おもむろにその身体をよじ登り始めた。グエが載っていない方の肩に器用に座り込み、小さな鼻をひくつかせて渚を凝視する。

「……あー、始めまして」

相手が知的哺乳類である場合を考慮して、渚はとりあえず挨拶し

た。見た目はどう考えてもペットだが、エリックが恋人だと言った以上、そんな扱いには危険である。この世界、見た目だけで物事を判断するとひどい眼にあいかねない。

エリックが、笑った。

「こいつは知的哺乳類じゃないよ。頭はいいが、単なるペットだ」

「やっぱり」

「ほら、サビーヌ。渚に遊んでもらえ」

エリックが言うと、いきなりサビーヌがジャンプした。避ける間もなく、渚の肩に飛び移る。

それから十分ほど、サビーヌは渚の身体をよじ登ったり滑り降りたり、あちこちを舐めたり甘噛みしたりして遊びまわった。毛は細かくしなやかで、その手触りはミンクを思わせた。不快な体臭もない。

「気に入ったか？」

エリックが問う。渚はサビーヌを横抱きしながらうなずいた。友人が飼っているフェレットと遊んだことはあるが、こちらの方が断然頭がよく、表情も豊かだ。

「ミヤーシエと呼ばれている生き物だ。どう見ても、イタチの仲間だろうな。人気のあるペットだよ。ヴァルヴァラや、プラサーンも飼ってる。王都に行ったら、買うといい。十ドルくらいで買える」

「ドルが通用するの？」

渚は驚いた。

「正式に流通しているわけじゃないが、ベース周辺と王都くらいなら、USDドルを受け取ってもらえる」

「十ドルって……安すぎない？」

「ありふれた動物だからな。ミヤーシエはこの辺りにはいないが、南部の森林地帯に行けばこいつの仲間が何万匹も暮らしてる」

何万匹、というエリックの説明に、渚の商売っ気が刺激された。

「……大量に捕獲してペットショップに売れば……」

「誰しもそう思っただがな。だが、国王はこの地の動植物を地球へ

持ち出すことを固く禁じている。生態系を汚染したくないんだな」

「へえ。先進的な考えの持ち主なのね」

渚は素直に感心した。

「飼う場合の注意だが……朝晩は必ず外に出してやること。糞はその時に勝手にしてくるから、猫みたいトイレを作ってやる必要はない。問題は……餌だ」

「……グルメなの？」

渚は家で飼っている『マンタ』を思い起こした。シロクマが甘やかすすぎたせいで、今では安物の猫缶には見向きもしないわがままなグルメ猫に育ってしまった。

「その逆だ。ゲテモノ好きなんだ」

エリックが、首を振る。

「まあ、食堂の茹で肉あたりも食べることは食べるが、好物は生きている昆虫だ。排泄がてらの散歩の時に、そこらの野原やブッシュに連れて行ってやれば、自分で勝手に虫を捕まえて喰う。一番の好物は虫の卵とかだな。可愛い顔して、食事シーンは結構グロい。ミズとか嬉しそうに頬張っている姿、想像できるか？」

「……ちよつとできない」

渚はFベース内の見学で時間を潰した。

様々な知的哺乳類が、そこかしこで働いていた。レッサーパンダがゴミを片付け、体高一メートル半程度のアフリカゾウが鼻にスパナをつかんで、タトラの六輪トラックの整備をしている。ひよいと覗き込んだファイルキャビネットの並ぶ事務室では、素晴らしい速さでタイプを打つスカンクの横で、トナカイがなにやら深刻そうな表情で特大の電卓を叩いていた。

少し疲労……主に精神的なものだ……を覚えた渚は、お茶でも貰おうと食堂へと向かった。その途中で、サロンのような部屋にエリックがいるのを見つける。コーヒーマーカーが置いてあるから、ここでもお茶くらい飲めそうだ。渚は入ってみた。

結構広い部屋だった。ソファが大小十脚ばかり。コーヒーターブルがいくつか。腰高のカウンターの上には、電気ポットやコーヒーマーカーなどが並んでいる。隅には大きな冷蔵庫。一方の壁際には、フラットな大型液晶テレビ。その右側の壁は全て作り付けの本棚のようになっており、かなりの数の書籍と雑誌、それに積み重ねられた新聞が置かれていた。

「なにしてたの？」

渚の問いに、エリックが手にしていたタブロイド紙を掲げて見せた。

「メトロ。一週間分がまとめて届く。十日くらい遅れてね」

「……娯楽に関しては、ちょっと不便ね」

「まあな。もし退屈なら、日本語の新聞や雑誌もあるぞ」

「ここに日本人もいるの？」

「ああ。整備に男が二人、管理部にも一人いる。オームラにはもつと大勢いる。パイロットは一人だけだ。グループ3に、タカノリつて元日本空軍のF-4乗りがいる」

渚は苦笑した。セルフ・ディフェンスなどと間に挟んでも、外国人にエアフォースはエアフォースとしか認識されないのだ。

興味を覚えた渚は、本棚に歩み寄ってみた。日本語の新聞は三つだけで、しかもひとつは『東スポ』だった。雑誌は週刊誌が『少年ジャンプ』を含む四誌に、月刊誌が三誌。うちひとつは渚がコラムを書いている『航空マガジン』だった。

「暇だったらホルヘに相談しろ。あいつは充実したDVDコレクションを持っててから。今度のローテーションでも何枚か持ってきてるはずだ」

背後から、エリックが声を掛けてくる。

「ローテーション？」

「RQAFでは、その全航空戦力を三つのグループに分けて管理している。通常、ひとつがFベースで即応態勢につき、もうひとつがオームラベースで待機、もうひとつは集中整備兼予備となる。DD

の不定期襲来の場合は、Fベースからの出撃のみで対応する。定期大規模襲来の際には、オームラベースの機体も全力出撃し、場合によっては予備機も投入する。パイロットは、自分のグループが集中整備に入っただけの場合のみ休暇を許される。地球へ戻るのは、その時だ。もつとも、オームラベースにいればそれだけで予備パイロット手当がつくから、帰る奴はそれほど多くないがね」

「ふうん」

渚はここへ来た理由を思い出して、カウンターへと歩み寄った。冷蔵庫を見て気が変わり、開けてみる。中には冷却効率が悪くなりそうなくらいの量のソフトドリンクの瓶と缶、それにミネラルウォーターのペットボトルと瓶が詰まっていた。ちよっと思案してから、渚はペリエの瓶を取り出した。

「ねえ、XOって、どんな人なの？」

グラスによく冷えたペリエを注ぎつつ、訊く。

「名前はジェレミー・ボーマン。元USAF中佐だ。ベトナムで二期に渡りF-4を飛ばしてた。前席でMiG-17を一機墜としたことがあるそうだ。退役してから、RQAFに入った。いい男だよ。俺は気に入ってる」

「どうやってRQAFに入ったの？」

「詳しくは知らん」

エリックが、ゆっくりと首を振る。

「じゃあ、あなたはどやって入ったの？」

「知り合いに誘われたんだ。いい金になるし、リスクの少ない傭兵の仕事があるよね。金に困っていたわけじゃなかったが、わがフランス空軍も冷戦後の規模縮小の真っ最中でね。出世の道を選ぶとすれば、地上勤務にまわるしかなかった。民間航空への転職も、中尉風情ではすぐにエールフランスでA340を飛ばすというわけにはいかない。そんなこんなで、気がいたらDDどもを叩き落していたというわけさ」

「その知り合いの人はどやってRQAFに入ったの？ まさか、

求人情報誌に募集広告を載せるわけには行かないでしょ？ どうやって、これだけの人々を集められたのかしら」

「新入りの募集は、RQAF管理部の仕事だ」

説明口調になって、エリック。

「管理部は、世界のあちこちにダミー会社やオフィスを持っている。物資の買い付けも、そこが行っている。機材、補修部品、エンジン、タイヤ、弾薬、燃料、その他諸々。そのスタッフが、状況に応じてパイロットや整備員、技術者などを雇うんだ。俺も、形式上はブリュッセルに本社のあるダミー企業の契約社員ということになっている。給与は、そこを経由して俺の口座に振り込まれているわけさ。表向き俺は、サウジアラビアで複数の原油採掘会社と契約して、不定期にファルコン900を飛ばしていることになっている。仮に、女房が会社に電話したとしても……」

「奥さんいるの！」

渚の激しい突っ込みに、エリックが眉をしかめる。

「何だ。俺が女房持ちじゃおかしいのか？」

「いえ、そうじゃないけど……」

もちろん思い込みに過ぎないのだが、なんとなくエリックは独身のような気がしていたのだ。渚は戸惑いを隠せないままに話題を変えた。

「じゃあ、RQAFを維持する資金はどこが調達してるの？」

何十人ものパイロットと、その数倍におよぶ整備要員や技術者の給与だけで、おそらく月に何十万ドルにも上るだろう。軍用ジェット機自体が、新品ならば安いものでも一千万ドル前後、高いものであれば三千万ドル以上する。むろん、保守整備のコストや消耗品の購入費も馬鹿にならないはずだ。その上、あちこちのダミー会社やオフィスを維持する経費が加わるとすれば…… RQAFの総経費は中堅国家の空軍関係予算と大して変わらないだろう。

「実は、キャリエス島は鉱物資源に恵まれているんだ」

急に声を潜めて、エリック。

「国王は、あちこちに鉱山を持つてる。掘ってるのは、モグラたちだな」

「モグラって……ああ、モグラ科も哺乳類だっけ」

「密かに産物物を売却して、ドルやユーロを得ているんだそうだ。

アントワープやアムステルダムにオフィスがあるのは、伊達じゃない」

「はあ」

渚は半ば呆れてため息をついた。

「でも、そんなに手広くやっているのに、なぜこの世界のことかばれないのかしら？」

「……パンダが料理作ったりカンガルーがジェットエンジンをいじったりしている世界で、巨大な昆虫相手に戦争しているなんて言うて、誰が信じると思う？ 強制入院させられるのがおちだ。それに、守秘義務に関しては厳しい罰則規定があるからな」

「どんな？」

「国王の命により、死刑だ。大きな声じゃ言えないが、あの宮廷付き猫どもの中にはとんでもない技を使う奴がいるらしい。まあ、逆らわんほうが身のためだな」

真剣な表情で、エリック。

遅まきながら、渚は気付いた。なんともユーモラスな知的哺乳類たちの姿から、一見すると単なるファンタジックなところにはかと思えないキャリエス王国も、実は恒常的に外寇にさらされている戦時封建国家だということに。

「ねえ、RQAFのトップって、誰なの？」

渚はそう訊いてみた。

「COだ」

「あたしをここへ呼んだのはCOの命令なの？」

「まあ、そういうことになるな」

エリックが、歯切れ悪く答える。

「COは誰なの？」

「明日、定期便でオームラに君を連れてゆく予定だ。そうしたら、会わせてやるよ」

「ひょっとして、COはあたしの身内？」

渚はそう訊ねた。もしそうだとすれば、服のサイズや靴のサイズが知られていたことの説明がつく。

「否定はできないな」

……シロクマが。

渚は確信した。傭兵空軍を束ねられる人物など、渚の身内には他にいない。母の利美は装輪APCを指して『戦車』と呼んでしまうほどの軍事音痴。祖父の和典はまじめな元銀行員だし、曾祖父の重光は元海軍航空隊の中尉だったが、すでに六年前に他界している。シロクマの実兄である写真家の亮平でも、無理だろう。そう、すべてはシロクマの差し金だったのだ。どうやってかは知らないが、渚の父はこんなふざけた世界で密かに傭兵空軍を指揮していたらしい。……でも、それならなぜ手紙を出したりしたのだろう？ ひとつ屋根の下に暮らしていたのだから、話せば済むことだろうに。渚は首をひねったが、答えを導き出すことはできなかった。

Fベースのバーは、厨房を挟んで食堂の反対側にあった。

「空いてるわね。時間が早いせいかしら」

エリックと並んで戸口をくぐった渚は、ざっと室内を眺め渡した。カウンター席が八、四人掛けのテーブルが四つほどのさやかなバーだ。奥にはビリヤード台が置かれ、壁には定番どおりダーツが掛けてある。その両側にある、勝手に張られたと思しき写真やイラストの数は、ざっと百はあろうか。ほとんどが、各種の航空機を写したか描いたものだ。隅の方には、頻繁に利用されているとは思えぬカラオケのセットもあった。

埋まっている席はカウンターのスツールふたつだけで、南アジアっぽい褐色の肌の男性と、がっちりとした体つきの黒髪の白人女性とが並んで座っていた。カウンターの奥では、バーテンらしい巨大ゴ

ールデンハムスターが、手持ち無沙汰にグラスを磨いている。

「よう、サラップ。マイラ」

エリックが、カウンターの二人に挨拶する。渚も一応お辞儀をしておいた。だが、返ってきたのはそっけないうなずきだけだった。

「二人ともパイロットだ。午前中のアラートだったから、ブリーフィングには出てなかったがな」

カウンターから最も離れたテーブルに座りながら、エリックが言う。

ほどなく、プரசーンがにこやかに現われた。

「何を飲みます、お嬢さん」

渚はミネラルウォーターを頼んだ。プரசーンはエリックには何も尋ねずに歩み去り、すぐにグラスひとつとペットボトル、それに冷たいビールの入ったジョッキふたつを持ってきた。……エリックとは飲み慣れているらしい。

続いてやってきたヴァルヴァラは、自分で赤ワインのボトルとグラスをハムスターから受け取ってきた。腕時計に目を落とし、言う。「一分前。見ててごらんなさい。一秒と遅れずに、ホルヘが来るから」

ヴァルヴァラの言った通り、すぐにホルヘは現われた。きびきびとした足取りでカウンターに歩み寄り、緑色の瓶ビールを受け取ってから渚たちのテーブルに歩み寄る。

「では諸君、始めようか。僭越ながらこのホルヘ・シモン・フィゲイラ元ブラジル空軍少佐が、上官風を吹かせて乾杯の音頭を取らせてもらう。ナギサ・シロヤマの初出撃とその無事生還を祝って……」

乾杯

「乾杯」

全員が唱和する。渚はミネラルウォーターのグラスをぐいと傾けた。……水とは思えぬほど、旨かった。

雑多なつまみが、テーブルに並んだ。プレッツェル、茹でソーセ

ージ、春巻、レバーペースト、缶詰ものらしいオイル漬けの鯖、デ
イップ付きのチキンカレー、ナッツ類、それに海老の天ぷら……。
多国籍もいいところである。

「ホルへさんって、少佐殿だったんですか」

「……そんなに貫禄ないか、俺って」

渚の言葉に、ホルへがしよげ返ったふりをする。……ビールは早
くも二本目である。

「いえ、お若く見えるから……」

「単に童顔なだけだ」

エリックが、渚のフォローをひと言で打ち砕く。

「……言つとくが、ホルへと俺は同じ年だぞ」

「はあ」

渚は二人を見比べたい衝動をこらえた。とても同年齢には見えな
い。

「えーと、ホルへさんは、どうしてRQAFに入ったんですか？」

「話してやりなさいよ」

くすくすと笑いながら、ヴァルヴァラ。

「あー、アナポリス基地にいたときの話だ。ある晩酔ってベクトラ
を転がしてたら、横合いから飛び出してきたミッレにぶつけちまっ
た。相手の御婦人は軽傷。ところがこいつが陸軍少将の奥方だった。
結局、除隊になる前に自発的に辞表を提出したよ。ブッシュパイロ
ットにでも転職しようかと思ってたところに、RQAFのスタッフ
が現われた。飛びついたね」

茶化して語ったホルへだったが、言葉の端々には無念さがにじみ
出ている。

「ヴァルヴァラさんは、どうやってRQAFへ？」

「ヴァーリヤと呼んで、渚」

「ではヴァーリヤはどうして？」

「彼女はコスモナフト（宇宙飛行士）崩れさ」

にやにやして、エリック。

「……冷戦が続いていれば、今ごろブランに乗って宇宙へ行っていたかも知れない逸材だったんだ」

「逸材だったかは別として、宇宙飛行士崩れというのは本当よ」
ワインをすすりつつ、ヴァルヴアラが言う。

「RASA（ロシア航空宇宙庁）やその前身のRSA（ロシア宇宙庁）が設立される前に宇宙飛行士になりたかったら、科学者としての研鑽を収めつつ空軍で操縦を学ぶのが一番の近道だったの。だから大学で機械工学を主に学び、生物学と医学を少し齧ってから空軍に入って、ウィングマークを得てから宇宙飛行士プログラムに参加を希望したわ。ところが冷戦構造崩壊で有人宇宙ミッションは激減。それどころか、軍縮でパイロットに対する需要もめっきり減ってしまった。ただでさえパイロットが余り気味の時に、女性を残しておいてくれるほどロシア空軍は甘くなかったのよ」

「テレシコワやサビツカヤを夢見ていたら、リトヴァクになっちまったということさ」

ホルヘが混ぜ返す。

「プラサーンさんは？」

「眼を悪くしました。スラター二基地でF-5を飛ばしていました。どうしても視力が維持できなくて。今は、度の強いコンタクトレンズをして飛んでいます。裸眼視力が悪すぎて、空軍の規定では地上勤務に回されるしかなかった。でも、飛びたかったんです。だから、RQAFのスタッフの誘いに応じました」

タイ人青年は、淡々と語った。

「結構みんな訳ありなんだよ……というか、訳ありの人間でなきゃこんなふざけた世界で働いてないって」

ホルヘが自嘲気味に言う。

「よかったら、ヴォーゲオスについてもっと聞かせてくれない？」
座がしんみりしてしまったことを悟った渚は、ことさら明るい声で話題を変えた。

「俺たちの、飯の種だ」

そう言ったのは、ホルヘ。

「ちゃんと説明してないの？」

ほんのりと眼の下をばら色に染めたヴァルヴァラが、エリックを睨む。

「時間もなかったしな。いずれにしろ、明日オームラに行く。そのときドクター・ゲラに聞けばいい」

「じゃあ、予習しておきましょう。ちょっと待っててね」

言い置いて、ヴァルヴァラが立ち上がる。

「ドクター・ゲラって、どなたですか？」

足早にバーを出てゆくヴァルヴァラの背中を眺めながら、渚は訊いた。……なんだか、名前から想像すると怪しい改造人間とか造っていそうだ。

「オームラABにいる軍医だ。ヴォーゲオスに関する研究は先代の軍医が趣味でやっていたから、その資料を受け継いでいる。明日暇があつたら、案内してやるよ」

空のジョッキを手に立ち上がりながら、エリックが言う。

ほどなく戻ってきたヴァルヴァラは、大きな書類フォルダを手にしていた。ワインを一口呷ってから、大判のモノクロ写真を一枚取り出す。

渚は写真を凝視した。対象物がないのでスケールはよく判らないが、空から地上を写したもののようだ。濃いグレイに見えるただっ広い平原の中に、薄いグレイの大きな円がひとつあり、その周りを五つの小さな円……うちふたつはかなりいびつな円……が取り巻いている。

「なんに見える？」

「……ミステリーサークル」

渚の答えに、ホルヘとエリックが同時に吹き出した。

「残念。ヴォーゲオスのコロニーよ。これが、アップ」

もう一枚、写真が出てくる。叢が点在する地面の上に、DDと似てはいるが微妙に異なる生物が何匹も写っている。

「これがBVよ。ベオストなんか・ヴォーゲオスの略。意味は労働するヴォーゲオス。こいつらはDDと違って飛べないし、おそらくそれほど凶暴じゃない。大きさも一回り小さく、体色もやや薄い。でも、こいつらが働いてDDを養っているらしいのよ」

「蜂か蟻の社会みたいね」

渚はそう感想を述べた。

「島の北側は、このコロニーだらけだ。一回偵察に付き合うといい。バンカーだらけのゴルフ場を上空から眺めているような気分になる」
エリックが、言う。

「以前は、キャリエス王国の領域は島の三分の二くらいはあったのよ。でも、ある時突然ヴォーゲオスが大繁殖し、大挙して襲ってきたので北のほうは放棄せざるを得なくなった。その後国王が人類に助けを求めてRQAFが創設されて戦線が安定し、現在に至っているわけ。今は早期警戒システムが機能しているから、めったなことでは死人は出ないけどね」

ヴァルヴァラが、説明する。

「何でDDは攻めてくるのかしら？」

渚は浮かんだ疑問を素直に口に出した。DDの知能はそれほど高いとは思えない。進んだ知性の持ち主であれば、RQAF機に襲われた時にもっと有効な対策……低空飛行とか、急激な機動とか、分散回避とか、様々な対応を取ったはずだ。とすると、ヴォーゲオスの社会は高度なものではないと考えられる。つまり、これは決して戦争ではないのだ。戦争とは、情けない話ではあるが高度な知性同士の社会的な闘争である。ヴォーゲオスは、おそらく単純な理由……食糧確保とか縄張りの拡大とかの理由で攻め寄せているに過ぎないのだろう。

「それが……実はよく判ってないんだ」

エリックが、肩をすくめる。

「……哺乳類が嫌いなのだ」

ぼそりと、ホルへ。

「そんな単純なことで、攻撃してはこないでしょう」

プラサーンが、笑う。

「そうでもないぜ。エルビラ叔母さんなんて、庭で虫を見つけるた
びに殺虫剤を吹きかけてたからな。蝶にまでかけちまうんだから手
におえない」

真顔で、ホルヘが言い返す。

「DDは兵隊蟻みたいな戦士階級だろう。敵がいるから戦う、って
のが、戦士階級だ。ヴァイキング然り、フン族然り、中世の騎士然
り……。サムライだって、そうだろう？」

エリックが、渚に水を向ける。

「それは文化の話でしょ。奴らにそんな高度な文化的概念はないわ」
こう言うのは、ヴァルヴァラ。

「……生物学を多少齧った者として言わせてもらうけど、ヴォーゲ
オスは地球上の昆虫の概念を超越した高い知能を持っているわ。ち
よつと専門的になるけれど、神経球が昆虫としては異様に大きいし、
そのうちのいくつかは明らかに肥大しているの。おそらくは、補助
脳としての機能があるのでしょうね。推定だけど、犬程度の知能は
あるはずよ」

「でも、何でそんなこと気にするんだ？」

ホルヘが、訊く。

「……だって、敵のことを知らねば戦略の立てようがないじゃない」
渚の答えに、ホルヘが爆笑する。エリックとプラサーンも、苦笑
いを浮かべた。

「……なんかおかしいこと、言いましたっけ？」

気分を害して、渚。

「ヴォーゲオスに勝つなんて、た易いことなのよ、渚」

ヴァルヴァラが、説明した。

「コロニーを絨毯爆撃するだけでいいんだから。おそらく、三日も
あればカタがつくわ」

……言われてみればそうである。RQAFの所属機の大半は、爆

弾やロケット弾などの対地攻撃兵装を搭載可能だ。ヴァルヴァラの Su-22 なら、五百キロ爆弾八発くらいを積んで、キャリエス島北端まで余裕で往復できるだろう。

「なぜ、やらないの？」

「国王陛下のご命令さ」

ホルヘが答えた。

「悪いのは攻めてきた DD だけで、BV は悪くないという考えなんだ。BV はむしろ DD に搾取されている気の毒な階層だと、国王をはじめこの連中はみなそう考えている。かなり低いとはいえ、ある程度の知能を持っている生物を無制限に虐殺するわけには行かないんだそうだ」

「ちよつとテロの被害にあっただけで、でかい戦争に踏み切るところかの国の大統領に見習って欲しいくらいだな」

皮肉な口調で、エリック。

「でも、それなりに知能を持っているのなら、和平交渉……は戦争じゃないから無理としても、なんらかのコミュニケーションは取れないものかしら。協定とか、取引とか……」

「それくらい、とつくに試してるよ、この連中は」

渚の意見に、エリックが応える。

「DD の侵入が始まってから何度も、国王は和平のための使節を北に向けて送り出した。だが、一人も帰ってきていない。交渉なんて、するだけ無駄だ」

「和平の概念なんてないのかも知れないわね」

自分でワインのお代わりを注ぎながら、ヴァルヴァラ。

「所詮犬程度の知能だ。吠えまくる馬鹿犬に意見するようなもんだよ」

投げやりな口調で言ったホルヘが、大きくビールを呷った。

「あー、おはよう」

エリックが顔を見せたのは、翌日の昼近かった。

「二日酔い？」

「いや、大丈夫だ」

やや疲れた表情で、エリックが答える。それほどアルコールに強くないというプラサースと、慎み深いヴァルヴァラは渚とともに早々にパーティを切り上げたが、エリックとホルへはかなり遅くまで飲んでいたらしい。

「ええと……1400に定期連絡便がオームラに向け離陸する。荷物をまとめて、1350までにエプロンに出てきてくれ。いいな」

「了解、元中尉殿。……できればバッグが何かをもらえると嬉しいんだけど」

「ヘケリーンウスを探して頼め。事務の方にいる愛想のいいアルマジロだ」

部屋を出た渚は、廊下をモップで拭いていたヤマアラシに尋ねて、アルマジロを探し当てた。エリックが言った通りに愛想のいいアルマジロが、備品倉庫から新品のフライトバッグを持ってきてくれる。礼を言って受け取った渚は部屋へ引き返すと、さっそくわずかな私物を詰め込んだ。

準備を済ませた渚は昼食を摂るために食堂へと向かった。一人で食事していたヴァルヴァラが、渚の姿を見つけて手招いてくれた。

「一緒にどう？」

「喜んで」

渚は適当に料理を選ぶと、そそくさとヴァルヴァラの待つテーブルへと運んだ。

今日の定期便でオームラへ行く、という話をする、ヴァルヴァラの顔が曇った。

「なんだ。もう行っちゃうの？ さみしいわ」

「あたしんです」

昨日パーティで顔を合わせただけが、渚はこの女性にかなりの好意を持つようになっていた。美人で、落ち着いていて、知的。しかも、宇宙飛行士を目指していたパイロットとなれば、憧れに似た

気持ちを抱いてもおかしくはない。

「RQAFに女性は少ないからね。せつかく知り合いになれたのに……」

ピラフにフォークをつき立てながら、ヴァルヴァラ。

「もう一人の女性パイロットはお友達じゃないんですか？」

渚は訊いた。

「マイラのこと？ 別に仲良くはないわ。彼女とは合わないのよ」
やや声を潜め、女同士のひそひそ話のトーンで、ヴァルヴァラが言う。

「彼女ねえ、すつごくプライドが高いのよ。腕は確かに悪くないけどね。はつきり言って付き合いづらい人。グループ1の中でも、結構孤立してるのよ。本人は気にしていないようだけど」

「もともと何をしていた人なんですか？」

「アメリカ海軍のF-18乗りよ。着艦技量未熟で放逐されたうちの一人。本人は、認めていないけどね」

ヴァルヴァラがため息混じりに言い、ピラフを口に運んだ。

エリックに言われた通り、渚は全ての支度を整えて十四時十五分前にはエプロンに出た。

待っていた機材はBAeジェットストリームだった。双発ターボプロップの小型旅客機である。

「乗っていてくれ」

整備員らしい巨大プレーリードッグとなにやら打ち合わせていたエリックが言う。渚はうなずくと、機体左側後部のドア兼用タラップを昇った。トイレの前を抜け、客室に入る。

先客は一人だけだった。入ってきた渚に気付き、シートに寝そべっていたほぼ原寸大のシベリアトラが、巨体を起こしてにやりと笑う。

「やあ、お嬢さん」

後ずさりした渚は、転げるようにタラップを降りた。エリックが、

怪訝そうな顔を見せる。

「どうした？」

「と、トラがいる！」

「ああ、よくあることだ。王都に用事のある者を便乗させてやるんだ。彼は近くの村の村長だ。ちょうどいい、色々とキャリエス王国について教えてもらえ」

涼しい顔で、エリック。

「だって、トラよ？ 猛獣よ、肉食よ！」

「たしかに肉食だが、人間は食わんよ。それとも君は、同じ飛行機にステーキ大好きな外国人が乗り合わせていたら、怖いともいうのかい？」

からかうような口調で、エリック。

「そういう問題じゃないと思うけど……」

「とにかく、心配するな」

結局、渚はシベリアトラから最も離れた最後部の席に座った。扉をロックしたエリックが、トラと気さくに世間話を交わしてから、さして離れていない席に座る。

ジェットストリームは定刻どおりに離陸した。短いフライトだった。二十数分で、ジェットストリームはオームラABに着陸した。

オームラABは、規模がやや大きくなっただけで、設備その他はFベースとたいして変わりばえしなかった。エプロンに並ぶ軍用機材も、Fベースのものそれほど変わらない。MiG-21が数機と、単座型のジャギユアがいるのが目新しいくらいか。少し離れたところには、双発の小型輸送機と古臭いヘリコプター……たぶんH-34……が駐機していた。

「では、さっそくCOとご対面といこうか」

フライトバッグを手に、エリック。

……いよいよシロクマと対決か。

渚はエリックのあとについて建物のひとつに入った。いかにも軍事施設らしいくすんだ色のペンキを塗っただけの無味乾燥な廊下を

抜け、とある扉の前へと導かれる。

「さあ」

エリックが、ノックするように促す。

渚はシロクマにどのような皮肉を浴びせてやろうか思案しながら、黒光りする木製の扉を叩いた。

「どうぞ」

扉越しに聞こえた声は、シロクマの声ではなかった。もつとずつと太く、深みがある。……秘書か副官か、それとも従卒の声だろうか。

渚は扉を押し開けた。

そこはかなり広い執務室だった。ありきたりの事務机がふたつ、ひとつは右の壁際に、もうひとつは窓を背にした位置に置かれている。左の壁際には灰色のファイルキャビネットが並び、その脇には古風な帽子掛けが立っている。手前には、使い込まれたソファとテーブルのセット。サイドテーブルにはポットと急須と湯呑み茶碗。茶色い陶器の花瓶に生けられているのは、慎ましい野の花だ。

「やあ、渚。久しぶりだな」

微笑を見せて歩み寄ってきたのは、渚が小学校五年の時にフィリピンで客死したはずの曾祖父、城山重光だった。

4 多国籍パーティー（後書き）

第四話をお届けします。用語解説 ブッシュパイロット／人口希薄な辺境の地で小型機やヘリコプターを操縦する職業 ブラン／ソビエト版スペースシャトル テレシコワ／ワレンチナ・テレシコワ。史上初の女性宇宙飛行士 サビツカヤ／スベトラナ・サビツカヤ。史上二人目の女性宇宙飛行士にして、女性初の宇宙遊泳に成功 リトヴァク／リディア・リトヴァク。第二次大戦における女性エース（撃墜王） MiG-21／ロシア製の戦闘機 ジャギユア／イギリスとフランスが共同開発した攻撃機兼練習機

5 曾祖父

……なんでもありかい。

驚いたことは間違いない。しかし、渚の脳裏に真っ先に浮かんだのは、突っ込みの言葉であった。

「……ひい爺ちゃんが、CO？」

「そうだ」

「シロクマじゃないの？」

「拓真君だと予想していたのか。はは。違っよ」

重光が笑う。渚は素早く計算した。たしか1910年生まれだから……もう九十五歳になるはずだ。だが、目の前にいる重光は、とてもそんな歳には見えなかった。せいぜい七十歳程度の初老の男性だ。もともと若く見えるタイプだったが、それにしても若々すぎる。ひょっとして、クローン人間だろうか？　この猫たちなら、それくらいの魔術を使えるのかもしれない。

「フイリピンで死んだはずでしょ？」

「済まん。詳しく話してやるから、まあ座ってくれ」

重光がソファを指した。渚は扉を閉めると、大人しく座った。

重光が急須に湯を注ぐ。渚は久しぶりの緑茶を味わいながら、重光の話を聞いた。

戦死した少佐に代わって、大村大尉が暫定的に率いていたコロンベラ島海軍飛行場……。もはや稼動機無く、対空火器さえ払底した無力な基地。百名足らずの帝国海軍将兵は、迫り来る米軍機編隊に対し、抵抗する術を持たなかった。以前の空襲で主要な防空壕は避難した兵ともども壊滅し、新たに設けられた壕はあきれるくらい粗雑であり、機銃弾さえあっさりと貫通してしまいそうな代物だった。壕に駆け込む誰もが覚悟した。全滅必至、と。

そこへ号令が届いた。総員、指揮所前に集合。

全員が指揮所前に整列した頃には、すでに米軍機編隊は指呼の間まで迫っていた。現われた大村大尉が伴っている生物を見て、搭乗員の城山重光中尉以下の全員が危うく腰を抜かしかけた。直立歩行する、身長二メートル近い猫。

大村大尉が早口で告げた。事情はよく判らぬが、この猫が我々の命を救ってくれる。総員、その場を動くな。

波頭をかすめるほどの低空で先行侵入したP-38が、機銃掃射しながら迫る。着弾の土煙が、集まった兵ら目掛けて一直線に伸びてくる……。

次の瞬間、全員が見慣れぬ平原にいた。かぐわしい風が、皆の鼻をくすぐる。米軍機も、陸軍が布陣する丘も、白波が打ち寄せるリーフも、あくまでも青い大海原も、どこにも無かった。

兵たちがざわめく。混乱した城山中尉は、救いを求めるかのように大村大尉を見た。

その世界は助力を求めている。

飛行する巨大昆虫は、じりじりとその版図を広げていた。抵抗する住民側にも軍隊はあったが、空を支配する相手に対しては常に不利な戦闘を強いられた。多くの兵が倒れ、それに数倍する住民が死んだ。

国王は決断した。隣の世界には、空を飛べる者たちがいる。彼らに助力を仰ごうと。

計画は慎重に立案された。双方の世界が直接接触するのは危険だった。それぞれの世界のバランスが崩れれば、取り返しのつかないことになりかねない。幸いなことに、地球では大規模な戦争が行われていた。そこで死ぬはずの人々や破壊されるはずの飛行機を移送すれば、影響は最小限に留められるはずだ。

かくして、西太平洋で孤立したコロンベラ島海軍飛行場に白羽の矢が立った。

巨大猫の不思議な力によって飛行場から回収された軍事物資を前に、士官全員が激論を交わした。ほとんどの若手士官は、事情はどうあれ生き延びた以上、戦場に戻って再び祖国のために戦うことを望んだ。命を助けられた恩義を主張する大村大尉の意見に同調するものはいなかった。それどころか、巨大猫の話を鵜呑みにした大尉をあからさまに非難する者さえ現われた。

やがて、大村大尉が結論を出した。……俺は、皆の命を救ってくれたことに対して大恩を感じている。それゆえに、この猫の言葉を信じ、手助けするつもりである。我々はすでに死んだ身である。したがって、この行動は国に対しても軍に対してもこれを裏切る行為ではない。命を助けられたことに恩義を感じ、我に同調する者はついて来い。それ以外の者は、戦場に戻りあくまで陛下と祖国と海軍に対し忠節を尽くせ。

城山中尉を除く士官の全員が、戦場に戻ることを希望した。下士官の半数が、それに従った。兵はその大半が、大村大尉についてゆくことを選択した。

城山中尉は、逡巡の末大村大尉と行動をと共にすることにした。信頼していた上官だったし、兵の大多数が大尉の考えに同調したことに心を打たれたからだ。海軍士官でこれほど兵に慕われる人は珍しいと言えた。

戻ることを選択した者たちは、猫によってこの世界の記憶を消され、コロンベラ島近くの小島に移送された。大村大尉率いる小部隊は、さつそく王国軍と住民である知的哺乳類と協力して、飛行場造りに取り掛かった。整備の者たちは不稼動機をつなぎ合わせ、なんとか二機の零式艦戦を飛べるようにした。大村大尉と城山中尉は出撃を繰り返し、多くの虫……やがて地元の呼称を略してDDと呼ばれるようになった……を撃墜した。だが、わずか二機では押し寄せる虫のごく一部しか迎撃できず、多くの街や村が王国軍の奮戦にも

関わらず蹂躪された。

やがて、待望の追加機材が猫によって届けられた。どうやって手に入れたかは教えてもらえなかったが、新品のアメリカ製P-47が十二機だった。飛ばす機が無く不遇を困っていた飛曹たちは、すぐにP-47に習熟し、戦果を挙げ始めた。城山中尉も予備部品不足から飛べなくなった零式艦戦からP-47に乗り換えた。運動性は零式艦戦に比べるべくも無かったが、圧倒的な馬力と頑丈さ、それに速度は驚嘆すべきものだった。すぐに城山中尉はP-47の虜となった。航続性能が貧弱だから空母搭載は無理だが、迎撃戦闘機としてはすばらしい機体だった。こんな機体を大量生産するだけの力があり日本にあれば……。

更なる増援が届く。今度は機材と人員だった。ベロルシア東部でソ連軍機甲部隊に蹂躪されるはずだったドイツ空軍ロベルト・フルステンベルク少佐以下六十余名と、FW190D七機。

階級から言えばフルステンベルク少佐が全体の指揮を取るべきだったが、現実主義者の少佐はあっさりと大村大尉の指揮下に入ることを承諾する。機材としてはさらにP-39が二十ほど届けられ、日独混成の部隊がアメリカ機を飛ばすという奇妙な空軍は急成長を遂げた。

増援は続いた。北フランスで撤退し損ねたBf109G飛行隊の生き残り。フィリピンで追いつめられた『ろくいち二型』（三式戦）の分遣隊。連合国側の部隊は集められなかった。両陣営の者がいればトラブルは必至だったし、だいたい連合国側航空部隊がその基地において全滅するケース自体がまれだったからだ。

いつの間にか、キャリエス王国空軍は、八十名以上のパイロットと予備機を含めると百機を越す機材を運用する規模に膨れ上がった。RAFをもじったような『RQAF』の略称も、この頃自然発生的に定着した。

ただし、RQAF黎明期の機材損失は多かった。レシプロ戦闘機と、DDの速度差は小さい。機動性はむしろ戦闘機が大幅に上回る

が、乱戦になるとDDと接触し、墜落する事故は月に一回ほどの頻度で発生した。また、エンジントラブルも頻発し、ドイツ人整備員を嘆かせた。……日本人整備員からすれば、高稼働率を保っているように思えたのだが。

やがて、第二次世界大戦が終結する。すると、RQAFの中に国へ帰りたいと言いつ出すものが急増した。王国側は秘密厳守と早期復帰を条件に、希望者をいったん元の世界へと送り返した。詳しい調達方法は定かではないが、彼らには連合国の捕虜となっていたことを証明する精巧な偽造書類が渡された。

城山中尉も、そうやって一時帰国を果たした。空襲も免れ、戦前と全く変わらぬたたずまいの故郷の村に帰ってきた重光には、つい先日まで異世界でDDと戦っていたことがまるで夢のように感じられた。すでに結婚し、一人息子と典をもうけていた重光は、行方不明の戦友の消息を探ると偽ってキャリエス王国に戻った。

終戦のお陰で、世界には余剰軍用機がどっと放出された。RQAFはあらゆる手を尽くしてそれらを買入れ入れた。F6F、P-51、テンペスト、Yak9……。城山中尉はF6Fに乗り換えて飛んだ。日本の整備班は液冷エンジンを苦手としていたので、P-51には主にドイツ人が乗り込んでいた。

規模の拡大は続いた。敗戦で軍を放逐されたパイロットや整備員が、ドイツや日本には溢れていたのだ。RQAFは彼らを積極的に雇用した。傭兵部隊としての体裁が整ってきたのは、この頃だった。階級は原則として廃され、後にCOと呼ばれるようになる司令に大村大尉が、XOと呼ばれるようになる副長に城山中尉が就いた。フュルステンベルク少佐は参謀長となった。その他、古参の元士官数名が、編隊長に任命された。人員も機材も充実したRQAFはその持てる力を存分に発揮、DDの大規模襲来でもわずかな犠牲で乗り切れるほどになっていた。

地球の歴史も動いていた。主要国空軍はジェット機の導入を始めていた。ベルリン封鎖が行われ、冷戦構造の基礎が固まりつつあつ

た。NATOの結成、ドイツ連邦共和国と中華人民共和国の成立。朝鮮戦争。対日講和条約締結。

この頃から、旧連合国の元軍人が、RQAFに雇われ始めた。もちろん、敵であった日本人やドイツ人の指揮下で戦うことを承諾した者だけが雇用されたが、反発が皆無だったわけではない。しかし、大村大尉は人格者であった。自ら率先してリスクの高い任務をこなし、整備員と共にオイルまみれになって機体を整備し、暇があればいかなる雑用も引き受けるその姿勢に、当初は『Japの下で飛べるか』などとぼざいていた連中も、次第に司令を信頼し、その権威を認めるようになっていった。

やがて、RQAFの機材にもジェット化の波が押し寄せた。F-86、F-84、バンパイア、MiG-15などが、大量導入される。だが、初期のジェット機はまだ未熟であり、故障も多かった。その日、城山中尉は指揮所で全般指揮を執っていた。DDの数は二百近く。大村大尉とフルステンベルク少佐が指揮する四十七機は、順調に撃墜を重ね、DDすべてを阻止し、一機の損失も出さなかった。……少なくとも、DDとの戦闘では。

各機は編隊を組み直し、整然と基地に向け飛行した。大村大尉が直接指揮を執る編隊が待機空域まであと五分の位置に達した時、一機のF-86Fのエンジンがフレームアウトした。大村大尉機だった。高度は四千フィート。

編隊僚機が見守る中、大村大尉は再始動を試みた。だが、J47は生き返らなかった。射出せよという僚機の呼びかけに、大村大尉は応答せず、滑空を続けた。眼下は市街地だったのだ。まだ十分に燃料を搭載した機が落ちれば、大惨事となる。RQAFを預かる者として、それだけは避けたかったのだらう。

大村大尉の必死の操縦にも関わらず、高度は落ちていった。基地周辺ならば、不時着に適した場所はいくらでもある。しかし、機体はそこまで持ちそうになかった。大村大尉は失速しコントロールを失う前に、最後の操舵を行った。……市街の間に見えた小さな池目

掛け、ダイブしたのだ。激しい水柱が立ち、機体はすぐに水没したが、知的哺乳類に怪我人は出なかった。むろん、大村大尉は即死した。

次期司令には、城山中尉が昇格した。副司令には、フュルステンベルク少佐が就任した。

「で、64年のことだ」

重光が、ぬるくなつた緑茶を一口飲み下してから、続けた。

「わしは体調を崩して、地球の病院に行った。そこで、ガンが見つかった。悪性の、肺ガンだ」

「64年って言うと……」

渚は素早く計算した。1910年生まれだから……。

「五十四の時ね。母さんの生まれる前の年じゃない」

「そうだ。芳江さんが利美を身ごもっていた時のことだ」

芳江は渚の祖父和典の妻、重光から見れば息子の嫁になる。利美は渚の母で、重光の孫娘だ。

「で、どうしたの？」

「医者からはもう手遅れだと言われた。今の医学水準ならばどうにかなったかも知れないが、当時としては手の打ちようが無かつたよ。うだ。もってあと一年、という診断だった」

「……まさかとは思うけど……」

渚の脳裏に、巨大猫の群が浮かんだ。

「わしは国王陛下に司令辞任を願い出た。余命一年では、任務をまっとう出来んからな。だが、国王陛下はそれを許してくれなかった。そちでなければ、RQAFはまとめきれぬ、と言ってな」

「猫がガンを治したの？」

「そうだ。国王陛下の特別な……本当に特別な計らいで、わしのガンは取り除かれた。さらに、わしの身体には特殊な延命措置が施された。今九十五だが、おそらく百十歳までは健康に生きられるだろ

う」

「凄じくない」

曾祖父が昔から年の割に若く見える理由はこれだったのだ。『元海軍士官だから鍛え方が違う』『一年のうち大半を暖かなフィリピンで過ごしてるから』などと言われていたが、どれも間違っていた。『だが、お陰で死ぬまでCOの地位に留まることを誓わされた』

重光が、苦笑した。

「それに、いつまでたっても老けないから、奇異に思われないためには適当なところで死んだふりをするしかなかった。そこで、九十歳を期に死んだことにした。フィリピンでなら、死亡証明書の偽造も楽だしな。和典にも芳江さんにも、利美にも拓真君にも、もちろんおまえにも悪い事をしたがな」

「……完璧に騙されたわ。みんな」

渚は微笑んだ。重光との思い出は、実はそれほど多くない。フィリピンで元戦友が興した不動産関係の事業を手伝っている……おそらくこれも偽装だったのだろうが……ということで、会えるのは年に三回ほどだった。会った時には可愛がられたし、旅行や買い物にもよく連れて行ってもらったし、小学生には多すぎる額の小遣いもくれた。

「で、これからが本題だ」

重光が、身を前に乗り出した。

「82年のことだ。国王陛下が、わしに『オークリヨアム』というものを下さった。学術語で、おおよそ『守護者』というような意味だ。わしは長年の奉職に対する名誉称号だと思って、ありがたく受けておいた」

「オークリヨアムねえ」

渚は、発音にくい言葉を口の中で繰り返してみた。

「だが、オークリヨアムは単なる名誉称号ではなかった。軍の最高司令官に与えるある種の貴族位だったのだ。国王陛下としては、Dの恐怖から臣民を解放してくれたRQAFに対し、国軍と同格の

地位を与えたかったようだ。そのためには、最高指揮官たるCOにも、それにふさわしい貴族としての位を与える必要があったらしい」

「へえ。名誉なことじゃないの」

「問題はふたつ。ひとつは、わしの命もあと十五年足らずということだ。もうひとつは、オークリヨアムの地位は世襲だということ」

「はあ？」

「今のXO……ジェレミーは優秀な男だが、彼にオークリヨアムの地位を継がせることは制度上不可能なのだ。わしが死ぬ前に、血の繋がっている者を後継者として指名し、経験を積ませねばならん」

「まさか……あたしが後継者？」

「そうだ」

「だからこの世界に呼びつけたの？」

「うむ」

重光がうなずく。

……信じられない。

「なんであたしなの？ シロクマでいいじゃない」

「オークリヨアムは血の繋がっている者にしか受け継がせることはできないのだ。拓真君は婿殿。したがって、無理だ」

……確かに。

「息子とはいえ、いまさら和典に継がせる訳にはいかん。おまえに男兄弟でもいれば、継がせたいのだが……一人っ子ではな。まあ、おまえは年齢としの割にしっかりしているし、頭もよい。軍事センスもある。毎月読んどんぞ。『AFVジャーナル』と『航空マガジン』、それに『世界の海軍』のコラムを」

「無理……だと思うんだけど」

渚は頭を抱えた。CO就任など、不可能だ。部下はそれなりに実績を積んだ連中で、しかも大半が男で、年上である。多少軍事に通じてはいるものの、軍務に服した経験もなく、パイロットですらない女の子の指揮権を認めることなどありえない。軍隊とはプロフェッショナル集団であり、それを戦術面で指揮統制できるのはより優

れたプロフェッショナルのみである。少なくとも、近代軍隊においては。二十歳そこそや十代の『將軍』だの『提督』だのが活躍できるのは、歴史書の中とお子様向けファンタジー小説の中だけである。

「今すぐというわけではない」

なだめるような調子で、重光が言った。

「とりあえず、十年計画でおまえを立派なCOに仕立て上げるつもりだ。すでにおまえのために初等練習機購入の予算も組んである。

PC-9かトウカノがいいと思うんだが……どっちがいい？」

「あ、PC-9の方がかつこいい……とか、そういう問題じゃないて」

思わず口走ってしまった渚は、ひとり突っ込みをしてからあらためて重光を見据えた。

「ほんとにそんなことが可能だと思うの、ひい爺ちゃんは？」

「できる。べつに、おまえをジェットパイロットとして一流に育て上げる必要はないんだ。操縦を教えるのは、他のパイロットの思考方法や現場の感覚を習得させるために過ぎない。COの仕事は指揮統制と管理だ。国王陛下の後ろ盾があれば、権威はあとからついてくる。おまえなら、できる」

説得口調で、重光。

「他に方法はないの？」

「ないな。キャリエス王国国民二百万のためだと思って、引き受けてくれ」

二百万、と聞いて渚の心がちょっと動いた。

「……イエスと答える前に、もう少し具体的な計画を教えてください？」

「いいだろう。おまえは大学卒業まで、向こうで生活する。こちらへは定期的に通って、操縦訓練を受けてくれ。案内役に付けたエリック・ユステールは、飛行教官の経験がある。当面は、彼に教わることになる。大学卒業後は、主な生活の場をこちらに移し、本格的

な修行の開始だ。最終的には、戦術機の単独飛行はもちろん、DDとの交戦をこなせるまで学んでもらう。平行して、わしの副官格としてRQAFを率いるだけの知識と経験も研鑽してもらおう。十年かければ、充分だろう」

「……残りの人生を、RQAFに捧げるとでも言つつもり？」

「いやか？」

重光が、問う。渚は、ややためらった後に、答えた。

「……いや」

「悪くない人生だぞ。知的哺乳類はみんないい奴ばかりだ。国王陛下は立派な方だし。まあ、向こうの便利な生活に慣れた身には多少不都合があるかも知れないが、すべてのキャリエス国民に感謝される存在なんだ。有意義だよ」

渚はコアラの村で聞かされた言葉を思い出した。『空飛ぶ善き者たち』

「なにか就きたい職業とかあったのか？」

重光が、訊く。

「それは……」

シロクマの影響もあり、なんとなく軍事ライター系の仕事をしてみたい、と思っていたことは確かである。『海外取材と資料漁りにはまず英語力』というわけで、意図的に英語の勉強には力を入れてきた。だが、それが人生の当面の目的だったわけではない。なにしろまだ十七歳である。この先どんな出会いや発見があるかも知れない。人生の進路なんて、ちよつとしたきっかけで変わってしまうものだ。

「まあ、とりあえず今回の目的は、色々とキャリエスとRQAFについて知ってもらうことだからな」

重光が、言った。

「とにかく様々なものを見て、多くの人に話を聞いて、なんでも経験してみるといい。決断は、急ぐ必要はない。わしは、おまえが後を継いでくれると確信している」

「どうして？」

「他に選択肢がないからだ」

「それって、ひどい言い方じゃない？」

「溺れている仔猫を見たら、どうする？」

唐突に、重光がそんな質問を放った。

「そりゃ、助けるわよ」

「なぜ？」

「仔猫が死んだらかわいそうじゃない」

「それも、他に選択肢がないからだろう？ 自分が助けねば、仔猫は死ぬ。だから、自分が助ける」

重光が、指摘する。渚は腕組みした。どうも、うまく嵌められたという気がする。

「今のところ、返答は保留させてもらうわ。とりあえず、シロクマに連絡を取ってくれない？ あたし、コンビニの帰りに行方不明になったんだから、騒ぎになってるとまずいわ」

「心配ない。すでに利美にはRQAFのスタッフが接触した。今は夏休みだろう？ しばらく家を空けても、問題はないはずだ」

「確かに……」

「さて。本来ならば次は国王陛下に謁見といきたいところだが……今現在国王陛下は南西部の視察中で王都を留守にしておられる。二日ばかり王都の見学でもしていてくれ。おそらく三日後に、DDの大量襲来がある。その時には、ここの防空指揮所に詰めて、迎撃指揮統制のやり方を見学してくれ。いいな」

「……はい」

渚は気乗りしない返答をした。

「それと……」

重光が、封筒を差し出す。

「なに？」

「カネだ。いくらか持ち歩いていた方が、都合がいいからな」

渚は中身を確認した。真新しい二十ドル紙幣がきっちり十枚入っ

て
い
た。

5 曾祖父（後書き）

第五話をお届けします。いきなりですがお詫びと訂正を。あらすじなどで『異世界空戦もの』と謳っておりましたが、改めて見直してみると空戦シーンがさほど多くないことに気付きました（汗）。（主役がパイロットじゃないんだから気付けよ作者）そこで煽り文句を『異世界冒険もの』に差し替えたいと思います。失礼いたしました。では用語解説 J47/G E開発のターボジェットエンジン。多数の戦闘機、爆撃機に搭載された名エンジンである P C - 9 / スイスのピラタスが開発したターボプロップ練習機。トウカノ / エンブラエル E M B - 3 1 2。ブラジル製のターボプロップ練習機

6 ヴォーゲオス生態講座

「ドクター・ゲラだ。よろしく」

差し出された手は、とても医者とは思えぬごついものだった。太くて短い指。分厚い手のひら。白衣の下に隠された腕も、相当太そうだ。激しくウェーブした褐色の髪と、やや赤味がかった浅黒い肌。黒縁の眼鏡。顔立ちは、明らかにラテン系だ。白衣の下には着古した栗色の開襟シャツを着込んでいる。ズボンの裾は、明らかに短過ぎた。……服装には頓着しない人のようだ。

「城山渚です」

渚は手を握り返した。

「話は聞いている。ヴォーゲオスについて知りたいのだね。資料を取ってくるから、ちよつと待っていてくれ」

座るように促しながら、ドクター。

ドクター・ゲラの医務室は、日本の小さな個人病院の診察室とほとんど変わりがなかった。ファイルケースが載った大きな事務机。レントゲン写真を見るためのバックライト付きの装置……正確にはなんと言っのだろう？ カルテを保管するためのファイルキャビネット。合成皮革張りの診察台。薬品戸棚。銀色に光る様々な器具が整然と並べられたカート。タオルやガーゼ類を収めた棚。壁には、人体の骨格図や神経系統を図示したものが張られている。空気は、当然ながら消毒薬臭い。渚は患者用の丸椅子に腰を下ろした。

ほどなく戻ってきたドクターは、大きなダンボール箱を抱えている。……ケチャップであまりにも有名な企業のロゴマークが描いている、古びた箱だった。

「これが、わしの前任者のドクター・アルベリンが残したヴォーゲオスに関する資料のすべてだ。スウェーデン語は読めるかね？」

診察台に箱をどしんと置いたドクターが、訊く。

「まさか」

「そうか。わしも読めん。彼は膨大なメモを残してくれたが、ほとんど母国語で書き残したのでね。まあ、オームラにも何人かスウェーデン語が読める者がいるから、より詳しいことを知りたければ彼らに頼めばいい。おおよその事柄は、ここにファイルしてある」

ドクターが、箱の中から一冊の分厚いファイルを取り出した。事務机に戻り、最初のページを開く。渚はファイルを覗き込んだ。横たわるＤＤの写真だった。

「では始めよう。ヴォーゲオスは明らかに昆虫だ。それも甲虫の一種と考えられる。節足動物門、昆虫綱、甲虫目だな。身体が対節に分かれ、肢に関節があり、体表が外骨格に覆われていることなどがその証明となる。ちなみに外骨格は分厚いが普通の甲虫類と同様、クチクラ類で出来ている」

「クチクラ？」

「セルロースに似た物質だ。主成分はキチン質」

「キチン質って、聞いた事はあるんですけど。たしか、蟹とかの殻を形成している物質でしょ？」

「そうだ。思い違いをしている人が多いが、甲殻類……いわゆる海老、蟹の類だな……も節足動物だからな。虫嫌いの奥方様が、その親戚たるロブスターや海老を旨そうに食べてるんだから、無知とは恐ろしいものだ。それはともかく……キチン質というのは、グルコースにアミンとアセチル基が付いたものが重合して出来た長い鎖状分子のことだ。まあ、一種の多糖体だな」

渚は化学はあまり得意ではない。キチン質に関するドクターの説明はほとんど理解できなかった。

「ヴォーゲオスが他の昆虫と違い、巨大な身体を持つことができたのは、部分脱皮をするからだ。脱皮の仕組みは、判るかね？」

ドクターが、訊く。

「大体は、理解しているつもりですけど」

蝉の抜け殻を脳裏に描きながら、渚は答えた。

「なら話は早い。昆虫は、脱皮して古い外骨格を脱ぎ捨て、一回り

大きな身体となる。場合によっては、脱皮に伴って身体の構造が大きく変わる場合もある。陸棲の節足動物の脱皮は、重力との戦いでもある。体重を支えてくれる外骨格を、一時的にしる失うわけだから。だから、昆虫は大型化できない。しかしながら、ヴォーゲオスは身体の一部だけを脱皮させることができる。例えば、体節ごとに順番に脱皮してゆくことも可能だ。そうすれば、重力に抗することもできるし、脱皮に伴う脆弱さとも無縁でいられる。もっともあれだけ大きければ捕食されることもないだろうがね」

「部分脱皮ねえ……」

渚は首をひねった。進化の妙、といえばそうなのだろうが、なんとなく反則の気もする。

「話を先に進めよう。ヴォーゲオスの身体は、他の昆虫同様、三つに分けられる。頭部、胸部、腹部だ。頭部には口器、眼、一对の触覚。胸部には三対の肢と、二対の翅。腹部には消化器官、排泄器官、生殖器官などがある。典型的な昆虫の特徴だな。解剖の際の写真があるが……」

ドクターがファイルを探り、数枚の写真を引っ張り出した。DDの解剖写真だ。渚は思わず顔をしかめた。昆虫とはいえ、大きいから見た目は結構グロい。

「では、DDの体の作りを説明しよう。まずは頭部だ。見ての通り細長く滑らか。触覚は短く、おそらくは通常の昆虫に比してあまり機能していないものと思われる。飛行の際にエアデータセンサー代わりに使われている節はあるがね。この力ヌー型の膨らみが眼で、かなり高度な複眼だ。一番の注目点はここ、脳だ」

ドクターの太い指が、一点を指した。

「通常、昆虫の脳は複数の神経球が融合したものに過ぎない。だが、DDの脳は明らかに肥大している。ここここにある神経球も、相当の肥大が見られる。おそらくは、小脳や中脳の役割を果たしているのではないかな。最大の脳の重量は、三百グラム程度に達する。それから類推すると、犬並みの知能があるのではないかと推察され

る」

渚は写真を覗き込んだ。淡いピンク色の脳は、たしかに大きく見えた。

「少し脱線するが、ヴォーゲオスの社会はそれなりに高度なものと考えられる。彼らのコロニーは、単なる居住地域ではなく、ある種の農場だと思われるのだ」

「農業をやっているの？」

「ああ。偵察写真の分析によれば、きわめて原始的ではあるが、特定の食用に適した草を育てていると考えられる。まあ、もつと低知能の昆虫でも、農業の真似事をする連中がいるからな。驚くには値しない。……ついでに北部地域の生態系破壊についても説明しておこうか。その昔、北部地域にはかなり大型のものを含む非知的哺乳類が多数生息していた。しかし、現在ではほぼ激減している」

「ヴォーゲオスに殺されたのですか？」

「いや。それよりももつと深刻だ。ヴォーゲオスの大繁殖により、生息域を追われてその数を減らしたのだ。中型の……まあ、犬くらいのサイズの動物も、かなり減少したと見積もられている。……では、話を戻そうか」

ドクターが、新たな写真を取り出す。

「続いてD Dの胸部と腹部だが……胸部と腹部の第一節が融合しているのが判るかな？ これは前伸腹節と呼ばれる、膜翅類……まくしるい……蟻とか蜂の仲間だな……の特徴でもある。この腹の方を通っている線が神経線だ。典型的な梯子状神経線だな。太くなっているところが神経節で、ここから各所に細かい神経が伸びている。背中側に伸びているのが心臓だ。周知のように昆虫の血液は開放血管系になっている。血の色は見ての通りやや黄色味を帯びている。この辺りにある小さな器官は、用途不明だが……形状から見て、なんらかの腺だろう。胸部は筋肉がびっしりとついているのが判るかな？ 昆虫は体重に比べ、筋肉の量が多い」

ドクターが、写真を差し替えた。

「面白いのが消化系だ。普通、昆虫は大きな『そのう』を持っているものだが、DDにはそれが無い。退化した跡は見られるが。胃はこれだ。繋がっているのが直腸。これが肛門。この細長い何本もの管がマルピーギ管だ。脊椎動物の腎臓の役割を果たす器官だな。で、これが……」

ドクターが、いったん言葉を切った。渚は彼が指し示す器官を見つめた。肛門付近にある、さして太くはない管。何であるかは、渚の生物学の知識でも容易に判った。

「生殖口ね」

「うむ。……若いお嬢さんに説明することに慣れていないのでな。

……これが卵巣。これはおそらく受精囊だ。今のところ、解剖されたDDはみな雌であることが判明している。蟻や蜂と同様だな」

渚はすつと消毒薬臭い空気を吸い込んだ。やはり、ヴォーゲオスの社会も蟻や蜂に近いのだろうか。

「DDの一番の特徴が、上翅だ。普段は甲虫同様、後翅を保護するカバーの役割を果たしている。飛行の際には、これが左右へと開かれ、揚力を生む。前縁の一部と、後縁のかなりの部分はある程度の柔軟性を持っており、その翼面積を変化させ、飛行速度に応じた最適の翼形を形作るわけだ。前肢のパドル状の先端も、ある程度の揚力を生みつつ、飛行姿勢の制御に貢献していると思われる。後翅は軽量かつ高い強度をもっている」

「いまだに二百五十ノットで飛べるとというのが信じられないんですけど……」

「わしもそうだよ」

ドクターが笑いつつ、新たな写真を出した。上空から撮影した、BVの写真だ。相当拡大したらしく、かなり画素が荒い。

「BVに関しては、一匹も捕らえられた事がないので、詳しいことは判らない。DDとの見かけ上の相違点は、飛行しないことと、体が若干小さいことくらいだ。おそらく、体の構造はそれほど変わらないだろう。ただし、消化系と生殖器官はおそらくBVの方が発達

していると思われる。ヴォーゲオスの食糧は、先ほども述べたとおり、草だ。推測だが、DDはBVによって、食べやすく加工されたものを与えられているのではないかな。それで、『そのう』が退化している理由の説明がつく。それと、おそらくDDの生殖器では交尾して子供を作ることとは無理だろう。BVがもっぱら生殖と生産にいそしみ、DDを養っているに違いない」

「蟻や蜂みたいに、女王ヴォーゲオスがいる可能性は？」

「それはない。第一に、隠れる場所がない。ヴォーゲオスは、地面を掘ったり巣作りをすることはないからな。第二に、BVが出産するところを写真に撮られている。ええと……」

ドクターがファイルを探り、写真を引っ張り出した。

そこには、一匹のBVが写っていた。無理して拡大したようで、細部はぼけている。

「ここだ」

ドクターが指し示す。

「えっ」

渚は思わず絶句した。……BVの尾部から、やや茶色がかった白い塊が出ている。それは卵でも糞でもなかった。あまりにも小さく、また弱々しかったが、それは紛れもなく小さなヴォーゲオスだった。

「……卵じゃないんだ」

昆虫イコール卵、という渚の認識が崩れた。

「正確に言えば、卵胎生だろう。胎内で卵を孵すやり方だ。卵胎生自体は珍しいことではない。蛇やサメの一部、貝の仲間、ハエにも見られる。アブラムシも有名だ。言うまでもなく、高度な脊椎動物は胎生だ。ヴォーゲオスは昆虫としては、高度な発達を遂げているひよつとすると、完全な胎生への移行する過渡期にある生物なのかも知れない……」

ドクターがそこまで言ったところで、医務室の扉にノックがあった。返事を待たずに扉が開けられ、褐色のアナウサギが顔を出す。「ドクター、患者さんです。発熱と腹痛を訴えてらっしゃいます」

アナウサギが、言う。声からすると、雌のようだ。

「悪いが、仕事だ」

ドクターが言って、ファイルを渚に押し付けた。

「ジャスレイン、患者を入れて。それからこのお嬢さんの相手を頼む」

「判りました、ドクター」

ウサギが引つ込む。渚は広げられた写真を集めると、ファイルに突っ込んだ。入ってきた若い黒人男性……整備班の一員だろうか、油の染みがついたカバーオールを着ている……に、椅子を譲る。

「こちらへどうぞ」

資料が詰まったダンボール箱を抱えたアナウサギに促され、渚は隣室に入った。倉庫のようで、大きな戸棚に各種の薬瓶や小箱の類がぎっしりと詰まっている。一方の壁にはダンボール箱の山。隅には、よく医療ドラマで見かけるような医療機器が数台、半透明の力バーが掛かった状態で押し込めてあった。消毒薬とは別の、薬品臭い空気がこもっている。渚は通っている高校の理科準備室を思い起こした。

「ジャスレインよ、よろしく。ドクターの助手なの」

箱を置いたウサギが握手を求めてくる。渚は名乗り、手を握り返した。

「ヴォーゲオスのことを調べていたのね。何を知りたいの？」

「ええと……大体のことは判りました。あと知りたいのは、DDの正体です。ヴォーゲオスのなかで、DDはいつたいどのような役割を果たしているのですか？」

「それはまだ定説がないのよ」

すまなそうな表情で、ジャスレイン。

「いわば兵隊蟻のような存在で、わたしたちを敵と認識し、襲撃しているという説。繁殖域を広げるための、移住集団だという説。ある種の偵察部隊だという説。雄蜂のように、なんらかの繁殖行為なししその準備段階として飛行するという説。どれも証明しようがない

い。B Vの解剖が出来たりすれば、いろいろ判ることもあると思うんだけどね」

「B Vを手に入れる方法はないかしら？」

「まず無理ね。ヴォーゲオスのコロニーまであなた方のヘリコプターで行けない事はないと思うけど、そこからB Vを捕まえてくるなんてことは、あまりにも危険すぎるわ」

「うーん」

渚はヴォーゲオスの生態を思い描こうとした。草を育て、食むB V。交尾するB V。生まれてくるD DとB V。小さなD Dに食物を与えるB V。大きく育つD D。やがて、その立派な羽根で飛び立ち、群を成して南下するD D……。

「D Dは、他の方向に飛ばないの？」

「南以外は、海だもの。ヴォーゲオスは海では生きられないわ。D Dの目的が何であつたとしても、海に用事はないでしょう」

黒い鼻面をぴくぴくと動かしながら、ジャスレインがそう指摘する。

「昔はこの島にヴォーゲオスはいなかったのでしょうか？ どこから来たのかしら」

「ちよつと待つて」

ジャスレインが、言い置いて倉庫を出る。すぐに戻ってきた彼女の手には、一枚の手書きの地図があつた。書き込まれている文字は、どう見ても人類のものではない。知的哺乳類の手書き地図らしい。

「見て」

差し出された地図を、渚は受け取つてしげしげと眺めた。大半は、海だ。真ん中にぼつんとあるのは、その細長い形からしてキャリエス島だろう。その西方に、ほぼ正方形の大きな陸塊がある。ただし、その北側と西側にはつきりとした海岸線は描かれておらず、陸域がさらに地図の外へと続いていることが表現されている。大きさは……キャリエス島の長さが約五百キロだから……：一片が八百キロ程度……：陸塊からの距離は、ざっと見てキャリエス島三つ分……：千五百

キロほどだろう。

「おそらく、この大陸からなんらかの状況で渡ってきた、と考えられているわ」

「DDって、そんなに飛べるの？」

「暴風で飛ばされたとか、あるいはBVが樹木のような水に浮くものに乗って、流れ着いたのかも知れないわ。ともかく、この西の大陸に、ずっと以前に……あなた方の時間の単位で百年以上昔に探検隊が向かったことがあったの。その時の記録に、ヴォーゲオスに関する記述が見られるわ。その後探検隊は送られていないけど、七十年ほど前に急にこの島でもヴォーゲオスが繁殖するようになった。その後の展開は、知つての通りよ」

「他に、近くに陸地はないの？」

「ないわ。小さな島は別だけど」

ジャスレインが答える。渚はもう一度手書き地図を見た。キャリエス島の周囲に針で突いたような小島がいくつか描かれているが、この大きさではヴォーゲオスのような超大型昆虫が繁殖するのは無理であろう。

「他に聞きたいことはある？」

ジャスレインが、訊く。

「ひとつだけ。なぜヴォーゲオスは、あんなに大きいのか？ 少なくとも地球の常識では、昆虫は小さな身体を保つことによって生き延びてきたと考えられているわ。大きければ身体の維持により多くのエネルギーを費やさなければならぬし、脊椎動物との競争にも打ち勝たなければならない。肉食や雑食性ならともかく、低力ロリーに甘んじなければならぬ草食で身体が大きいというのは、有利とは言えないわ」

「それについても諸説あるけど……一番有力なのは、捕食を避けるために大きく進化した、というものね。脊椎動物でも、開けた場所に生息する草食動物は、大型化する傾向が見られるものよ。通常の昆虫とは逆の生残方法を選択したんじゃないかしら。ヴォーゲオス

の茶系の体色も、ある種の保護色であると考えれば、その説の補強材料になるわね。あるいは、長距離飛行の必要性の為に大型化したのかも知れない」

淀みなく、ジャスレインが答える。

「……ずいぶん、生物学に詳しいのね。凄いわ」

「勉強したもの」

渚にほめられたジャスレインが、誇らしげに大きな耳を揺らす。

「あとひとつだけ頼まれてくれる？ その探検隊とやらの記録が見たいわ」

「原本は王宮に保管されているわ。でも、学術語で書かれているから、あなたには読めないわね」

慎重深く前脚で口元を隠しながら、ジャスレインがくすくすと笑う。

「でも、英語に翻訳したものがああるわ。たしか、このあたりに……」

ジャスレインがダンボール箱の中を探り、A4くらいのサイズの紙を束ねたものを取り出した。かなり黄ばんだ、古い物のような。

渚は受け取って顔をしかめた。タイプした書類を昔のコピー機で複写したものらしく、活字が潰れて読みにくい。

「これ、借りていい？」

「もちろん。でも、必ず返してね」

渚はジャスレインに礼を言って、宿舎に戻った。

翌日の渚の行動は、王都の見学に費やされた。

立派な都市であつた。碁盤目状に伸びる広い通り。両側に立ち並ぶ商店。商われているのは、食糧、飲料、雑貨の類。渚はエリックの案内で、小動物が売られている店……いわばペットショップだ……に入り、鮮やかなオレンジ色の毛が美しいフェレットもどきを一匹買った。経営者らしいビーバーに二十ドル紙幣を差し出すと、金色に輝く錠剤のようなものが三粒、お釣りとして返ってきた。まるで江戸時代の豆板金のようなのだ。

「名前は何にする？」

さつそく渚の肩に載って甘えだしたフェレットもどき……ミヤーシエを見ながら、エリックが訊く。

「そうねえ。あなたのサビーヌってのは、女性の名前でしょ？」

「そうだ」

「この仔は雌？ それとも雄かな？」

「なんだ、確かめずに買ったのか？」

エリックが、ミヤーシエをひよいと摘み上げた。股間を一瞥し、言う。

「雌だな」

「じゃあ、女の子の名前にしましょう。フランス名前でいいかな？」

「シュザンだけはやめてくれ」

「どうして？」

「女房の名前だ」

真剣な表情で、エリック。

「じゃあ、なんにしようか……」

「日本風の名前をつけてやれよ」

悩む渚に、エリックがそう勧める。

「シュザンヌって、どういう意味？」

渚はそう訊いてみた。

「聖書に載っている名前だ。英語で言えばスザンヌ。ユリを意味するらしい」

「決まった。この仔の名前はユリよ。きれいな名前だわ」

渚はユリを肩に載せ、エリックをお供に引き連れてあちこちを見てまわった。様々な知的哺乳類がいた。青物を商うシマリスの店に買い物にきた、ウォンバットの親子。なにやら声高に議論しながら歩いているヒトコブラクダとフタコブラクダ。どう見てもカフェにしか見えない一軒の店では、ボウルに入った飲み物を楽しむイボイノシシや何頭かのアンテロープの間を器用にすり抜けて、二頭のブチハイエナがウェイター役を務めていた。

「すごいわね」

渚は半ば呆れつつ街路を歩んだ。やがて二人は、緑の多いちょっとした広場に行き当たった。

「ここはなに？ 公園？」

「ある意味ではそうだ。興味深いものがある」

エリックが、指差す。

公園のほぼ中央に、二体の彫像が並んで突っ立っていた。近寄った渚は、それをじつくりと眺めた。

二体とも、ほぼ等身大と思われる石像であった。低い台座も、白っぽい石できており、何本もの花束で覆われている。右側の一体は鉤鼻が特徴的な中背の男性で、軍服のようなものを纏っている。左側の一体はクラシックな飛行服を着用したやや小柄な男性で、東洋系の顔立ちの優男だ。渚は二人が誰であるかをすぐに察した。

「フルステンベルク少佐と、大村大尉ね」

「そうだ。RQAFの二大英雄さ。ここは、墓地兼用の公園なんだ」
エリックが、誇らしげに言いつつ、石像の向こう側を手で指し示した。そこで初めて渚は、芝草の中に整然と埋め込まれている多数の小さな石板に気付いた。……おそらく、戦死したRQAFメンバーの、終の棲家なのだろう。

「ここは、知的哺乳類が自主的に造ったんだ。それもわざわざ王都の真ん中にな。墓地なんて、郊外でも構わないのに。連中、受けた恩はいつまでも忘れないんだ」

台座からこぼれ落ちた花束を拾い上げながら、エリックが言った。

「義理堅いのね」

「ああ。悪く言えば馬鹿正直だよ、ここの連中は」

花束をそつと大村大尉像の足元に載せながら、エリック。

「今のCOも、亡くなったらこの隣に像が立つだろうな。君も、COとして勤め上げれば……」

「それは恥ずかしすぎるわね」

渚は苦笑した。

二人は並んでしばしのあいだ石像を眺め続けた。涼しげな風が、手向けられた花々を優しくなぶっている。ユリも、渚の肩の上でおとなしくあたりを眺めていた。遠くで、複数の知的哺乳類が騒いでいるのが聞こえる。子供たちが、遊んでいるのだろうか。

「そろそろ行こうか」

エリックが、小さく伸びをしながら言った。

「次はどこ？ わたし、ちょっと小腹が空いたんだけど」

渚は胃の辺りを撫でた。

「よし、次は俺のひいきの店に行こう。あそこは旨いぞ」
エリックが言って、親指を立てる。

路地に折れたエリックが、前方を指差す。

「あそこが、俺のひいきのレストランだ」

「……ていうか、屋台？」

路地の突き当たりにあったのは、差し掛け小屋と見まがわんばかりの粗末な小屋であった。黒ずんだ壁板が、その歴史を感じさせる。板張りの低い屋根には、長方形やし字型など様々な形状の板で補修がなされている。地の板と新たに張られた板の色合いが全く異なるので、テトリスの画面上部を見ているかのようだ。

「注文は、パスタがいい。絶品だぞ」

エリックが勧める。

オーナーシェフのシロサイが出してくれた『パスタ』は、鉛筆くらの太さを持つ黄緑色の麺の上に、中華風に味付けした細切りの野菜と肉の炒め物が載っているという奇妙なものであったが、味はエリックが勧めるだけあって上々であった。

「さて。そろそろ戻るとしようか」

店を出ると、エリックがそう言って、路地を歩みだした。

「そうね」

渚は同意した。本音としてはもっと色々と見てまわりたいところだが、エリックの都合も考慮せねばなるまい。

「どうだ。気に入ったか？」

気さくな調子で、エリックが訊く。

「うん」

渚は正直にそう答えた。馬鹿正直で、可愛らしい知的哺乳類たち。こんな住人を守る仕事ならば……やりがいがあるかもしれない。

……でも、石像が立っちゃうのは、ちょっと、ねえ。

6 ヴォーゲオス生態講座（後書き）

第六話をお届けします。用語解説 レントゲンを見るための装置ノシャウカステンという名称だそうです。作者も初めて知りました。そのう／消化管の一部。摂取した食物を一時的に蓄えておく場所

7 国王陛下

「この数字、なに？」

渚は食堂の前の掲示板に張られた紙を指差した。黄色い目立つ紙に、『Today 0/30 Tomorrow 50/20』とだけ書いてある。一見すると、降水確率のようだが。

「DD大規模襲来の予測だ。今日の午後が30パーセント、明日が午前50の午後20。したがって、本日午後から警戒態勢に入る。COに会ってきた方がいいぞ」

エリックが勧める。渚は素直に従い、CO執務室をノックした。

来意を告げると、重光が腰をあげた。

「それでは、防空指揮所を案内しよう」

防空指揮所は、CO執務室の真向かいにあった。かなり広い部屋だ。畳敷きにしたら、五十枚くらいは敷けそうだと渚は見当をつけた。一方の壁には作りつけの長いベンチがある。その右側、壁際は通信区画らしく、いくつかのブースに大小の無線機が設えてあった。廊下側の壁には扉が四つあり、その間に長いカウンターが設けられている。中央部には作戦台だろう、大きなテーブルのような台が置かれている。残る一方の壁際には、移動式の黒板やスライド映写機、ビデオプロジェクターなど、普通の会議室に置かれているような備品がやや乱雑に押し込められていた。

そこではすでに数名の男女が準備を進めていた。クリップボードに何か書き入れている背の低い初老の東洋人。筒状に巻いた紙を手にした若いハンサムな黒人とひそひそ話をしている赤毛の美人。作戦台に身を乗り出し、メモを見ながら何かを書き写している茶色い巻き毛の男性。通信機の調整に余念がないターバン姿の青年と、隅で配電盤をチェックしているちよつと西田敏行に似た四角い顔の中年の男性。

「ヒルトップ・レーダーがDDの大規模襲来を捉えたと同時に、R

QAF全体が戦闘態勢に入る」

説明しながら、重光が作戦台に歩み寄った。長さが十二、三メートル、横幅が五メートルはある大きな作戦台だった。キャリエス島中部と南部の北三分の一ほどが描かれた大縮尺地図……二万五千分の一くらいか……の上に、厚いガラス板を載せてある。

「すでに、出撃計画は組んである……というよりも、毎回同じだから、パイロットと搭乗機、それに兵装を確認すればいいだけだが。現在のローテーションではグループ1がFベース、グループ2がオームラAB、グループ3が予備となっている。まず、戦闘態勢に移行次第、Fベースのアライト機二機が離陸、DD群と接触しその上空で監視に入る。その間にFベースのグループ1とオームラABのグループ2が離陸。その後、予備機四機が離陸。グループ1はそのままDDと交戦、離脱してFベースに帰投。次いでグループ2が交戦。離脱して帰投。予備機はDD群の左右で、はぐれたDDを狩る。この時点で残存DDが少数ならば、上空監視機と予備機がそれらを片付け、作戦終了となる。まだ十分な数が残っている場合は、Fベースに帰投したグループ1から再武装した機が離陸、順次交戦する。仮にそれでもなおDDが残っている時は、オームラABよりグループ2が再武装して発進、交戦する。そういう段取りだ」

「最近、知的哺乳類に被害が及んだことであるの？」

「ないな。ここ二十年くらいは、一度もない」

やや誇らしげに、重光。

昼食後、渚はサロンに行った。宿舎よりも、防空指揮所に近いからだ。

どうにも落ち着かなかった。週刊誌を手にとって眺め、それを戻し、時計に眼をやり、サモワール……Fベースにはなかった代物だ……から火傷しそうに熱い紅茶を注ぎ、新聞を手にし、大して興味もない家庭欄などを読み、いつの間にか冷めてしまった紅茶をすすり……。

「落ち着けよ、渚」

見かねたエリックが、声を掛ける。

「……羨ましいくらいに落ち着いてるわね」

「出撃の予定がないからな」

フランス語新聞……多分リベラシオン……を読みつつ、エリックがのんびりと答える。

「おそらく今日はこないよ。明日の午前中だな。賭けてもいい」

「乗らないわ」

渚は憮然としてそう言った。明日午前中の確率は五十パーセントなのだから、分が悪すぎる。

やがて、長すぎる午後が終わった。やはり、DDはこなかった。

翌日、朝食を済ませた渚はサロンへと顔を出した。だが、エリックの姿はなかった。ふと思いつて防空指揮所へ向かった渚は、すでにそこに大勢の人員が詰めていることに気付いた。慌てて中へと入る。

「戦闘態勢に入ったんですか？」

たまたま手近を通りかかったモデルみたいにきれいな長身の黒人女性……氷がたくさん入った水差しを手になっている……に訊く。

「まだよ。でも、COの勘じゃそろそろみたいね」

ウインクして、女性。

渚は作戦台に歩み寄った。真剣な眼差しで長方形のプラスチック片……RQAF機かエレメントを示すものだろう……を並べたり、グリースペンシルでなにやら書き込んだりしている人々の邪魔にならないように気をつけながら、覗く。

「こっちだ、渚」

エリックの声に、渚は振り返った。手招きされ、しゅしゅ作戦台を離れる。

「DDが来るの？」

「COの野生の勘……と言いたところだが、長年の経験からの判断だ。今ごろの時期で今日みたいに早朝から快晴の場合は、午前の

早い時間に来ることが多いんだ。まず間違いなく、来る」

「COは？」

「あそこだ」

エリックが指差す。

重光の姿は、通信区画にあった。ヘッドセットを着け、ブームマイクでどこかと喋っている。周囲のざわめきで、声までは聞き取れなかった。

「まあ、のんびり行こう」

エリックが、渚をカウンターへといざなった。そこにはすでに、コーヒポットや電気ポット、ピッチャーの類などが林立していた。「コーヒーでも飲むか？」

「冷たいものがいいわ」

渚はおそらくレモネードと思われるピッチャーを取り上げ、グラスに注いだ。立ったままちびちびと飲んでいるうちに、通信区画が慌しくなったことに気付く。

不意に、ブザーの音が鳴り響いた。

「始まったぞ！」

エリックが、ブザーの音に負けぬように声を張り上げる。

人々がどやどやと走り回り、それぞれの配置についた。エリックに導かれて、渚はグラスを手にしたままベンチに腰を下ろした。

ブザーが止む。騒がしかった防空指揮所は、急に静かになった。

無線交信を行う要員の押さえた話し声と、紙が擦れる音、それにグリースペンシルの先がガラス板に当たるかちかちという音くらいしか聞こえない。だが、その静けさもエプロン方面から巻き起こったジェットエンジンの咆哮にかき消されてしまう。

渚が緊張して見守っていると、重光がヘッドセットを外し、作戦台に歩み寄った。下の方に手を伸ばし、もっと小型軽量のヘッドセットをつかみ出す。コードを繋ぎ、ブームマイクを調節した重光は、渚の姿を見てにこりと笑ってから、まじめな顔に戻ってひとつ咳払いした。

「COだ。状況を説明する」

エンジンの咆哮に負けぬ力強い声が、天井のスピーカーから降ってくる。

「DDの規模はオレンジ。アングス・エレメントが先行離陸した。グループ1十機、グループ2十二機が離陸準備中。予備機は予定通り四機。CSAR（戦闘搜索救難）も待機中」

「オレンジって……何匹だっけ？」

渚は小声でそう問うた。

「五百未満二百五十以上」

簡潔に、エリック。

やがて、ジェットエンジンの唸りも消えていった。グループ2と予備機が、離陸したのだ。

「アングス・エレメント接触報告。DD規模は四百」

静けさを取り戻した防空指揮所に、通信員の報告が響く。

空になったレモネードのグラスをカウンターに戻した渚は、ベンチに座って状況を見守った。重光と同じようなヘッドセットを着けた二人の女性が、作戦台に置かれた色付きのプラスチック片を動かしてゆく。原始的なようだが、確実な戦況表示兼把握法である。渚はバトル・オブ・ブリテンの際の英空軍管区基地作戦室を写した写真を思い出した。

「グループ1、目標視認。交戦許可を求めています」
「許可する」

通信員の問いに、重光が即座に許可を与える。

渚は戦闘の模様を思い描いた。グループ1には、ヴァルヴァラとブラサンのペア、それにホルヘが加わっている。Su-22の翼下に吊られたUPK-23/250……二十三ミリ双連機関砲GSh-23-Lを収めたガンポッド……が火を吐き、撃ち抜かれたDDが滑空しながら落ちてゆく。ブラサンのF-5が積んでいるのは、SUU-23あたりだろうか。固定武装のM39だけでは、弾薬が足りないだろうし……。

やがて、兵装を撃ち尽くした各エレメントから空域離脱を告げる報告が続々と舞い込んできた。シヨーン・エレメント。レナート・エレメント。マイラ・エレメント。ライナー・エレメント。そしてヴァルヴァラ・エレメント。

「アンガス・エレメントより報告。残存DDは二百」
通信員の報告に、重光が唸る。

……グループ1は五エレメント十機だったから、一機あたり二十匹撃墜ということになる。渚は立ち上がって、作戦台を覗き込んだ。グループ2を示すプラスチック片は、DD群を示す赤い線の寸前まで迫っている。予備機も所定の位置についたようだ。グループ2は六エレメント十二機だから、計算では再出撃なしでDD群を殲滅できる。

「グループ2、目標視認。交戦許可を求めています」

「許可する。ダヤラム・エレメントおよびグリゴリー・エレメントにも交戦許可を」

重光が命ずる。

渚は息を詰めて推移を見守った。DD二百対十二機。さて、計算通りに行くのだろうか。

やがて、グループ2全機が空域離脱を告げた。すぐさま、アンガス・エレメントから報告が入る。

……残存DDを認めず。

重光がすぐさま予備機のダヤラム・エレメントとグリゴリー・エレメントを呼び出す。こちらからも、DD視認せずとの報告が入る。Fベース、ヒルトップ双方のリーダーも、DDの姿を捉えていなかった。

重光がアンガス・エレメントに帰還を命ずると、燃料に余裕のあるダヤラム・エレメントとグリゴリー・エレメントに低空および地上の搜索を命じた。リーダーに引っ掛からない低い高度をDDが飛んでいる可能性……これは低い……と、いったん撃ち落したものの再び飛行できる状態のDDがいなかどうか探させたのだ。エリッ

クの解説によれば、通常二千フィート以上の空から叩き落されたDは、地表に激突して大破するが、上翅の揚力のお陰で滑空できた場合には、生きたまま着陸する場合もかなりあるという。両エレメントは燃料の許す限り搜索を行い、原型を留めたまま地表にいるDに対し、見つけ次第銃撃を加えてこれを破壊した。

重光が作戦終了を宣言したのは、アンガス・エレメントとグリゴリー・エレメントがFベース……ぎりぎりまで粘ったので、オームラまで帰る燃料は残らなかった……に着陸したあとだった。

「感想は？」

ヘッドセットを片付けながら、重光が訊く。

「アルファジェットに乗ったときよりも緊張したわ」

渚は正直にそう答えた。

「そう難しい仕事じゃない」

後片付けに入っている男女をそれとなく指し示しながら、重光。

「皆優秀で、自分の仕事を心得ているプロだ。COはそれを調整し、決断を求められた時に適切な判断を下してやるだけでいい。経験さえ積みめば、おまえにも務まる」

「まあ……多分ね」

キャリエス国王が王都に帰還したのは、その翌日だった。

「さあ、国王陛下に謁見だ」

宿舎に重光が迎えに来る。渚は、自分の姿を見下ろした。いつもの淡いオレンジのカバーオール姿である。

「正装とかしなくていいの？」

「おいおい。ここの知的哺乳類はみんな基本的に裸だぞ。人間の服装なんて、誰も気にしない。ただし、鼻は敏感だからな。気になるようだったら、シャワーは浴びておけ」

重光が笑いながら言う。渚は肩をすくめると、髪だけ梳かしてから、重光のあとに続いた。

モータープールで、ニッサン・パトロールに乗り込む。運転手は、

鼻面の尖った珍獣バンディークートだった。華麗なハンドルさばきで、簡易舗装の道を下ってゆく。

ほどなく、パトロールは小さな門の前に止まった。降りる重光に続いた渚は、そこが王宮の裏門であることに気付いた。

「正面から堂々と入れないの？」

「あちらはいわば公式行事用の門だ。通常はこちらが使われる。別に軽んじられているわけじゃない。気にするな」

渚の小声での問いに、重光も押さえた声で答える。

門番は二人で、両方とも眠そうな眼をしたカピバラだった。重光が来意を告げると、すぐに門の内側から肢の横縞が美しいオカピが現われた。案内役らしい。

「こちらへ」

オカピに導かれ、二人は王宮の奥へと入っていった。重光のあとについて歩みながら、渚は視線をあちこちに飛ばしたが、興味深いものは一切発見できなかった。この手の建築物内部にありがちな美術品や装飾の類がいつさい見られなかったのだ。ただ単に、面白くもなんともない板張りの廊下が延々と続くだけ。……王宮というより、古い兵舎を訪れたかのようなのだ。

やがて、オカピが広い戸口の前で立ち止まった。

「国王陛下。オークリヨアム殿と、そのひ孫嬢をお連れしました」
「うむ」

重々しい返事が聞こえる。国王はいかなる動物だろうか。その渋い声からすると、象とか犀といった雰囲気である。少なくとも、可愛らしい小動物といったオチではなさそうだ。

「お入りください」

オカピに言われ、重光が戸口をまたいだ。渚もちよつと緊張しながら続く。

国王は牛だった。

部屋の中ほどには、二人のために用意されたのだらう、人間用の

椅子がふたつ並べてあった。楽にするがよい、との国王の言葉に従い、重光と渚は並んで腰を下ろした。

見れば見るほど牛だった。水牛とか野牛とかではなく、ごくありふれた家畜用の牛にしか見えなかった。しかも、よく乳製品のCFに出てくるような、白地に黒ぶちの牛である。……声からすると雄牛らしいので、さすがに牛乳は出ないだろうが。くすんだような紫色のカバーがかかった大きなカウチに、足を組んでうずくまっている。

「よくこられた、ひ孫嬢よ」

雄牛……国王陛下が、語りかけてくる。

「それで、オークリヨアム殿。ひ孫嬢は、地位を継ぐことを承諾してくれたのかな？」

「まだ逡巡があるようです、国王陛下」

重光が、丁寧な口調で答える。

「無理もない。つい先日まで、このような世界があることすら知らなかったのだからな」

国王が、言う。口元が、ほころんだように感じたのは目の錯覚だろうか。

「ひ孫嬢殿。詳しくは、オークリヨアム殿から聞いておると思うが、われらキャリエスの住民はもはやRQAFなしでは生きては行けぬのだ。ぜひ、オークリヨアムの地位を継いで、RQAFを指揮していただきたい。そちはわが臣民ではないゆえ、命ずることは出来ぬしたがって、懇請する。頼む」

「はあ……」

渚はくちこもった。牛に頼まれても、というのが本音だった。ここでイエスと言ってしまえば、自分の人生は決まってしまう。RQAFのCOというのも悪い生き方ではないとは思うが……自分の可能性をわずか十七歳で摘んでしまうのはためらわれた。

「申し訳ありませんが、もう少し考えさせてください」

渚はそう述べるに留めた。

「そうか。では、また後日あらためて返答をいただく」

国王が言い、話題を変えて渚に当り障りのない質問を発し始めた。渚はそれに丁寧な答えていった。

……なかなか感じのいい牛ね。

渚はすぐに国王が気に入った。威厳があるにも関わらず、威圧的なところが微塵もない。この牛となら、うまくやっていけそうな気もする。

会話が二十分ほど続いたところで、先ほどのオカピが静かに入室した。それに気付いた国王が、悲しげに首を振る。

「残念だが、仕事に戻らねばならぬようだ。長い時間引き止めてしまい、済まなく思う」

「こちらこそ、楽しい時間を過ごさせていただきました」

重光が、頭を下げる。渚も、それに倣った。

「渚殿。そちとの会話は面白かった。また機会があれば、ぜひ会いたいものだ」

国王が、満足げに尻尾を振る。

「COの意向で、明日の便に乗ってFベースに戻るぞ」

宿舎にやってきたエリックが、そう告げた。

「わかった。支度しておく。……ちょっと待って」

返事代わりに軽くうなずいて去りかけたエリックを、渚は呼び止めた。

「何だ？」

「入ってくれない？ 話があるの」

「……シュザンヌを裏切る気はないぞ」

冗談めかして、エリック。

「相談よ。座って」

渚はエリックを空いている椅子に強引に座らせた。

「ねえ、どうしたらいいと思う？」

「何が？」

「オークリヨアムのことよ。事情は知っているでしょう?」

ユリが丸くなって寝ているベッドの端に座り、渚は問い掛けた。新参者の渚にとって、こちらの世界で相談を持ちかけられるほど親しいと言えるのは、当事者である重光を別とすれば、エリックくらいしかない。

「まあ、大体の事情は承知しているが……ＣＯの後継者になるつもりはないのか?」

「判らない。受けなきゃいけないとは思っただけど……決められないのよ。だから、相談」

「俺に相談されてもなあ……」

エリックが、頭をかいた。

「まあ、ＣＯに案内役を命じられた身からすれば、受けてもらいたいよ。君は年の割にしっかりしているし、聡明だ。経験さえ積みめば、ＣＯは務まる。……今のところ、パイロット連中への受けもいいしな」

「本当?」

「ああ。ＣＯのひ孫だっていうから、どんな娘が来るかみんな内心ではびくびくしてたんだ。昔の映画に出てくるような白塗りお化け面か、ＣＯをそのまま女装させたような不細工か……。君は見事に予想を裏切ってくれたよ」

「お世辞でも嬉しいわ」

鷹揚な笑みで、渚は応じた。

「まあ、まだ時間はあるんだ。じっくり考えてくれ。あちらの世界に戻って、友人にも相談するといい。もちろん、詳しいことは伏せてな」

「友人か……」

渚は腕を組んだ。彼女にとって一番信頼できる友人と言ったら、従姉妹の磯部早紀であろうか。シロクマの実兄である写真家の磯部亮平の一人娘。渚よりも年下で、家が近いこともあり姉妹同然の付き合いである。

……むしろ、早紀の方が適性がありそうね。

渚はそう思った。父親の影響で渚も相当の軍事マニアだが、早紀はそれ以上に詳しい。暇な時はシロクマの書庫にこもって資料を漁っていることも珍しくないし、渚もコラムのネタに詰まると早紀にアドバイスを求めることが何度もあった。彼女なら、RQAFの司令職を大喜びで受けるだろう。

「ま、君の人生だ。君が決めるしかない」

エリックが、うなずきつつ言う。

「あたしの人生ねえ……」

渚はため息をついた。RQAFのCOというのも、悪くない人生だとは思う。航空機は好きだし、おそらく操縦も気に入るだろう。知的哺乳類もいい人（？）ばかりのようだし、国王陛下も気に入った。RQAFのメンバーも、好きになれそうだ。だが、向こうの世界をいわば『捨てられる』だろうか？

重光は一年のほとんど……十ヶ月以上……をフィリピン、すなわちこちらの世界で過ごしたはずだ。彼の場合、すでに戦争に行く前に結婚し、息子をもっている。つまり、しっかりとした基盤を向こうの世界に作ってから、RQAFに参加……というよりも、正確には創設メンバーの一人ではあるが……したのだ。だから、奇妙な二重生活にも耐えられたと同時に、城山の家も守ることが出来たのだろう。……あたしにそんなことができるだろうか？ 一年のうち大半をこちらの世界で過ごし、年に何回か夫と子供の待つ家に顔を出す……。

まず無理だろう。家庭崩壊を招くに決まっている。

……子供。

渚はふと気付いた。オークリヨアムの地位が世襲ならば、渚自身も後継者を得るために、出産する義務が生じるのだ。なんてことだろう。まだ地位を継ぐ前から、後継者問題に頭を悩ませねばならぬとは。

「ねえ、あなたはどうしてパイロットになったの？」

渚はそう問うた。エリックの人生の選択も、ひよつとすると参考になるかもしれない。

「ふん。あまりにありきたりで話すのが恥ずかしいんだが……子供頃にパトリユ・ド・フランスのショーを見たんだ。当時はミステールⅠV-Aを飛ばしてた。それ以来、病み付きさ」

パトリユ・ド・フランスはフランス空軍のいわゆるアクロチーム……複数の航空機を使って曲技飛行などを行うデモンストレーション・チーム……である。その技量は世界のベストファイブに確実に入ると言われるほどの有力老舗チームだ。

「あんまり参考にならないわね」

渚は笑った。世界中には自国空軍のアクロチームにあこがれて空軍に入ったという軍人が溢れている。エリックもその一人に過ぎないのだろう。

「とにかく焦ることはない。もし君がオークリヨアム就任を断ったとしても……おそらく国王陛下がなんらかの妙案をひねり出してくれるさ」

エリックが言う。国王のことを語る口調には、敬意がにじみ出ていた。

「ずいぶんと国王陛下がお気に入りのようなね」

「数えるほどしかお目にかかっていないが、立派な牛だよ。彼に会って初めて、ヒンズー教徒の心が判ったね」

至極まじめな表情で、エリックが言う。

オームラベースを発した定期便のショート・モデル330シエルパは、定刻どおりにFベースへと到着した。渚は宿舎に荷物を置くと、すぐに見知った顔を探しに出かけた。

「おー、帰ってきたか。王都はどうだった？」

食堂にいたホルヘが、小瓶ビールを掲げて歓迎の意を表した。向かい側では、プラサーンが同じくビールジョッキを手に赤い顔をしている。

「昼間から飲んでるの？」

渚は饅えたビールの臭いに顔をしかめた。プラサーンはともかく、ホルへは相当飲んでいようだ。

「アラートを終えたばかりなんだ。あと四十八時間は飛ばなくていい。彼女もへばっちまったしな」

「彼女？」

「俺の愛するミラージュちゃんさ。アター９Ｃがついにいかれちゃった。９Ｋ５０が手に入らないか補給の連中に探させているんだが……無理ならクフィルばりにＪ７９に換装しちまおうという話も出ている」

「それは……大変ね」

渚は紅茶を一杯淹れると、空いている椅子に腰掛けた。

……この二人は当てにならないかな……。

オークリヨアムを受けるか受けないか。この二人に相談するのはやめておこうと、渚は思った。ホルへは好人物だが、まじめな話の相談相手としては役不足だろう。プラサーンもあきらかにいい人ではあるが、有益なアドバイスを引き出せるとは思えない。

とすれば、声を掛ける相手は残る一人。

「ヴァルヴァラは？」

「明日の偵察飛行に勝ったんだ。だから、飲めない」

ホルへが、言う。

「勝った？」

「くじ引きですよ」

プラサーンが、説明した。

「偵察飛行は、ヴォーゲオスのコロニーがうじゃうじゃある地域を飛んでそれなりのリスクはありますが、通常の飛行手当の他に五百ドルボーナスが出るんで、人気がある任務なんです。だから、希望者でくじ引きをする。ばくも参加したんですが、外れました」

「だから、俺とプラサーンが臨時に組んで、アラートに就いていたのさ。お互い、あぶれ者同士でな」

ホルヘが言い、瓶ビールを呷った。

「ヴァルヴァラがどこにいるか知らない？」

「たぶん、外でしょう」

ブラザーンが、答えた。

「さつき、ペットを連れて歩いてたから」

「ありがとう」

渚は立ち上がった。紅茶は二口飲んだだけだった。

いったん宿舎に戻ってユリを連れ出した渚は、見かけた知的哺乳類に片端から声をかけ、ヴァルヴァラの居場所を尋ねた。四匹目に訊いたミーアキャットから、駐車場の近くで見かけたとの情報を得て、足早にそちらへと向かう。

いた。

灰緑色のカバーが掛けられたRh-202の台座にもたれかかるように座っている、赤いカバーオール的人物。金色の髪。

「ヴァーリヤ！」

呼びかけられて、慌てて振り返るその顔は、間違いなくヴァルヴァラだった。渚を認めてぱっと笑顔がはじける。

「お帰り、渚」

立ち上がったヴァルヴァラが、駆け寄る渚の肩にしがみついているユリに気付いた。

「買ったのね。名前は？」

「ユリ。女の子よ。あなたの仔は？」

「スィレブロー！」

ヴァルヴァラが呼ばれる。すぐに、一匹のミヤーシェが駆け寄ってきた。毛色はごく薄いグレイで、尻尾の先だけが黒い。ヴァルヴァラの身体を駆け上り、定位置の肩に座る。

「落ち着いて話したいの。いい？」

「かまわないわよ」

渚は洗いざらいをヴァルヴアラにぶちまけた。

「弱ったねえ」

ヴァルヴアラが、指で頬を掻いた。

「相談を持ちかけてくれたのは嬉しいけど、こういうのって、苦手なのよね」

「ヴァーリヤって、結婚してるの？」

「まさか。独り身よ」

「家庭とか、持ちたい？」

「こういう商売している限り、無理だと思う」

「将来どうするつもりなの？ 永遠にパイロット稼業を続けられるわけじゃないでしょ？」

「ずいぶんと、立ち入ったことを訊くのね」

笑顔で、ヴァルヴアラ。

「ごめんなさい」

渚は素直に謝った。

「まあ、RQAFにいるのは、飛ぶのが好きだからだし、身体がもつ限りは飛びつづけたいわ。そうねえ、だいぶお金も溜まったし、いずれ引退するしかないわね。ロシアに戻って、いい男でも見つけて両親と一緒に暮らすか、それともRQAFで地上勤務を続けるか……悩むところね」

「ご両親には、どう言ってるの？」

渚に問われ、ヴァルヴアラがくすくすと笑った。

「偽装身分のこと？ 日本の企業と契約した会社の社員として、シベリアで貨物ヘリコプターを飛ばしていることになってるわ。両親に作り話をするために、日本語もちょっと勉強したのよ。便乗した日本人の重役に教えてもらったとか言ってるね」

「ふうん」

不意に、ユリとスイレブローが茂みの中から飛び出した。二匹とも、ピンポン球くらいのオレンジ色の塊を前脚と顎で挟むようにして支え持っている。

「お、ご馳走を見つけたね」

ヴァルヴァラが、二匹に声を掛けた。二本足で立ったスイレブローが、ヴァルヴァラに塊を見せつけるように振っている。ユリも、それを真似し始めた。

「判った判った。お食べ」

ヴァルヴァラの言葉を理解したのか、スイレブローが塊を地面に置き、食べ始めた。ユリが、それを物欲しげに眺める。

「ほら、許可を与えてやりなさい」

「え？」

「この仔たちは、大好物の虫の卵を見つけたのよ。だから、飼い主に自慢したいの。食べていいと言ってやらないと、いつまでも自慢してるわよ」

「……鼠を啜えてくる猫みたいなものね。いいわ、ユリ。食べなさい」

即座にユリが塊を落とし、かぶりついた。半透明の黄色い液が、卵からわずかに飛び散る。

「……本当に食事シーンはグロいわね」

仲良く並んで食事する二匹を眺めながら、渚はため息をついた。

「で、さっきの相談だけど」

真顔に戻ったヴァルヴァラが、渚の顔を見つめた。

「わたしとしては、あなたに残って欲しいの。勝手な言い方かも知れないけど、あなたのことが気に入ったから。でもそれは判断材料にしないでね。結局あなたが決めること。自分で考え抜いた決断ならば、もし裏目に出たとしても後悔はしないでしょ？」

「……そうだよね。」

「判った。ありがとう」

「どういたしまして」

ヴァルヴァラが答える。発音はちょっとおかしかったが、紛れもない日本語だった。

ユリの食事シーンを見て、不覚にも空腹を覚えた渚は、軽食でも取ろうと再び食堂を訪れた。

「おう、いいところに来た。プラサーンが帰っちまって、暇してたんだ」

ホルヘが、渚を手招く。……口調からするとかなり酔いが回っているようだ。

「適当なところで切り上げたらどう、少佐殿」

半ば呆れて、渚はそう声を掛けた。

「ブラジル人つてのは、コーヒーを飲みすぎてるからな。ビールで中和させなきゃ長生きできないんだ」

無茶苦茶なことを言いつつ、ホルヘが瓶ビールを一口啣る。

「で、お嬢さん。なんか悩み事があるそうだな」

「早耳ね」

「さつきエリックが、そんなこと言ってた」

……余計なことを。

「せっかくだから、俺からひとつアドバイスをさせてもらう」

「傾聴しましょう」

「唐突だが、^{かつら}鬚メーカーつてのは、ハゲの味方だと思うか？」

「そりゃそうでしょう」

「みんなそう思ってる。世界中の薄毛に悩む者の味方。幸福を呼ぶ被り物。だが、真実はそうじゃない、トリカルド叔父さんは主張していた」

「叔父や叔母が多いのね」

渚の突っ込みを無視し、ホルヘが続ける。

「その逆なんだ。鬚メーカーはハゲの敵だ。奴らがハゲはみつともない、恥ずかしい、女に嫌われると言い立てるから、みな金を払って鬚を購入し、ハゲを隠す。そうじゃない、ハゲはすばらしい、恥じることもない、女……には嫌われるかもしれないが、とにかく隠すべきものではないという真実にすべてのハゲが目覚めたと思うとどうなるか。年齢を重ねてハゲるのは、乳歯が抜けたり陰毛が生え

たり声変わりするのと同じだと気付けばどうなるか。すべてのハゲが幸福になれるだろう。鬘なんぞに金を使う必要もなくなる。そう、鬘メーカーはすべてのハゲの敵なんだ」

「……おもしろい考え方をする人ね、リカルド叔父さんて」

「ああ。いい叔父だった」

「で、この話のどこが、あたしへのアドバイスなの？」

「ハゲだから鬘を買う、ってのは、いわば正攻法の解決だ。だが、リカルド叔父さんみたいに、こんな思想をもって堂々とハゲた頭を他人に見せびらかす解決方法もある、と言うことだ。悩んだら、全く別の方向からアプローチする。それも、いいやり方だぞ」

……見た目より、酔ってないのかも知れない。

「ありがとう。参考に……なったわ」

……別の方向からのアプローチか。

ホルへのテーブルを離れ、野菜サンドイッチとフルーツジュースという軽食を採りながら、渚は彼の指摘をじっくりと考えてみた。オークリヨアムと言う地位があるのは、RQAFがDDと戦っているからである。もし……RQAFがなければ、COも存在せず、渚がオークリヨアムになる必要もない。

……DDがいなくなれば、RQAFも必要ない。

アイデアとしては魅力的である。爆撃すれば、ヴォーゲオスは殲滅できる。だが、国王陛下……あの心優しき牛はBVの殺戮を認めない。DDだけを選択的に全滅させる方法はないものだろうか。おそらくDDとBVは遺伝子レベルで差異がみられるだろうから、そこを見極めて作用する生物兵器があれば……って、そんな技術も金もRQAFにはありはしない。まさに夢物語である。BVの遺伝子をいじって、DDを産ませないようにするとうのも、これまたナンセンスな案だ。BVの生態すら、詳しいことは謎に包まれているのだから。

……やっぱ、無理か。

渚はグレープフルーツジュースのお代わりを注いだ。

「さて」

シャワーを浴びた渚はジャスレイン……ドクター・ゲラの助手を務めるウサギ……から貸してもらった百年前の大陸探検隊の記録を手にも、ベッドに寝転がった。

英文であるので、さすがにすべてを詳しく読むだけの気力はない。渚はすでに数日前から飛ばし読みして、参考になりそうな箇所だけにポスト・イットを貼り付けておいた。今日は、そこを精読するつもりである。

ジャスレインが言ったとおり、ヴォーゲオスに関する記述はごく少なかった。コロニーを発見し、BV……もちろん当時この名称は使われていなかったが……と思われるいくつかの個体を観察した記録が一ページ分ほど。偶然見つけたBVの死体に関する所見……残念ながら解剖しようと言いついた者はいなかった……が少々。それに、おそらくDDのことを見間違えたと思われる『飛行するBV』の目撃談がひとつ。

「うーん」

メモを取りつつ、渚は唸った。飛ばし読みした限りでは、どこにもヴォーゲオスのコロニーが数多く見つかったと言う記録がないのだ。もしヴォーゲオスの繁殖力が、従来知られているように旺盛であるならば、キャリエス島北部と同じように、大陸もコロニーだらけでなければおかしい。しかも、大陸では他の大型の動物が多数観察されている。

なぜ大陸ではヴォーゲオスが大量繁殖せず、キャリエス島では他の大型動物を駆逐するほど大量繁殖してしまったのか？

餌だろうか。探検隊の記録には植物に関するものも多いが、植生についてはキャリエス島と際立った違いは見られない。むしろ、よく似ていると言ってもいい。南部に森林地帯があり、その北側に草原が広がっているところなどそっくりだ。草自体が異なっており、大陸では大量繁殖を阻害……たとえば、栄養障害を引き起こすとか……

…している可能性もありそんな気がする。

あるいは気候だろうか。記録では、大陸の気温はあきらかにキャリエス島よりも低い。雪に関する記述も見られるほどだ。キャリエス島には、降雪の記録はないらしい。聞いた話では、もともとこの惑星自体が地球よりも寒冷らしく、キャリエス島は北半球の低緯度にあるにも関わらず、夏季でも摂氏二十五度を越えることはめつたにないという。おそらくは海流の影響だろうが、冬でも気温が十五度を下回することはほとんどないそうだ。大陸では寒さゆえに、毎年大多数のヴォーゲオスが死に、ごく一部だけが生き延びで新たなコロニーを作るなどと考えれば、大繁殖できない理由となる。

ひよつとすると、天敵だろうか。探検隊の記録には、ヴォーゲオスを捕食できるほどの大きな生物に関する記述はない。しかし、もっと小さな生物が、ヴォーゲオスを蝕む可能性も否定できない。

それとも、ヴォーゲオスの大繁殖地は大陸の奥地にあり、ただ単に沿岸部を探索しただけの探検隊が、多くのコロニーを眼にしなかったということなのだろうか。

「これ以上は無理か……」

渚は紙束を閉じた。調べれば調べるほど、ヴォーゲオスというのは謎の生物である。そして生物である以上、詳しく調べるには飼育が継続しての観察、それが無理ならば解剖でもない限り、その生態を知ることはいらないだろう。

7 国王陛下（後書き）

第七話をお届けします。お待たせいたしました。次話より事態は急展開となります。用語解説 バトル・オブ・ブリテン／1940年後半に行われたドイツ空軍の主としてイングランド南部に対する一連の攻撃とイギリス空軍による防戦 SUU-23/GAU-4 20ミリガトリング機関砲を内蔵したアメリカ製ガンポッド M39/アメリカ製20ミリ リボルバーカノン ショート・モデル 330シエルパ/イギリス製双発ターボプロップ機。三十席クラス アター9C/フランス製ターボジェットエンジン。推力9500ポンドクラス アター9K50/9Cの改良型。推力11000ポンドクラス クフィル/イスラエル製超音速戦闘攻撃機。ミラージュIIIがベースとなっているが、単なるコピー機ではない J79/アメリカ製ターボジェットエンジン。推力12000ポンドクラス Rh-202/ラインメタル社の20ミリ機関砲。対空機関砲の場合は通常連装銃架に搭載されて運用される

8 CSAR

耳障りなブザーが、Fベースに鳴り響いた。

「DDの襲来？」

渚は、読んでいた『週刊文春』を放り出した。

「いや、その音じゃない。トラブル発生を知らせるブザーだ」

向かいのソファで『エビエイション・ウィーク』を読んでいたエリックは落ち着いていた。

「ベース内で事故発生じゃないかな。慌てる必要はない。すぐに、放送がある」

「そう」

渚は安心してソファに座り直した。だが、天井のスピーカーから聞こえた英語に、二人とも文字通り飛び上がった。

『アテンション。単機作戦中のヴァルヴアラ遭難。CSAR発動。関係者は各部署に集合されたし』

渚がエリックと共にブリーフィングルームに駆け込んだ時、中にいたのはXOとサラップ……マイラ・フックスのウィングマン……だけだった。

「エリック、代わりにサンディ・ミッションに出られるか？ 電気系統がおかしいんだ」

XOが、サラップを顎で指す。彼の乗るハンターの電気系統に故障が生じたのだらう。

「行けます。場所は？」

「結構遠い。百二十マイルほどか。このあたりだ」

XOが、地図の一点を指差した。……完全にヴォーゲオスの領域だ。

「ヴァーリヤは無事なんですか？」

勢い込んで、渚は訊いた。

「多分生きている。エンジントラブルで、射出したんだ。パットのチームがB o - 105で飛ぶ。アルエートは整備中で、飛べない。アラートはマイラ・エレメントだったが、点検でサラップの機が引っ掛かった」

X Oが簡潔に答える。

「とにかく、離陸準備します」

エリックが、踝を返す。

「すまん、エリック」

サラップが、褐色の顔をゆがめた。

「ねえ、あたしも行く」

機付長のカンガル―……確か名前はベネンデレント……らと、忙しく離陸前点検を始めたエリックに、渚はそう主張した。

「連れて行きたくない。通常のミッションとは違うから、何が起るかわからない。危険だ」

渚に背を向けたまま、エリックが答える。

「あたしが後席にいると、ミッションの邪魔になるの？」

「そういうわけじゃない。だが、万が一のことを考えると、犠牲は少ないほうがいい」

「そこまで危険な任務なの？」

渚は詰め寄った。振り返ったエリックが、小さくため息をつく。

「ヴァルヴァラを助けたいと言う気持ちは判る。……よし、無線室へ行ってオームラを呼び出せ。C Oの許可が出たら連れていってやる」

「ありがとう！」

渚は全力疾走で無線室を目指した。香港生まれだと以前に聞いたオペレーターの女性をせっつき、オームラA Bの重光を呼び出す。

「……状況は把握している。これもいい経験だろう。許可する。ただし、言うまでもないがエリックの指示には絶対服従だ。いいな」

重光の、重々しい声がヘッドセットの中に響いた。むろん、日本

語である。

「ありがとう、ひい爺ちゃん！」

渚はヘッドセットをむしり取ると、礼の言葉と共にオペレーターに投げ渡した。

「お嬢ちゃんも一緒に飛ぶの？」

渚が参加すると聞いたマイラの口調は、明らかに不満げだった。

「一応、COの許可は取った。見学させるだけだ」

そっけなく、エリック。

マイラが、値踏みするように渚を見つめる。渚も、強い視線で見返した。

ふっと、マイラが微笑んだ。少なくとも、嘲りの意味は込められていない笑みだった。

「いいでしょう。ただし、Gスーツ着用のこと。何が起こるか判らないからね」

「了解、エレメント・リーダー殿」

渚はぴしりと敬礼を決めてやった。

二匹のホッキョクギツネに手伝ってもらってGスーツを着込んだ渚は、よたよたとアラートパッドまで歩いていった。エリックは、すでに前席に着いている。

渚はカンガルーに手を貸してもらい、なんとか後部座席に潜り込んだ。例によってカンガルーが手際よく準備を進めてくれる。酸素ホース、無線のコード。射出座席のピン。ラジオのボリューム。セイフティ・ハンドル。

エリックがエンジンを始動させた。キャノピーも下り、ロックされる。

「エリック。レディ・フォー・タクシー？」

無線に女性の声が入った。マイラだ。

「エリック。移動準備よし」

このミッションでは、マイラがエレメント・リーダーを務める。したがって、コールサインはマイラ・エレメントになるし、コントロールなどの交信もマイラの仕事になる。渚はマイラが離陸許可を得る声に耳を傾けた。あっさりと、許可が降りる。

アルファジェットが動き出した。すぐに滑走路端に着く。左前方に、マイラのA-7Dが見える。翼下内側パイロンにSUU-23らしきガンポッド、外側に小さなSUU-11ガンポッド、中央パイロンにはいくつもの穴が開いた円柱……。

「LAU-3？」

「そうだ。サンディ・ミッションだからな。対地攻撃の必要があるかもしれない」

機内インターフォンで、エリックが答える。

LAU-3はアメリカ製の2.75インチ……70ミリロケット弾十九発を収めたいわゆるロケット弾ポッドである。二十一世紀の戦場にとってはいささか旧式の部類に入る兵器だが、無誘導兵器としては割合命中精度が高く、適度に『低威力』なので、CAS任務には適した対地攻撃兵器である。

「マイラ・エレメント。テイクオフ」

ずんぐりとしたA-7Dが、ブレーキをリリースした。一拍遅れて、アルファジェットも猛然と飛び出す。

兵装満載にも関わらず、A-7Dが軽々と離陸した。ロールスロイス・スเปयरB-168-62をアリソンがライセンス生産したTF-41A-1は、一万四千ポンドを越える推力をひねり出す。それにひきかえ、アルファジェットのラルザック04は、二基搭載しているとはいえ一基当たり三千ポンド程度の出力しかない。……実に倍以上のパワーである。

すでに、救難用B0-105が離陸してから三十分が経過していた。だが、その巡航速度はわずか110ノット程度だ。その四倍以上の速度で巡航するA-7とアルファジェットが、先行するB0-105に追いつくには、十分もあれば充分だった。

「一機なの？」

渚はあたりを見回したが、飛んでいるヘリコプターは一機だけだった。通常、CSARは最低でも二機のヘリコプターと、二機以上の援護機……いわゆるサンディをもって行われる。ヘリが二機なのは、一機が救出作業中に残る一方が火力支援と監視が行えるようにするためである。もちろん、片方が撃墜された場合には無事な機が即座に救助活動に入り、全員の救出に当たる。

「ミゲルのアルエートIIは整備中で飛べないし、RQAFにそんな余裕はないのさ。Bo-105だつて、貨物室に二百リットル追加燃料タンクを取り付けてあるからなんとかなるが、百二十マイルの往復はかなりきついんだ」

やや苦々しげに、エリック。

マイラの声が、Bo-105に対し先行することを告げた。

二機のジェット機は低空を巡航するヘリコプターをさつと追い抜いた。速度が違いすぎるために、編隊を組んで護衛するのは無理である。やや先行する形で定期的にレーストラックパターンの旋回を行って、上空から見守るしかない。

「渚。下を見てみる」

エリックが、言う。

平原に、いくつもの円が描かれていた。……ヴォーゲオスの、コロニーだ。

「こんなところに落ちたなんて……」

渚はつぶやいた。ひたすらに、ヴァルヴァラの無事を祈るしかない。

マイラから通信が入り、ヴァルヴァラが発したと思われる救難ビコンを捉えたことを告げた。渚は集中してマイラの流暢過ぎる航空英語を聞き取るうとした。どうやら、ヘリの護衛をエリックに任せ、自らは先行してヴァルヴァラの搜索を行うようだ。

マイラのA-7がぐんと高度を下げ、北に向かって飛び去った。
「よかった。生きてるのね」

「ああ。ほとんどのサバイバルキットにはラジオが入ってる。その発信を捉えたんだ。近距離なら、音声交信もできる。とりあえず、朗報だな」

「安心したわ」

「気を抜くなよ。CSARはバーで祝杯をあげるまで終わらない、つてのが相場だからな」

「うん」

眼下には、相変わらずヴォーゲオスのコロニーが間歇的に現われ
ては消えていた。緊張して待つうちに、マイラの通信が入った。ヴ
アルヴァラと音声でコンタクトが取れたらしい。エリックには現高
度で警戒を命じ、ヘリには二百フィートで西から進入するように指
示が出る。

アルファジェットが、ゆっくりと大きな円を描き始めた。A-7
が、もつと低空で小さな円を描いている。ヴアルヴァラは、救助に
理想的な場所を選んでいった。航空機が接近するのに邪魔になるよう
な山や丘がない開けた地形。付近にヴォーゲオスのコロニーも見え
ない。緑の絨毯の上に置かれたブロッコリーのような小さな森は、
隠れ場所としては最適だろう。

その森の際から、紫色の煙が立ち昇り始めた。ヴアルヴァラが、
スモークに着火したのだ。セオリー通り、Bo-105が風下から
近付いてゆく。開け放たれた左側のドアからは救難用ホイストが突
き出され、右側ではガナーが銃架に据えられたMAG汎用機関銃を
構え、油断なく目を光らせているのが見える。

渚は眼を凝らした。ローターのダウンウォッシュで、紫色の煙が
吹き散らされる。かすかに、人影が見えたような気がした。

……よかった。本当によかった。

「やばい……」

エリックの、つぶやき。

「エリック。タリー。DDイエロー！」

エリックがわめくと同時に、アルファジェットが急旋回した。

渚の眼も、低空を飛行する薄茶色の粒を捉えていた。DDの群れだ。

「エリック、エンゲージ！」

マイラの声。

渚は成す術もなく、キャノピーの外を見つめていた。高度を落としたアルファジェットは、突如現われたDD群の後ろにつこうと旋回している。Bo-105は、突っ込んでくるDDをやり過ごそうと、機首を下げて懸命に高度を稼いでいる。

マイラのA-7が、Bo-105を守ろうと、発砲した。機首のバルカン砲が、瞬く間に四匹のDDを叩き落す。

「覚悟しろよ！」

エリックが叫ぶ。DDに向かって言ったのか、渚に向かって言ったのか。

アルファジェットの翼下でHMP-400が吠えた。銃弾に貫かれたDDが、つぎつぎと落ちる。Gスーツを着ているせい、今日のエリックの操縦は激しいものだった。操舵に応じて、機体がかくんぐんと揺れる。渚はひたすら耐えた。

アルファジェットが深いバンクを取って急旋回した。再度攻撃するのだらう。渚はGで座席に押し付けられた。ヘルメットが振られ、キャノピーにごちんと当たる。

アルファジェットが、DD群の後方に回り込んだ。サンドブラウンの集団は、まるで何かに導かれているかのように、逃げるヘリコプターを追っている。その数……三十はいるだらうか。

マイラのA-7が、低空からDD群に迫った。ガンポッドが火を吐き、何匹かが落ちてゆく。

DD群を追い抜いたA-7と入れ違うかのように後方から迫ったエリックが、発砲した。一匹を撃ち抜き、素早く別の一匹に狙いを定め、射弾を送り込む。

が。

大きな衝撃を受け、アルファジェットが大きく揺れた。……DD

と衝突したのか。

「やられた。油圧がない。射出しろ！」

エリックが叫ぶ。

「そんな！」

「早く！ 機首が上がらん。姿勢を保てない！」

高速かつ低空での射出は危険である。だが、水平飛行していない状態での射出はもっと危険だ。渚はすぐさま腿の脇の射出ハンドルを引き上げた。どん、という衝撃と共に、後席のキャノピーが吹き飛ぶ。同時に、脚がシートに引き寄せられた。次の瞬間、渚はシートごと機外へと打ち出された。直後にシートが外れ、パラシュートが開く衝撃に見舞われた渚の身体は物理的な力に翻弄された。

見舞われた衝撃の多さと激しさに渚の思考は鈍ってはいたが、いま自分が空中を漂っていることはなんとか理解できた。

…… まずい、着地に備えなきゃ。

思考がそこまでたどり着いた時には、渚は地面に叩きつけられていた。

「ふぎゅっ」

おもわず悲鳴が漏れる。

身体のうちこちらから発せられる痛みの信号を無視し、渚はハーネスを手探りして解除ボタンを探り当てた。パラシュートのついたハーネスをもがくようにして取る。ヘルメットを脱ぐと、ようやく周囲を見回す余裕が出来た。わずかな風にあおられて、白いパラシュートがはためいている。自動で膨らんだオレンジ色のライフラフトが、地面に静かに横たわっている。傍には、サバイバルキットのケースが落ちていた。

…… そうだ、エリックは？

渚は空中にパラシュートでも漂ってないかと眼を凝らしたが、それらしいものは発見できなかった。代わりに視界に飛び込んできたのは、身の毛もよだつような光景だった。

数百メートル向こうの低空で、B o - 1 0 5 がD Dの群に取り囲

まれている。……飛行速度はDDの方が速い。逃げ切れない。

ドアガンが発射され、右舷から迫ったDDがぐくと高度を落とした。左舷後方から体当たりしてきたDDは、ポップアップでなんとか躲す。

マイラのA-7が、突っ込んできた。ガンポッドが吠え、たちまち三匹のDDが撃墜される。だが、ヘリコプターとDDの相対位置が近すぎて、もっとも危険な奴を叩き落せない。DDの数を減らしただけに留まる。

と、一匹のDDが、上からB0-105に迫った。渚は思わず避けると叫んだが、聞こえるはずもない。

メインローターが、DDと接触した。

DDの外殻が、榴弾の弾殻のようにはじけ飛んだ。折れたローターブレードが、手からすっぽ抜けた野球のバットのごとく、あさつての方向へ吹っ飛んでゆく。

ぐらりと傾いたB0-105に、傷付いたDDがしがみついた。揚力と推力をいっぺんに失ったヘリコプターは、石のように落下した。渚はおもわず眼をそむけた。

とりあえず、今は自分の身を何とかすることが肝心だ。

渚は自分の身体を探り始めた。痛みを感じるところを、指で強く押してみる。……骨は折れていないようだ。首の痛みも、軽い。どうやら、多少の打撲だけで済んだようだ。

「これで晴れてマーチン・ベイカー・タイ・クラブの一員ね」

渚はため息をつきながら、邪魔なGスーツを脱ぎ捨てた。手袋も外す。中は、冷たい汗でぐっしりと濡れていた。

手袋をフライトスーツのポケットにねじ込んだ渚は、サバイバルキットのケースの脇に膝を付いた。あまり期待しないで防水ケースをこじ開けた渚だったが、中身は彼女が想像していたよりも充実していた。航空機乗員のサバイバル用品としては定番のシグナル・ミラーにストロボ・ライト。スモーク兼用のシグナル・フレアー。医療キットのケースとサバイバル・ブランケットのパック。おなじみ

のスイス・アーミーナイフとマグネシウム・ファイア・スターター。ボトル入りの水と、浄水錠剤の小瓶。小さなスポンジ。布にプリントされたチャート。レーションは、ノルウェーのコンパクトASの製品が入れてある。そして、もつとも重要なサバイバル・ラジオ。これは、古臭いPRC-90だった。新型のPRC-112が普及するまで、アメリカ海空軍の航空機搭乗員用の標準救難用装備だった品である。大きさはVHSのビデオテープをややスリムにしたくらいで、折り曲げたラバーアンテナと、イヤホンがついている。

一番奥には、拳銃が入っていた。てつきり古ぼけたブローニング・ハイパワーあたりが入っていると思っていた渚は、小さく感嘆の声をあげた。出てきたのは、同じFNでもずっと新しい製品、ファイブ・セブンだった。5.7×28という突撃銃用の弾薬を小型化したようなユニークな弾を使う銃だ。……DDの外殻を貫通するには、通常の9ミリルガーくらいでは無理ということか。スペアの弾倉は一本だけだった。

サバイバルキットから拳銃とPRC-90を取り出した渚は、ケースのストラップを伸ばし、肩に担げるようにした。とりあえずPRC-90のOFFスイッチ兼用のセレクターを回してBCNに合わせ、ビーコンを作動させておく。予備の弾倉は、胸ポケットに突っ込んだ。フライトヘルメットは迷った拳句、置いておくことにする。

拳銃を手にする。渚は日本人女性としては手の大きい方だが、約四センチという大口徑リボルバー用弾薬並みの長さを持つ5.7×28弾薬を収めたグリップは、手に余った。

何度も拳銃を握り直しながら、渚はBo-105が落ちたと思しき方角へ向け歩みだした。運がよければ、助かった乗員がいるかもしれない。気落ちしている場合ではない。エリックも探さねばならない。そしてもちろん、ヴァルヴァラも。

不意に背後に気配を感じ、渚は慌てて振り向いた。駆けて来る人影があった。

金色の髪。……ヴァルヴァラだ。

「ヴァーリヤ！」

渚は、急いで拳銃をポケットにしまった。思わず、満面に笑みを浮かべてしまう。エリックはいまだ生死不明だし、おそらくB O - 105の乗員にも死傷者が出ているはず。おまけに、ヴォーゲオスの領域に放り出された身である。にもかかわらず、ヴァーリヤの無事な姿は渚の気分を浮き立たせた。

「渚！」

手を振りながら駆け寄ってきたヴァルヴァラが、いきなり渚の胸倉をつかんだ。

「え？」

戸惑う渚の顔面に、叩きつけるようなロシア語の怒声。

……そうだ、グエがないんだ。

射出した時に、飛んでいってしまったに違いない。ヴァルヴァラの肩にも、載っていない。これでは、お互い言葉が判るわけではない。渚はうるたえつつも頭を働かせた。ヴァルヴァラの怒りは、言うまでもなく渚に好意を持っていてくれるからこそその怒りであろう。CSARに付いてきたという危険な行為に対し、それを咎めるものだ。だから、『あなたを助けにきた』とか言っても、その怒りを静めることはできない。

……とにかく、ヴァルヴァラを落ち着かせるしかない。

「待った」

渚はシロクマ仕込みの英語……彼の留学先の影響でミッドランド訛りの発音が難点だが……で、努めてクールな口調で言った。

「B O - 105がDDに撃墜された。パットのクルー。生存者の可能性。エリックは行方不明。急いで探す必要がある」

「そ、そうね……」

ヴァルヴァラが、胸倉を離れた。渚はクールな表情を保っていたが、内心では安堵の息をついていた。なまじ美人だけに、怒った時のヴァルヴァラの迫力は並大抵のものではない。

「まず、マイラと連絡を取りましょう」

冷静さを取り戻したヴァルヴァラが、自分のPRC-90を手にした。音声通信モードに切り替え、マイラをコールする。

すぐに、応答があった。早口の英語でのやり取り。きーんという音と共に、A-7が低空で通り過ぎる。

「マイラがBO-105の墜落を確認。コールに反応なし。場所は南西へ千五百ヤード……千四百メートル」

PRC-90を耳に当てたヴァルヴァラが、渚が聞き取り易いようにゆっくりと喋る。

「エリックは？」

「コールに反応なし。ただし、射出は確認」

「よかった……」

渚は日本語でつぶやいた。

「マイラはジョーカー（燃料不足状態）まで上空待機してくれる。行きましょう」

PRC-90のスイッチを切ったヴァルヴァラが、渚の肩をぽんと叩いた。

DD群の姿はどこにも見えなかった。渚とヴァルヴァラは、BO-105が落ちたらしい場所を足早に目指した。周囲は、膝丈くらいの雑草のあいだにニメートルを越すほどの萱のような植物の茂みが散在しており、遠方の見通しがきかない。

ふと気付いた渚は、自分のPRC-90のセレクターをOFFにした。マイラに位置が伝わった以上、電波を出し続ける意味がない。たしか電池は十数時間しか持たなかったはずである。節約しておくに越したことはない。

「あそこ」

ヴァルヴァラが指差す。

残骸の上に、ティルブームが突き出ていた。戦跡か何かのモニュメントの醜悪なレプリカのような。近付くと、ケロシンの臭いが鼻

を突いた。

つい先ほどまで空を舞っていた機械にはとても思えぬほど、B O - 105は大破していた。機首部は完全に潰れている。サイドドアの透明部分に付着しているのは、どう見ても血液だ。渚はおもわず顔をそむけた。

「待っていて」

ヴァルヴァラが言い置いて、残骸に近づく。しばらく調べて戻ってきたヴァルヴァラの表情は曇っていたが、手にはグエが三つ載っていた。渚は安堵しながらそのひとつを受け取り、肩に載せた。

「だめよ。パットもアルノーもチャスも即死」

同じくグエを肩に載せたヴァルヴァラが言う。……とすると、グエはよほど衝撃に強い生き物らしい。このぶにぶにした身体が、かえって衝撃吸収に役立つのだろうか。

ヴァルヴァラが、P R C - 90で状況をマイラに伝えた。しばらく話したヴァルヴァラが、諦めたような表情でP R C - 90のスイッチを切る。

「Fベースのアルエートエーエーはまだ飛べないそうよ。いま、オームラからS - 58を呼び寄せているけど……あれじゃあ航続距離が足りないわ。アルエートの修理が終わるのを待つしかないわね」

シコルスキーS - 58は、自衛隊を始め西側各国で使用された名機だが、いかんせん博物館レベルの旧式機である。とても往復二百四十マイルは飛べない。

「それって、非常にまずいってことよね」

「しばらく隠れている必要があるわね。来て。役に立つものを漁りましょう」

渚は死体がある方を努めて見ないようにしながら、ヴァルヴァラを手伝ってヘリの残骸を漁った。かなり古びた折りたたみストックタイプのF A L自動小銃、新品らしいシュタイアT M Pサブマシンガン、双方の予備弾薬若干、航空救難用サバイバルキットがふたつ、大型のマグライト一本と予備の電池、赤く塗られた小ぶりの手斧と

いったところが、収穫だった。

「こんなものね。さあ、エリックを探しましょう」

二人は装備を分けて持った。渚はFALを受け取った。中学三年の時に、シロクマに連れられて中国ツアーに参加し、人民解放軍制式の八五式サブマシンガン撃たせてもらったことがあるが、その時まったく的に当たらなかったことを思い出したのだ。五六式歩槍なら結構当たったので、おそらくFALを持った方が役に立つだろう。

「無駄かもしれないけれど、呼びかけてみましょう」

ヴァルヴァラが、自分のPRC-90を手にした。セレクターを音声通信に合わせ、エリックをコールする。

反応はなかった。

「降下予想位置は？」

ヴァルヴァラに問われ、渚は懸命に頭を絞った。自分の降下位置、ヘリの墜落位置。それに、射出寸前に見たDDの位置。それらを勘案して、アルファジェットの飛行方向を割り出す。射出を目指す以上、エリックが進路を変更したとは考えにくいから……。

「こつち」

渚は指差した。この先のどこかに、エリックがいるはずだ。……たぶん。

8 CSAR（後書き）

第八話をお届けします。お約束どおりの急展開であります。では用語解説 CSAR/Combat search and rescue 戦闘搜索救難。敵地で撃墜された航空機搭乗員を救出するための作戦行動 サンディ・ミッション/Sandy mission CSARの際に援護する機をサンディと呼称し、その援護任務自体をサンディ・ミッションと呼ぶ SUU-11/M134 ミニガン（ガトリング方式の7.62ミリ機関銃）を収めたガンポッド マーチン・ベイカー・タイ・クラブ/マーチン・ベイカーはイギリスの射出座席メーカーで、その製品は西ヨーロッパ製の軍用機に広く採用されている。射出して生還した航空機搭乗員がMB社に連絡すると、Ejection tie clubの一員としてネクタイを含む記念品が贈られる FAL/ベルギー製のベストセラー自動小銃。口径7.62ミリ。箱弾倉二十発。もはや旧式であるが途上国では現役である TMP/オーストリア製のコンパクトな短機関銃。口径9ミリ。箱弾倉十五発ないし三十発。現在はスイスのB&Tが製造

9 E & E

アルファジェットは、死んだ魚のように腹を見せていた。

墜落した時に発火したらしく、機体は無残に焼け焦げていた。アルミ合金はあちこちが溶け落ち、焼死体の肋骨を連想させる黒く煤けたフレームがむき出しになっている。機首部は完全に潰れていた。地面には機体がこすれたような跡はない。背面となり、低空から急降下して突っ込んだのだろう。墜落のショックで中途半端に飛び出た主脚が、さながら死んで縮こまった昆虫の脚のように、宙を指している。

「ひどいものね」

ヴァルヴァラが、言う。

「おそらく、ことあなたが降りた地点を結ぶ線上にいるはずだね。引き返しましょう」

「そうね」

ふたりは左右に眼を配りながら、歩み始めた。三分ほど歩いたところで、いきなり遠くで銃声が響いた。

「エリックだ！」

異口同音に叫ぶ。マイラが対地射撃した音ではない。明らかに、軽火器の発砲音だった。

走り出したヴァルヴァラのあとを、渚は懸命に追いかけた。その間にも、数回銃声が響く。眼前の低い土手のようなところを駆け上がると、視界が開けた。

エリックの姿が、眼に入る。

一匹のDDが、エリックに襲い掛かっていた。四本の肢で立ち、前肢を振り上げている。さながら、怒った時のクワガタムシのようだ。

地面に尻餅をついたエリックが、両手撃ちで拳銃を続けざまに放つ。だが、DDは動じない。

「撃つて、渚！」

叫びながら、ヴァルヴァラが駆け出した。肩のサバイバルキットを振り落とし、猛然とダッシュする。

渚は慌ててFALのセイフティを外した。DDとの距離は二百メートルというところか。いささか遠い。

マイラのA-7が、ごうつという音を残して上空を通過した。さしもの彼女でも、これだけエリックとDDが近接しては、発砲することは不可能だ。

渚は伏射の姿勢をとった。ストックをロックし、セレクターをRに合わせ、教本どおり床尾を肩の筋肉に押し付け、狙いをつける。弾を撃ち尽くしたエリックが、グリップから空の弾倉を落とし、新たな弾倉をはめ込もうとしている。

渚は立て続けに発砲した。かなりの反動が、身体を揺らす。身長百六十七センチと日本人女性としては結構体格のいい渚でも、7.62×51の連射はきつかった。

すぐに一弾倉を撃ち尽くす。玄人っぽく数えながら撃ったが、十発しか装填していなかったようだ。標的が大きいために、全弾が命中していた。DDが、こちらをより差し迫った脅威と捉えたのか、その向きを変える。

渚は素早く弾倉を入れ替えた。さすがにこれは教本どおり、眼を標的に据えたままとはいかない。視線を落とし、苦労してやっとはめ込む。ボルトを引き、構える。

発砲。サブマシンガンの射程に達したヴァルヴァラも、撃ち始めた。新たな弾倉をグリップに押し込んだエリックも、連射する。

最初に弾倉を撃ち尽くしたのは、やはりフルオートでTMPを撃ったヴァルヴァラだった。次いで、エリックの拳銃が沈黙する。

渚の放った最終弾……こちらの弾倉も十発しか入っていないかった……が、DDの外殻を貫く。銃声が消え、辺りが急に静まり返る。DDのサンドブラウンの巨体が、震えた。振り上げられていた前肢が、左右同時に力を失い、鈍い音を立てて垂れる。残る肢からも、

不意に力が抜けた。さながら油圧で動いていた機械が、急に圧力を抜かれたような感じで、DDが崩れ折れる。埃が巻き起こり、腹ばいになっている渚の身体にかすかに振動が伝わった。

「俺が撃ち落したやつだ」

ヴァルヴァラに余ったグエを載せてもらったエリックが、苦々しげに言った。

「まだ生きてやがった。ありがとう。お陰で命拾いしたよ」

「足をやられたのね。見せて」

ヴァルヴァラが、エリックの左足からブーツを脱がせた。……足首が腫れている。

「着地の時にひねったんだ。完全に解傘しないうちに降りちまったんだ。折れてはいないと思うが……」

ヴァルヴァラの指が、エリックの足首を探る。

「骨は大丈夫ね。打撲だけ」

ヴァルヴァラが治療を始めた。さすがに大学で医学を学んだだけに、手際はよかった。医療キットのバトル・ドレッシングをあてがい、添え木代わりにTMPの空弾倉を添え、包帯とテープで固定する。

「状況は？」

痛みに顔をしかめながら、エリックが訊く。ヴァルヴァラが、マイラとの交信内容を説明した。エリックが、舌打ちする。

「簡単には直らないぞ、アルエートは。よくて二十四時間、悪くすると丸二日はかかる」

「無理して歩くべきじゃないわね。どこか水の得られる場所に隠れていましょう。渚、マイラに報告を」

「了解」

渚はPRC-90のセレクターを音声交信にした。ゆっくりとした英語で、エリック救出と負傷の程度を告げる。

「了解。そちらの南東千ヤードに小川が見える。付近にコロニーな

し」

渚に気を遣ったのか、平板な発音でマイラが応えてくれる。

「ジョーカーまであと二十分」

「無理しないで。こちらは当面の安全を確保」

渚はそう言った。ジョーカーとは、燃料の不足を意味する隠語である。いわゆるビンゴの一手手前の状態だ。

「まだ大丈夫。絶対助けるから、待っていて」

雑音混じりの英語が、頼もしく聞こえる。

「貸して、渚」

ヴァルヴァラが、渚からPRC-90を受け取った。

「マイラ。とりあえず引き上げて。……ありがとう。頼りにしてるよ。アウト」

スイッチを切ったヴァルヴァラが、PRC-90を渚に返してよこした。

「マイラって、結構いい人なのね」

渚はそう言った。無愛想だが、いざと言う時は頼りになるタイプなのだろう。

「エレメント・リーダーとして、責任を感じてるんだろ」

エリックが言う。

「とにかく、移動しましょう。南東千ヤードね」

上部をナイフで切り裂いたブーツを、ヴァルヴァラがエリックに履かせる。自らそれをテープで固定したエリックが、ヴァルヴァラの肩を借りてゆっくりと歩み出した。

渚は荷物の大半を引き受けた。FALを手に、周囲に眼を配りながら二人を先導する。

三人は隠れるのにちょうどいい茂みを小川の岸边に見つけた。一本のボトルの水を回し飲みして、ひと息つく。

燃料が乏しくなったマイラが、名残惜しげに低空をひと巡回してから、Fベースへの帰途についた。

渚は空になったボトルに小川の水を詰めた。浄水錠剤を念のために二錠入れ、シェイクする。

「ヴォーゲオスに見つからないように、祈るしかないね」

弾薬の残数を調べながら、ヴァルヴァラが言う。

エリックを助けるために、渚とヴァルヴァラはかなりの弾薬を消費していた。FALは弾倉一個を残すのみ。TMPは弾倉三個……

九十発の弾丸がある。ファイブ・セブンは三丁あり、弾倉数は四個……八十発。

「案ずることはない。アルエートが来てくれれば、間違いなく帰れるさ」

エリックが、自信ありげにいった。

「さつきはたまたまDDの小規模襲来と遭遇しただけだ。つまり、あと三日くらいはDDどもと出くわす可能性はない」

「焦らず待つしかないのね」

渚は身体力を抜いた。神経を張り詰めていては、緊張で参ってしまう。

じつと動かず待つうちに、あたりが暗くなってきた。風もやや強くなる。

「たぶん夜はヴォーゲオスの活動はないと思うけど……念のために交代で起きていきましょう」

ヴァルヴァラが、提案する。

「腹が減ったな」

エリックが言う。

三人はコンパクトASのレーションパック、BP-5を開けた。

どう見ても食欲をそそらない白っぽいブロックを齧り、水で流し込む。わずかに塩味が感じられるだけの、いかにも非常食といった代物だ。はつきり言って、不味い。渚は去年食べた航空自衛隊の救命糧食を思い出した。シロクマが、某基地の知人から賞味期限切れの物をこっそりと分けてもらったのを、味見してみたのだ。脂臭いできそこないのバタークッキーみたいで旨くはなかったが、これに比

べればはるかにマシな味であつた。

「四時間交代だ。最初は俺。次が渚。最後がヴァーリヤ。いいな」
エリックが言う。

「結構」

ヴァルヴァラが、マグライトとTMPをエリックに渡した。

渚は、ヴァルヴァラの隣に横たわった。サバイバル・ブランケットにくるまり、手の届くところにFALを置く。疲れていたのか、すぐに眠りは訪れた。気がついたときには、エリックに揺さぶられていた。

渚はTMPとマグライトを受け取ると、見張りについた。月が三つ出ていたが、いずれも地球の月よりはずっと暗かった。渚は岸辺の岩に背中を預け、眠気を振り払おうとしきりに水を口に含んだ。なんとか四時間目を覚ましつづけ、ヴァルヴァラと交代する。

翌早朝飛来したのは、プラサンのF-5Eだった。もたらされた報せは、悲観的なものであつた。『アルエートIIIIの修復絶望的』

「いま、Fベースの北に燃料集積所を設けています。そこで給油すれば、S-58でも救出を行えるでしょう。ただし、コンボイが丘陵地帯を越えなければならぬので、時間はかかります。それと平行之で、シエルパで回収できないか検討中です」

PRC-90から、プラサンの声。……アジア人特有の平板な発音の英語なので、渚には聞き取りやすかった。

「無理はするなとXOに言ってくれ。シエルパが脚でも折った日には、救出人数を増やすだけだからな」

エリックが、答える。

「できる限り南へ進んでください。午後にはジェットストリームを飛ばして空中補給をする予定です」

「ありがたい。美味しいランチを入れておいてくれ」

そう返してから、エリックが肩をすくめた。

「どうやら、処置なしのようだ」

三人は小川で水を補給すると、ゆっくりと南下した。エリックの足首の腫れはやや引いたが、まだまともに歩ける状態ではない。

昼前に、一同はランチを採った。味気ない食事を済ませ、チャートを検討する。

「どこで印刷したのかしら」

渚は布にプリントされたチャートを見て疑問を呈した。英語表記だが、細かいところまできれいに印刷してある。こんなもの、外部の専門業者でなければ作れないだろう。どうやって、機密を守ったのだろうか。

「ああ、ロンドン・オフィスがアメリカで発注したそうだ」

答えたのは、エリックだった。

「イギリスで人気のあるファンタジー小説の舞台の地図だと偽ったらしい。読者プレゼントに使うと称して、千枚ほどまとめて印刷させたそうだ。うまく考えたもんだよ」

「なるほど」

渚はくすくすと笑った。たしかに、怪しまれぬうまいやり方だ。

「さて、出かけましょうか」

ヴァルヴァラが、腰をあげた。渚もFALを肩にかけようとして……凍りついた。

「ぐおん、という異音が三人の耳に届き始めていた。」

「くそつ、DDか？」

エリックが、ファイブ・セブンを抜き、スライドを引いた。渚はFALを手に、あたりを見回した。

音が大きくなる。

「あそこ！」

ヴァルヴァラが指差す。

肢がつきそうなほど低い位置を、砂埃をあげつつDDが飛行していた。距離は二百メートル程度。こちらへ向けまっすぐ突っ込んでくる。

渚は大慌てでFALを構えた。伏せている暇はなかった。立射す

るしかない。

一足先にヴァルヴァラがTMPを放った。渚も撃った。距離はもう五十メートルもない。四発撃つのがやっとだった。渚はDDが眼前に迫ったところで前方に身を投げた。エリックは拳銃を撃ちながら身を伏せ、ヴァルヴァラも渚同様身を投げ出す。DDはそのまま三人の上を通過した。

膝立ちのヴァルヴァラが、荒い息をつきながら弾倉を代える。Dはいったん百メートルほど離れた場所に着地するとくるりと向きを変え、再び飛び上がった。加速しつつ、先程とは逆の方向から三人に迫って来る。渚は伏せたままFALを向けた。

発射。

渚の放った弾はDDの頭部に次々と突き刺さった。ヴァルヴァラも撃ち、三十発すべてが命中する。エリックの拳銃弾も全弾がDDを捉えた。だが、効いた様子はない。

DDは今回は通過せず、どしんと音を立てて至近に着地した。もうもうと埃が立ち込める。渚は撃ち尽くしたFALを放り出すと、ファイブ・セブンを抜いた。

DDが狙ったのは、エリックだった。三人のうち一番火力の弱かったエリックを狙ったのか、それとも負傷していることを悟って、本能的に狙ったのか。

「おわっ」

DDが、前肢を振る。エリックは避けようとしたが、傷めた足首のせいでその動きは鈍かった。ラグビー選手の太腿ほどもある前肢が、エリックの下半身をかすめる。それだけでも、威力は絶大だった。エリックの身体が軽々と宙に跳ね飛ばされる。

「エリック！」

渚は地面に叩きつけられたエリックに駆け寄った。彼を庇うように、DDの前肢の届かない位置から、両手撃ちで拳銃を連射する。全弾を撃ち尽しても、なおDDに効いた様子は見られなかった。昨日のDDはアルファジェットに12・7ミリを連射されていたか

らこそ、渚らの銃撃だけで止めを刺す事が出来たのだ。軽火器だけでDDを仕留めるのは、やはり不可能なのだろうか。

「逃げて、渚！」

ヴァルヴァラが、後ろからTMPを撃つ。9ミリ弾が、DDの頭部を次々と襲う。

渚は最後の弾倉を拳銃に差し込んだ。ここで渚が逃げれば、DDは倒れているエリックに襲い掛かるだろう。そうなれば、エリックの命はない。だめだ。少なくとも、弾薬がある限り退くわけには行かなかった。

ヴァルヴァラのTMPが沈黙した。DDが、渚の方を向いた。明らかに、DDは渚の存在を屠るべき敵として知覚していた。その前肢が、脅すかのように左右に振られている。渚は全速力で逃げ出せと命ずる生存本能を気力でねじ伏せると、ファイブ・セブンの銃口をDDに向けた。

DDが一步踏み出した。渚は矢継ぎ早に長いストロークの引き金を引いた。

頭部に銃弾が集中する。だが、DDの巨体の勢いを止めることはできない。一步ずつ確実に、DDは渚に迫ってきた。

ヴァルヴァラのTMPが再び吠える。最後の弾倉だ。

渚の手の中で、ファイブ・セブンが最後の銃弾を吐き出した。

ヴァルヴァラのTMPも沈黙した。全弾を、撃ち尽くしたのだ。

DDと渚の間には、空しくなかった。わずか三メートル分の空気が。

DDが、鈍い動きで前肢を振り上げた。多少は傷付いているようだ。渚は吹き出るいやな汗を意識の隅で知覚しつつ、身構えた。こうなったら、エリックの運命は天に任せるしかない。DDがこちらを追いかければ、エリックは助かるだろう。……空を飛べる化け物相手に、どれだけ逃げられるか判らないが。

DDの前肢が、高い位置で止まった。複眼は、確実に渚の姿を捉えていることだろう。ここから先は、反射神経の勝負だ。渚はPK

を止めようとするキーパーのごとく、つま先に体重をかけて前かがみになった。前肢が振り下ろされた瞬間に、左へと跳んでこれを躲し、脱兎のごとく逃げ出せば、あるいは……。

「渚！」

ヴァルヴァラの叫び声。

次の瞬間、渚の眼前で凄まじい激突が起こった。

DDとDDの衝突。

渚は逃げることも忘れて、その光景を見つめた。突如横合いから飛び出してきたDDが、渚を屠ろうとしたDDに体当たりを喰らわしたのだ。

……いや、違う。

新手のヴォーゲオスは、DDではなかった。やや色が薄く、小さい。DDではなくBVだ。

乱入したBVは、明らかにDDと争っていた。前肢をDDの頭部に激しく叩きつけ、攻撃している。DDの方が身体は大きい、銃撃で弱っているのだろう、その抵抗は不活発だった。時折外殻の間から、黄色い体液がほとばしり出る。

なぜ、BVがDDと戦うのだろうか？

「渚！」

ヴァルヴァラが、啞然としてヴォーゲオス同士の戦いを眺めている渚の腕を引っ張った。右手には、ファイブ・セブンが握られている。

「今のうちにエリックを！」

……そうだ、すっかり忘れていた。

二人は地面をのた打ち回っているエリックに駆け寄った。アイアイとつめきながら、股間を押さえている。渚は落ちているグエを拾って肩に載せてやった。

「くそっ、もう少しでデプレオーになるとこだったぜ」

股間を押さえ、荒い息をつきながら、エリック。

「大丈夫。骨は折れてないわ」

素早く身体を探ったヴァルヴァラが、そう診断を下す。

「骨よりも大事なものが折れちまった気がする……しかし……どうなってるんだ、ありゃ」

なおも股間を押さえつつ、エリックが訊いた。

ヴォーゲオス同士の戦いは、終局に近付いていた。勝負は明らかにBVの勝ちであった。すっかり動きの鈍くなったDDは、体液まみれで横たわっている。BVが、その上に馬乗りになり、容赦なく攻め立てる。渚は、某アニメのエアが使　を喰らうシーンを思い出した。

「異なるコロニーの個体による闘争じゃないかしら。いわば、縄張り争い」

ヴァルヴァラが、推定する。

「いずれにしても、あの威勢のいいBVが俺たちを襲ったら、勝ち目はないぞ」

エリックが言って、痛む足首を庇って立ち上がった。

「そうね」

ヴァルヴァラが、握った拳銃に視線を落とす。もはや、残っている弾薬は装填してある弾倉の二十発のみ。

「あのBVが、あたしたちを助けてくれたという可能性はないかしら」

渚はそう言ってみた。

「まさか」

異口同音に、ヴァルヴァラとエリック。

「ヴォーゲオス同士の闘争が縄張り争いのように頻繁ならば、偵察の際に写真に撮られたり目撃されたりしてたんじゃない？」

「一理あるけど、それに命を賭ける気にはならないわね」

エリックに肩を貸しながら、ヴァルヴァラ。

同意した渚は、落とした装備を拾い集めると、逃げる二人のあとを追った。

だが……。

「追ってくる！」

渚は叫んで立ち止まった。エリックとヴァルヴァラも、足を止める。

先程のBVが、六本の肢をせかせかと動かして、逃げる三人に急速に迫りつつあった。むろん、人間の駆け足よりも速い。逃げ切れる見込みはなかった。

「銃を貸せ、ヴァーリヤ」

エリックが、静かに言った。

「俺が、多少なりとも時間を稼ぐ。二人で別々の方向へ逃げる。運がよければ、助かるだろう」

「だめよ。渚、エリックを連れて逃げて。助けに来てくれたあなた方を見捨てるわけには行かないものね」

ファイブ・セブンを構えながら、ヴァルヴァラがきっぱりと言う。

渚は迷った。走って逃げ切る自信はない。それに、この二人を置いて逃げることもできない。

「早く行って、渚！」

ヴァルヴァラが怒鳴る。しかし、渚は動けなかった。エリックも、動かない。

BVは、三人の手前十メートルほどで止まった。ヴァルヴァラが、拳銃の狙いをつける。

両者は、三分ほどそこでにらみ合った。BVがこちらを知覚していることは、まず間違いない。意図して追いかけてきたことは、明白だった。だが、仕掛けてこないし、身体を起こして前肢を振り上げるといった攻撃態勢も取っていないかった。頭部を低い位置に保ったまま、じっとこちらの様子を窺っている。

「何を待ってるんだ、あいつは」

エリックが、苛立たしげな声をあげる。

「仲間を待ってるのかも」

拳銃を握り直しながら、ヴァルヴァラ。

「くそう、何考えてやがんだ、あの化け物は！」

エリックが、怒鳴る。

…… B V の考え。

まてよ。

「ねえ、ヴァーリヤ。ヴォーゲオスって、言語を持ってると思う？」
「犬並みの知能なら、原始的な言語システムを持っけていてもおかしくないわね」

「じゃあ……」

渚は、エリックの肩に手を伸ばし、グエを取り上げた。牽制球の上手なピッチャーがマウンドにいる時の一塁ランナーのように、いつでも逃げ帰れるように用心しながら、じりじりと B V に近づく。エリックが後ろでコナールとかサングレとか喚いているのは、無視した。

五メートルまで近付いても、B V はほとんど動きを見せなかった。これが限界だろう。渚は、グエをぽいと放り投げた。狙いどおり、グエは B V の頭部にちょこんと着地した。

「ええと、あたしの言葉が判るかな？」

…… 沈黙。

「やっぱり無理か」

渚は肩を落とした。万能翻訳機たるグエといえども、言語システムを持たぬものには無力なのだ。

「渚！」

エリックとヴァルヴァラが同時に叫ぶ。渚は反射的に飛び退いた。B V が、動きを見せていた。ゆつくりと、上体を起こす。

ヴァルヴァラが、いったん外していた拳銃の狙いを付け直す。

不意に、B V がひと啼きした。黒板を爪で引っかいたような不快な音だったが、渚にははつきりと意味が伝わった。

『困っているのか？』

9 E & E (後書き)

第九話をお届けします。おかげさまで本作のPVおよびユニークア
クセスが、まだ中盤であるにもかかわらず前作「蝶の記憶」を上回
りました。……ていうかバタメモんどんだけ人気ないんだよ……。と
いうことで読者の皆様、本作を御愛顧いただきましてありがとうございます
ざいます。もし本作以外の高階作品を読んだことがない、という方
がいらっしやいましたら、他の長編にも眼を通していただければあ
りがたいです。以上宣伝でした。では用語解説を。 E & E / Es
cape and Evasion 脱出および回避。敵地や競合
地域において敵を回避しつつ脱出する行動 7・62x51/いわ
ゆる7・62ミリNATO弾。51はケース(薬莢)の長さを表す
デプレオー/ニコラ・ボアロー「デプレオー Nicolas
Boileau - Despréaux; eacuteaux (1
636-1711) フランスの詩人。幼少のみぎりに鶏に股間をつ
つかれ、不能になったという逸話がある

10 コンタクト

「言語システムとしては、非常に未熟なのよ。むしろ、感情を音で表現するのに近いと思う」

ヴァルヴアラが、分析する。

BVとの会話は、意思の疎通と言うよりもむしろパズルのようであった。こちらから、『なぜ助けてくれたのだ』と訊ねても、BVは理解できなかったのだ。抽象的な『あれ』とか『そこ』などに相当する単語も無いようだし、時間に関する単語……たとえば、『さきほど』とか『このあと』といった単語も無いらしい。

ぶつ切りの単語を並べて何とか聞き出したところでは、先程のDは『はぐれ者』とでも名付けるべき南へと飛行するタイミングを逸した不良DDだったらしい。BVにも迷惑をかける連中であり、彼にとつても敵とみなすべき存在だったようだ。彼が人間を見たのは初めて。だから、敵とは思っていない。困っているのならば、助力する用意はある。

「信じられん……」

ヴァルヴアラから英語で説明を受けたエリックが、首を振る。

「……ヴォーゲオスの生態を知る千載一遇のチャンスだわ」

渚はそう主張した。

「同意するけど……危険だわ」

ヴァルヴアラが、薄い唇をなめる。

BVが、啼いた。

『帰る。来い』

向きを変え、六本の脚でゆっくりと歩き出す。

「あ、待って」

渚は急いで声を掛けた。もっと色々訊きたいことがある。

BVが再びこちらを向いた。啼く。

『手伝う』

どすどすと、B Vが歩み寄った。渚は本能的に身を引いた。サンドブラウンの巨体が、目の前を通過する。青臭い臭いが、鼻を突いた。

エリックが、B Vの前肢によつて軽々と持ち上げられる。ヴァルヴアラが拳銃をあげかけたが、すぐに下ろした。エリックも抗わなかった。かなう相手ではない。

B Vが、エリックを前肢で抱きかかえる。渚は思わず吹き出しそうになった。ハリウッドスタイル……いわゆる『お姫様抱っこ』の状態だったからだ。

『帰る』

B Vが啼き、歩み出す。

渚とヴァルヴアラは顔を見合わせた。ヴァルヴアラが、仕方が無い、といった表情で肩をすくめる。ふたりは装備を拾い上げると、B Vのあとを追った。

人間の足の遅さに気付いているのか、あるいはエリックを抱いているために不都合があるのか、B Vの歩みはゆっくりとしていた。

二十分ほど歩むと、奇妙な一行はヴォーゲオスのコロニーの外縁にたどり着いた。

おびただしい数のB Vがいた。草を食んでいるもの。休んでいるのか、じっと動かないもの。メンテナンスだろうか、前肢で身体の内側をいじっているもの。空気は刈り取ったばかりの牧草のような、強烈な青臭さを含んでいた。

エリックを抱いたB Vは、その中へと分け入っていった。渚とヴァルヴアラはためらった。

「彼にくっついていての方が、危険がないようにも思えるけど……」
ヴァルヴアラが、言う。

「そうね」

渚も同意した。他のB Vたちは、抱かれているエリックに見向きもしなかったし、渚らの存在にも気付いているはずだが、別段警戒

のそぶりも見せていない。

渚は思い切ってコロニーの内側へと踏み込んだ。足早に、エリックを抱いたBVのあとを追う。厳しい表情のヴァルヴァラが、続いた。

コロニー内部は、柔らかい土が剥き出しになった部分とよく茂った柔らかな緑色の叢が混在し、半ば迷路のようであった。

やがて、BVが立ち止まった。そつとエリックを下ろす。

「……生きた心地がしなかった」

青ざめた顔のエリックが、英語でつぶやく。

BVが、手近の草を食み始めた。

「彼の家かしらね」

周囲……BVと草しか見えない……を見渡しながら、ヴァルヴァラ。

BVが、こちらを見て啼いた。

『喰え』

「なんだって？」

「遠慮しないで食べろって」

渚は、エリックに意識してやった。

「俺はベジタリアンじゃない、って言ってくれ」

ふてくされたように、エリック。

「これからどうする？」

「彼の食事が終わるのを待つしかないわね」

渚の問いに、叢を調べていたヴァルヴァラがそう答えた。

渚は地面に座り込んだ。グエの数に限られている以上、他のBVに片端からインタビューすると言うわけには行かない。それに、他のBVが彼ほど親切だとは限らない。

「見て、渚」

ヴァルヴァラが、BVが食んでいる草と同じものを差し出した。葉がいくつにも裂けており、裏側が白っぽい。

「ヨモギみたいね」

「丈がいささか高すぎるし、葉も大きいけど、そっくりだね。間違
いなく、キク科ね」

ヴァルヴァラが、葉の一枚を手の中で揉んだ。鼻に近づけ、香
りを嗅ぐ。

「臭いも一緒ね」

渚も嗅いでみた。たしかに、ヨモギ餅のあの香りだ。

「奴に名前をつける必要があるな」

ボトルから水をちびちびと飲みながら、エリックがそんなことを
言い出す。

「危ういところに駆けつけてくれたヒーローなんだから、かつこ
いフランス名前をつけてよ」

渚はそう注文した。

「よし、ジャンと命名しよう」

「安易な……」

ヴァルヴァラのため息。

やがて、BV……ジャンが食事を終えた。渚とヴァルヴァラは、
さっそくジャンとの対話を再開した。判りやすい単語を選び、さ
ながらジグソーパズルのような会話を根気よく続けてゆく。

すぐに判明したのは、ジャンが彼ではなく彼女だ、ということだ
った。過去に出産したことがあるという。

「じゃあ、ジャン改めジャンヌだな」

惘然として、エリック。

辛抱強い会話の結果、ジャンヌだけではなく、このコロニーにい
るすべての個体が雌だということが判った。さらに突っ込んで訊く
と、ジャンヌには『交尾』に相当する概念がないことも判明した。

「……興味深いわ」

ヴァルヴァラが、かすかに眉根を寄せた色っぽい表情で考え込む。
「すべての個体が雌。しかも卵胎生。蜂や蟻の女王に比定すべき個
体はいない。交尾したこともない。つまりは、単為生殖をしている
ということよ」

「単為生殖っていうのは……なんだっけ」

渚は小首をかしげた。生物の授業で聞いた事があるような気もするが、はっきりとは覚えていない。

「交尾を行わない増え方よ。いわば、自分の複製を生むわけ。昆虫では珍しいことではないわ。短期間で爆発的に個体を増やすことができるから」

「複製って言うと、クローン？」

「いいえ。減数分裂を伴うはずだから、厳密にはクローンではないわね。いずれにせよ複製だから、それでは遺伝的に進化できない。ジャンヌは交尾の概念は持っていないけれども、『雄』という概念なら、おぼろげながら持っているわ。だから、周期的単為生殖なのかもしれない」

「周期的単為生殖？」

「通常は単為生殖で増え、一時的に有性世代が発生し、そこで交尾が行われ、進化する。新世代が単為生殖で増え、また有性世代を生み……といったサイクルをもつことよ。これならば、単為生殖の有利な点を活かしながら、遺伝的にも進化できる」

「DDが羽蟻のような存在……ってのは、ないか」

渚は自分の意見を自分で否定した。DDもすべて雌だった。羽蟻は雄である。この仮説は成り立たない。

「定期的に、BVは雄を生んでいるのかもしれない。もう少し突っ込んで訊いてみましょう」

ヴァルヴァラが、ジャンヌに向き直った。

だが、彼女の仮説も外れた。BVが生むのはすべて雌らしい。しかし、質問を重ねるうちにさらに興味深いことが判明した。

BVには、DDを生むタイプとそうでないタイプがあるというのだ。

ジャンヌによれば、彼女はDDを生めないタイプ。生むタイプは、大きなコロニーの周囲にある小さいコロニーのうち、特定のいくつかで生活している。彼女らは、主にDDを生み育てることが仕事で

ある。また、その個体数を維持するために、B V も生む。双方のタイプの差異は、外見上はない。最も異なるのは、臭いであるとジャンヌは主張した。

「単なる役割分担じゃないわ。おそらくは、遺伝子レベルで違う種類なのよ」

ヴァルヴァラが、興奮した。

「仮に、D D を生むタイプをB V a、生まないタイプをB V bと名付けましょう」

さらに質問が重ねられる。渚はコロニーについて詳しいことを聞いたが、あまり明確な答えは返ってこなかった。数や広さと言った概念が、曖昧なのだ。ただ、大きなコロニーとそれを取り巻く小さなコロニーいくつか、ひとつのまとまった群として認識されていること、大きなコロニーには『たくさん』B V b が暮らし、小さなコロニーには『少しの』B V a とD D の幼生、あるいはB V b のみが暮らしていること、B V a とB V b が同一のコロニーで生活することはない、ということ。そして、ほとんどのB V b がD D を単なる『無駄飯食い』と認識しており、それを生み育てるB V a に関しても決して好印象を持っていないことは判明した。

「さて、じゃあ肝心な質問をしましょう。D D の正体は何なのか」
すっかりのめりこんだヴァルヴァラが、勢い込んでジャンヌを質問攻めにする。

だが、これに関するジャンヌの答えは失望すべきものだった。『知らない』というのが、返ってきた答えの大半であった。D D とは何か、何のための種類なのか、なぜ知的哺乳類を襲うのか……。

「B V a に訊いてみるしかないんじゃないのか？ 一応、親なんだし」

エリックが、言う。

だが、ジャンヌに対しての、B V a の誰かを紹介してくれとの依頼は拒絶された。どうやら、B V b とB V a 間のコミュニケーションは皆無に近いらしい。不用意にB V a の小コロニーに近付いたB

Vbが、BVaに殺される事例も後を絶たないという。

『危ない。死ぬ』

BVaコロニーに対して質問されたジャンヌが、軋る。

「手詰まりね。でも、DDはおそらく生殖に関連した役割を担っているという感触ね」

ヴァルヴァラが、言う。

「雄を生むための羽根のある雌、というのはどうかしら」

渚はそう仮説を述べた。

「そうね。DDの生殖器官は不十分なものだったけど、卵巣はあったから、単為生殖は可能だったはずよ。なんらかの特殊な条件を満たす場所を探して飛ぶ。そこでおそらく羽根のある雄を生んで、雄がコロニーに戻ってきて一部雌……おそらくはBVaと交尾する。そして生まれた世代が再び単為生殖をする……」

ヴァルヴァラが、あとを引き取って予測する。

「それならば、色々と筋は通るわね。でも、なんだかどこかで似たような話を聞いた事がある気がするのよ。たしか、地球の昆虫のケースだったと思うんだけど……」

「スィーランス！」

いきなり、エリックが叫んだ。ヴァルヴァラが、口をつぐむ。

エンジン音が聞こえていた。ごーん、というターボプロップ特有の爆音だ。

エリックが、PRC-90を取り出した。すぐに、回線が繋がる。相手はXOだった。……ジェットストリームで飛来したのだ。渚は上空を見上げた。空飛ぶ十字架のようなターボプロップ機のさらに上空に、小さく二機の護衛機も見える。誰が来てくれたのだろうか。エリックが、ことの経過を報告した。しばらく会話してから、PRC-90をヴァルヴァラに差し出す。

「BVの庇護下にあると言っても信じてくれない。君の確認を求めている」

ヴァルヴァラが、エリックの話を追認する。次いで渚が三人とも

正気であることを保証し、やっとXOも納得した。

「補給物資は、このコロニーの南西千メートルの位置にドロップして下さい。IPは低い岩山です」

ヴァルヴァラが告げる。……さすがにパイロットである。ジャンヌのあとを追いながらも、ちゃんと周囲の地形を確認していたようだ。

「S-58用の燃料基地設置は難航しているようよ。タンクローリーでは乗り越えられない地形だから、少しずつ四輪駆動車で運ばなきゃならないから」

PRC-90を切ったヴァルヴァラが、説明した。

「航空ガソリンの備蓄自体がろくに無いだろう。あいつはタービンヘリじゃないからな」

エリックが言う。ヴァルヴァラがうなずいた。

「でも、明日の午前中には準備が整うそうよ。それまでなんとか凌ぎましょう」

三人は食事を選った。そのあとで、暇つぶしを兼ねてジャンヌにいろいろと質問をぶつける。食事の回数と量。排泄の仕方。他のBVとのコミュニケーション法。簡単な記憶力テスト。視力テスト。夜間の行動について。

三人のBVに関する知識は膨れ上がっていった。

翌朝飛来した二機のRQAF機……MB339Aに乗るレナート・オルシーニがエレメント・リーダーだった……が、救出作戦の詳細を伝えてきた。当初の計画通り、S-58を使うという。Fベースの三十マイル北に設けた補給処を起点とした飛行ならば、往復百八十マイル。約三百三十キロ。収容にかかる時間を入れても、余裕で飛べる。

CSARミッションの場合、ヘリコプターは着陸しないのが普通である。地表の状態がつまびらかでない場合、離着陸を行うとトラブルが生じることが多い為だ。しかし今度の作戦では燃料と時間を

節約するために、S-58が着陸して収容するものとされた。そのために、収容地点はあらかじめ定めず、直前に渚らが適地を選択し、先行する偵察機に伝達するという取り決めがなされた。回収予定時刻は、1400。ヘリや護衛機の離陸時刻は、その時間から逆算される。

「よし。ジャンヌと交渉だ」

エリックが、意気込む。

渚とヴァルヴァラは、ジャンヌに帰ることを伝え、途中まで同道してくれるように頼んだ。いともあっさりと、ジャンヌが承諾する引き止められるかもしれない、と危惧していた二人は、ほっと顔を見合わせた。

「ぎりぎりまでここにいきましょう。少なくとも、安全だわ。コロニーから充分に離れるのに三十分。降着地点選定に一時間。予備に三十分。正午出発で、いいわね」

ヴァルヴァラがてきぱきと取り決める。

「昨日落してもらった補給物資はどうする？」

エリックが、訊く。

「置いて行きましょう。惜しくはないわ」

あっさりと、ヴァルヴァラ。

午前中は、ゆっくりと過ぎていった。ジャンヌがのんびりと草を食み、渚らは最後のレーションを、浄水錠が溶け込んだ不味い水で胃に流し込んだ。

騒動が持ち上がったのは、そろそろ出発の準備でもしようかと、渚らが腰をあげかけた頃だった。

コロニーの隅の方で、急にBVたちが騒ぎ出していた。軋るような声が多数聞こえる。

「何があった？」

ヴァルヴァラが、ジャンヌに問うた。

『上質。草。獲る』

ジャンヌが啼く。ヴァルヴァラが、さらに問う。

どうやら、B V a が、D D を育てるために質のよい草を収穫に來たらしい。ジャンヌに言わせると、B V a は B V b よりも草の育て方が下手くそなので、定期的に B V b のコロニーに『侵入』し、勝手に草を食べてゆくのだという。どうやら、いったん消化管に収めたものを、D D の幼生に与えているらしい。……ドクター・ゲラの推測どおりである。

「渚。グエを貸して。B V a と接触するチャンスよ」

ヴァルヴァラが言って、手を差し出した。渚は、うなずいてグエを渡した。

「気を付けてね」

言ってから、通じていないことに気付く。

コロニーに侵入した B V a は、かなりの数にのぼるようだった。ヴァルヴァラが、ジャンヌと会話している。柔らかな発音のロシア語と、軋るようなジャンヌの声。……傍から見ると、なんともシュールな光景である。

「メキシコの村を襲う無法者の群、って感じだな」

遠くでうごめいている B V たちを眺めながら、エリックがつぶやく。

「ホースオペラね」

英語で渚も応じた。

やがて、こちらに一匹の B V が近付いてきた。外見は、他の B V と何ら変ったところはない。だが、傍目にもジャンヌが警戒の色を見せたことが判った。B V a なのだろう。

B V a が、草に喰らいつく。ヴァルヴァラが静かに近付いた。渚が昨日ジャンヌにしたように、グエを放り投げようとする。

B V a が、動いた。前肢が横様に繰り出される。ヴァルヴァラが、俊敏な動きを見せて飛び退かなければ、まず確実に突き飛ばされていただろう。

すぐさま、B V a が第二撃を繰り出した。ヴァルヴァラが、地面に転がってこれを躲す。

そのときにはもう、ジャンヌが動いていた。前へ出てヴァルヴァラに更なる攻撃を加えようとしたB V aに、体当たりを喰らわす。よろけたB V aの頭部に、ジャンヌの前肢が叩きつけられる。ひるんだB V aが、よろけつつ後退した。

ヴァルヴァラを守るように立ちはだかったジャンヌが、複眼でB V aを睨みつけた。

狼藉B V aが、不意にこちらに関心を失ったように見えた。ぷいと横を向き、別な叢に向けてとすとすと歩み去る。渚はヴァルヴァラに駆け寄った。

「コミュニケーションには失敗したけど、B V aとB V bが違う種類だと言うことが、これで証明されたわね」

ヴァルヴァラが立ち上がり、フライトスーツについた埃を払った。渚は自分のグエを拾い上げた。

「どうする？ そろそろ正午だぜ」

ゆつくりと歩んできたエリックが、訊く。

「これ以上ここにいるのも無駄だと思う。ジャンヌの都合がよければ、出発しましょう」

ヴァルヴァラが、言った。

コロニーの南二キロほどのところに、降着適地は見つかった。比較的固い地盤の上に、芝草が密生している。周囲に障害物はなく、ほぼ真東五百メートルほどのところに、よく目立つ白っぽい岩の露頭がテニスコート三つ分くらい広がっている。

渚は腕時計を見た。救助隊到着までは、まだ一時間ほどある。彼女の頭の中で、ひとつのアイデアが固まりつつあった。

「ねえ、ヴァーリヤ。ジャンヌに、B V bとB V aの仲は本当に悪いのかどうか、訊いてくれない」

ジャンヌとの会話は、いまやほとんどヴァルヴァラの役目になっていた。言語のセンスは彼女の方が上だし、B V の言葉の構造も、どちらかと言えば日本語よりも英語やロシア語に似ているようだ。

長々と、ヴァルヴァラとジャンヌが話し合う。

「……悪いみたいね。お互いに悪感情に近いものを抱いているみたい。ある種の階級闘争みたいなものかも知れないわ。B V aはB V bを、D Dを生めない役立たずだと思っている。B V bはB V aのことを、D Dを育てるしか能のない連中だと思っている……」

「もし、B V aがいなくなったら、どうなると思うと訊いて」

渚の依頼に、ヴァルヴァラの眼が光る。

「まさか、B V aを攻撃するつもりじゃないでしょうね」

「とにかく、訊いてみて」

会話が再開される。渚はじりじりしながらそれが終わるのを待った。

「どうなるかは判らない。でも、D Dは生まれなくなる。B V bは幸福になる、とジャンヌは言ってるわ」

ヴァルヴァラが、言う。

「過去にそういうことが……なんらかの事情でB V aが全滅したことがあったのかしら」

「あったとしても、それは伝わってないでしょうね。記録とか伝承とかとは無縁なはずよ」

「説明してくれ」

ロシア語と日本語、それにB V 語の会話に全くついていけなかったエリックが、口を挟む。

「B V aだけがD Dを生むのなら、もしB V aを根絶やしにできたらどうなるか、と考えたのよ。どうせB V bは単為生殖で増えるのでしょうか？ うまくいけば、すべての個体をジャンヌのような攻撃性のないB V bにできるかも知れない。もちろん、D Dは生まれない」

渚は、ゆっくりとした口調で説明した。

「そううまく行くかな」

エリックが、疑問を呈する。

「もう一度訊いてみて、ヴァーリヤ。もしB V aがすべて殺された

ら、B V bはどう考えるかを」

ヴァルヴアラが、ジャンヌに訊ねる。

「B V bは喜ぶそうよ。D DもB V aもいなければ、トラブルもない。……それと、こうも言ったわ。B V aをすべて殺すものがいたら、B V bはその存在に感謝するだろう」

渚らは、1330にジャンヌをコロニーに帰した。いくら友好関係を結んだとはいえ、ヘリの接近に異常反応を引き起こすおそれがないとは言えない。

収容予定二十分前に先行偵察機二機が飛来した。マイラのA-7と、プラサンのF-5だった。エリックがPRC-90を使い、降着地点を通知する。

やがて、待望のS-58が二機の直衛機を伴って飛来した。ヴァルヴアラがフレアを上げ、降着地点をマークする。風下から進入したS-58は、優雅に着地した。渚は、ヴァルヴアラとともにエリックに肩を貸してヘリコプターに乗り込んだ。

「よう、お帰り！」

貨物室にいたのは、なんとホルヘだった。

「出せ、ミゲル！」

ドアを閉めたホルヘが、高い位置にある操縦席に向かって叫ぶ。

「助かったぜ、相棒」

床に下ろされたエリックが、笑顔でホルヘの手を取った。

「ということ、ちと早いが……」

ホルヘが、隅からクーラーバックを引き寄せる。

案の定、ぎつしりと入っていたのは瓶ビールだった。

「XOにどやされるわよ」

鼻にしわを寄せて、ヴァルヴアラ。

「はは。そう思って、バクラーを入れてきた。ノンアルコール・ビールだから、渚でも飲めるだろう」

ホルヘが、茶色い瓶を配った。渚も一瓶受け取る。恐ろしく冷た

く冷えていた。

「やだ。こっちの瓶は本物じゃない」

ヴァルヴァラが、残っている三本をつついた。

「こいつは、パットたちの分だ」

急に真顔になったホルヘが、その三本をつかんだ。操縦席の窓を

開け、一本ずつ地表に放り投げる。

「さて、乾杯しよう」

戻ってきたホルヘが、栓を抜いた。

「帰ってきた三人と、帰ってこなかった三人に。乾杯」

10 コンタクト（後書き）

第十話をお届けします。用語解説 減数分裂／染色体の半減を伴う細胞分裂 IP／イニシャル・ポイント。参照点。この場合は、目立つ地物

11 実験

「いまだに信じがたいな」

XOが、唸った。

Fベースで行われた渚とヴァルヴァラ、それにエリックの事後報告に出席した顔ぶれは少なかった。COの城山重光、XOのジェレミー・ボーマン。ドクター・ゲラ。それに、国王陛下の名代として派遣されたクロヒョウ。

「どうですか、ドクター」

重光が、ドクター・ゲラに振る。

「……いや、正直申し上げて生物学には暗いですからな、わしは。昆虫のこととなると、通り一遍の知識しかない。だが、彼らの報告は筋が通っている。いや、驚きました」

「ヴォーゲオスの友人を作ってしまうとは。いやはや。わたしも驚きました」

クロヒョウも、唸る。

「それで……僭越ながら、みなさまに検討していただきたい案があります」

渚は思い切って言った。

「国王陛下は、BVはDDに支配されている気の毒な種族であるとお考えになって、BVに対する攻撃を禁じられました。ですが、今回の我々の調査によって、真の敵はDDを生み出しているBVaであることが判明しました。確証はいまだありませんが、BVaを攻撃殲滅することによって、DDの出現を抑制ないし阻止できる可能性が出てきました。ぜひ皆様に、BVaに対する対地攻撃の是非を検討していただきたいのです」

沈黙が流れた。

「まあ、検討の価値はあるな」

重光が、言う。

「大胆だな、あんたも」

食堂でユリと食事をしていた渚のテーブルの向かい側に、ホルヘが座った。

「今日は素面なのね」

「……まあな。聞いたぜ、B V 爆撃案」

「B V aよ」

やんわりと、渚は訂正した。

「勝算はあるのか？」

「わからない。でも、やる価値はあるわ。今のところ、D Dはヴォーゲオスの生活や進化に何ら役立っていない。B V aを全滅させれば、あるいは……」

「しかし、よくもそんなこと考えたもんだ」

ボイルした鶏肉を品よく噛んでいるユリを眺めながら、ホルヘがつぶやくように言う。

「ジャンヌの話を聞けば、誰だって思い付くアイデアよ。それに……」

渚は言葉を切り、笑顔でホルヘを見つめた。

「ヒントをくれたのはあなたじゃない。別方向からアプローチしてみろって」

「はあん？」

きょとんとした顔のホルヘ。

「リカルド叔父さんの話よ」

「したか？ 記憶にないが」

「……どうやら、ほんとに酔っ払っていたらしい。」

「まあ、いいわ」

渚は曖昧に微笑んだ。

もしB V a殲滅が成功し、D Dが生まれ出なくなれば…… R Q A Fの存在意義もなくなる。つまり、渚がオークリヨアムを継がなくても済むわけだ。念のためにR Q A Fが存続し、C Oに就任せざる

を得なくなつたとしても、脅威は軽減されるから、向こうの世界に生活の重点を置けるだろう。すべてが丸く収まる。

「だがな、大きな声じゃ言えないが、あんたの計画を快く思っていない連中が多いことも確かだぜ」

小声で、ホルへ。

「ある程度、予想はしていたけどね」

渋い顔で、渚は応じた。

DDを倒すことで、RQAFパイロットたちは生活の糧を得ているのだ。整備や補給、管理部門の人々も、RQAFを支えることによって給与を得ている。もしDDがこの世界から消えれば、彼らは用済みとなってしまう。

特に深刻なのはパイロットであろう。多くの者が、あちらの世界で様々な事情で飛べなくなつた人たちだ。エリックも、ホルへも、ヴァルヴァラも、プラサーンも、マイラも……。翼をもがれたパイロットほど、悲しい人種はいない。渚のプランが成功すれば、彼らが軍用ジェットを飛ばすことは永遠になくなるだろう。

「COの仕事は、RQAFの運営だけかもしれない。でも、オークリヨアムの仕事は、キャリエス王国の臣民を守ることだと思つた。だから、攻撃的な性質のBvaを倒すだけで、この世界に安全をもたらすことが出来るのなら、それに賭けてみるのが本分だわ」

渚はそう言つて、ホルへの反応を見た。

「……俺も、ここの知的哺乳類は好きだ。みんないい奴ばかりだし。だから、できるものならばDDの脅威から開放してやりたい。ただ……」

嘆息したホルへが、頭を掻いた。

「俺は、根っからのジェットパイロットなんだな。もし飛べなくなつたら、なんて考えると、貧血を起こしそうになる。RQAFがなくなつちまえば、ジェットを飛ばすチャンスもないだろう。でも、俺が今後の人生を、どこかの僻地でブッシュパイロットとして過ごす覚悟を決めるだけで、ここの連中がDDの恐怖に怯えずに済むの

なら……俺は覚悟を決めるよ。好きに計画を進めてくれ。俺は、お嬢さんの味方だ」

ホルヘが一気に言って、テーブルの上に置かれた渚の手に、自分の手を包み込むように重ねた。

「ありがとう」

渚はおもわず胸を詰まらせた。軍事航空にそれなりに通じている彼女にしてみれば、ホルヘの気持ちは痛いほどよくわかった。

ユリが、鶏肉を噛むのをやめた。渚とホルヘの顔を見比べてからおもむろに自分の前足を揃えて、重なっている二人の手の上にちょこんと載せる。

渚とホルヘの笑い声が重なった。

渚の提案した『B V a に対する限定的対地攻撃』案は、実験的規模ならばと言う条件付きで、国王陛下の裁可を得た。R Q A F には、D D の大規模進入に備えた対地攻撃装備のストックがあつた。大部分が、古い通常爆弾である。在庫一掃も兼ねて、これらが活用されることとなった。

計画は、X O が中心となつて着々と進められた。最初になされたのが、新たなヘリコプターの購入だった。中古の S A 3 3 0 F ……軍用ヘリコプターとして有名なピューマの民間型……が、F ベースに運ばれる。

細部が詰められ、やがて作戦計画が完成した。フェイズ1において、三機に援護されたピューマを使用し八名の人員が J コロニー（ジャンヌが住むコロニー）に潜入、ジャンヌと接触を果たし、S 1 から S 3 コロニー（J コロニーの周囲にある B V a の小コロニー）破壊の『承諾』を得る。そしてすべての B V b に対し、フェイズ2の間 J コロニー内に留まるように伝達する。もちろん、B V a との誤認を避けるためである。その後潜入隊は当地に監視カメラ等の偵察機器を設置、いったん撤退する。

フェイズ2は対地攻撃である。オームラ A B より出撃した十二機

が、S1からS3コロニーに爆撃を敢行、すべてのBVaをDDの幼生もろとも殲滅する。直後にFベースより発進した四機が低空偵察を行い、撃ちもらしたBVaがいればこれを破壊する。

フェイズ3として潜入隊が再びJコロニーを訪れる。BVa全滅後に、BVbが果たして正常に生きてゆけるかを確認するためである。もしBVbのライフスタイルに大幅な変化……たとえば個体数の減少など……が長期的に渡って見られなければ、国王の裁可を待って本格的な『BVa殲滅作戦』が発動される。

渚は当然のことながら潜入隊に参加を表明した。提案者としての責任があるし、ここで後ろ向きの行動を取ればRQAF内での評価が下がってしまう。足首にまだ違和感の残るエリックは自重し、代役としてホルヘを指名した。『通訳』としてヴァルヴァラも志願する。知的哺乳類は敵視される恐れがあるとのことで、参加は見送られた。偵察機器設置と通信担当として管理部門の技術者が一人、それに護衛役として、元各国陸軍所属の男性がRQAF各所から四人集められた。隊長には、ヴァルヴァラが指名される。

『過去の戦訓』から、護衛役四人とホルヘには、HK79グレネードランチャー付きG3アサルトライフルが、通常榴弾および対装甲榴弾とともに支給された。渚もTMPを渡され、わずか二十分だけだったが元オランダ王立海兵隊だという男に特訓を受けた。さらに、手榴弾投擲の訓練も受ける。使用された模擬手榴弾は、独特の折れ曲がったセイフティ・レバーからしてどう見てもロシア製のF1であった。

ピューマが、高度を下げた。地表すれすれで、ホバリングする。
「GO！」

護衛役の四人が、G3を抱えてスライディングドアから飛び出した。教本どおりX字型に展開し、四周に銃口を向ける。

「マジだな、あいつら」

一応ドアから銃口を突き出し、援護の態勢を取りながら、ホルヘ。

降着地……渚らが先日S-58に回収された地点と同じ……は平和そのものだった。ばりばりというヘリの爆音が響き、ダウンウォツシュが丈の低い草を地面に押し付けている。

隊長であるヴァルヴァラが飛び降り、形式的に地面をチェックし、パイロットに着陸よしのサインを送った。ピューマが、着陸する。クラッチが切られ、ローターが空転を始めたが、パイロットは計画どおりエンジンを切らなかった。……万が一再始動に失敗したら、取り返しのつかないことになる。

上空を、護衛役の三機が旋回する。マイラのA-7と、修理が完了したサラップのハンターFGAMk9、それにレナートのMB339だ。

渚はホルへとヴァルヴァラを手伝って、装備を下ろした。今回は大荷物である。食糧と水、予備の弾薬、記録用のビデオカメラや音声レコーダー、バッテリー類、予備のグエが詰まった箱。調査が一日で終わらぬ事態も想定して、スリーピングマツトまで持参である。スンプアと名乗った韓国人らしい通信技術者は、自分の装備である通信機や遠隔操作カメラを丁寧に荷降ろししている。

ヴァルヴァラが、パイロットに完了の合図を送った。静止していたローターが回り出す。渚は軽い荷物が飛ばされないように手で押さえた。

ピューマが離陸する。計画では、航続距離の短いサラップのハンターが護衛に付いて帰投し、残るマイラとレナートは潜入隊が安全を確保するまで上空待機することになっている。

装備を背負った一行は、ヴァルヴァラのナビゲートで出発した。事前に偵察写真をもとに大縮尺の地図を作っているから、迷うことはない。護衛役の四名に囲まれるようにしながら、一行は足早に「コロニーを目指した。

「止まって」

念のため、コロニー外縁でヴァルヴァラが一行を止めた。十分ほど休憩を兼ねて待ち、BVbに警戒の動きがないか見極める。

「いいみたいね。行くわよ」

ヴァルヴァラを先頭に、一行はヴォーゲオスの住処へと足を踏み入れた。すっかりお馴染みになった青臭い臭いが、渚を包み込む。B V bたちは、闖入した一行に対し通り一遍の興味しか示さなかった。だが、一匹が強い関心を示し、近寄ってきた。

……ジャンヌだろうか？ 渚は眼を凝らしたが、そんなことでB Vの個体差など識別できるわけもない。グエが載っていないかを見たが、どうやらないようだ。

予備のグエを取り出したヴァルヴァラが、慎重にB V bに近付いた。護衛役の四人は銃口を下ろしてはいるが、いつでも構えて発砲できる態勢でこれを見守る。

ヴァルヴァラが、グエを投げた。狙いどおり、B V bの外殻にグエが吸い付く。

すぐさま、ヴァルヴァラがB V bに話し掛けた。もはや名人芸とあっていいレベルの会話だった。B Vにも判りやすい単語を適切に並べ、以前に世話になったB V bに再び会いに来たことを伝える。

このB V bは、以前にも人間を見たと言った。その人間を世話した個体……つまりジャンヌのことも知っていると言う。ヴァルヴァラがすかさず案内を頼む。了承したB V bのあとに、一同は続いた。「ジャンヌ！」

ヴァルヴァラが、思わず叫ぶ。

ヨモギもどきのあいだにいたのは間違いなくジャンヌだった。頭部に、渚がつけたグエがしっかりと張り付いている。

ヴァルヴァラが挨拶する。ジャンヌが挨拶を返し、次いで渚に向けて前肢を差し出した。

『記憶。黒。頭部。雌』

たどたどしく、ジャンヌが軋る。渚のことを覚えていてくれたのだ。嬉しくなつて、渚は思わず大根ほどの太さがあるジャンヌの前肢の先を両手で握った。

「彼女が噂のジャンヌが。なかなかの別嬪だな」

ちょっと警戒気味に、ホルヘがつぶやく。

ジャンヌが、残りの人間について質問する。ヴァルヴァラは、同じ『コロニー』の者だと答えた。

『肢。傷。雄。無い。死ぬ。』

ジャンヌが軋る。……どうやら、エリックがいないので、負傷が元で死んだのではないかと危惧しているようだ。ヴァルヴァラが誤解を解く。それを聞いたジャンヌは、明らかに喜びを感じたらしい。好意を意味する軋りを数回繰り返した。

「さっそく、仕事にかかりましょう」

ヴァルヴァラが、命じた。

一同は荷物を降ろし、それぞれの仕事を始めた。ヴァルヴァラはジャンヌとB V a 攻撃に関する交渉を始める。渚はホルヘを助手にして、他のB V b との接触を試みた。スンファは通信機…… P R C 320 をダイポール・アンテナに繋ぎ、F ベースとの交信を開始した。護衛役の四人も、二人ずつの組になって、ビデオカメラを回し始める。

渚は適当にB V b を選び、グエを貼り付けて会話した。その様子を、ホルヘがビデオカメラに記録する。質問項目は、すでに決められていた。主にジャンヌから聞き取った内容を再確認するのが目的である。話し掛けられたB V b は、みな一様に協力的だった。……東京で街頭インタビューするほうが、もっと苦勞するだろう。

二時間後、ヴァルヴァラが集合を命じた。

「渚？」

「インタビューしたB V b は五匹。すべて、ジャンヌの言葉を裏書きしたわ。みなD D に用はないと考えているし、B V a も憎んでいる。B V a 殲滅に関しても、反対意見は出なかった」

簡潔に、渚は報告した。

「B V a 殲滅後の予測は？」

「それは成果なし。だれにも判らないそうよ」

渚は首を振りつつ答えた。

「やってみなけりゃ判らない、ってことか」
ホルヘがつぶやく。

「何か意見は？」

ヴァルヴァラが、集った全員を見渡した。口を開くものはいなかった。

「結構。スンファ、XOに報告。Jコロニーでの調査終了。フェイズ2移行に支障なし。本隊はこれより偵察機器設置にかかる。撤退は1600予定。以上」

渚らはジャンヌに遠隔操作ビデオカメラや集音マイクの設置許可をもらった。もつとも、これら機器の機能をBVbたちは理解していないのだから、無許可に等しいが。

手分けして、機器を設置する。かなり広範囲を見渡せる位置。ジャンヌの動きを観察できる場所。S1コロニーを遠望できるところ。ヴァルヴァラだけは、ジャンヌに明日の日中だけコロニーの外へと出ないように説得していた。そして、その情報を他のBVbに伝えるようにとも付け加える。

「なんとか理解してくれたわ」
疲れた顔で、ヴァルヴァラ。

一同は荷物をまとめた。予備の食料や水、その他消耗品などは、ジャンヌの許可を得た上で、フェイズ3に備えてコロニー内に置いてゆく。スンファが、予定通り撤退準備が完了したことをFベースに通告した。

「さよなら、ジャンヌ」

渚はすっかり親しみを覚えるようになったBVbに別れを告げた。

無事Fベースに帰還した潜入隊は、XOと例の国王名代のクロヒヨウに詳細な報告を行った。撮影されたビデオ映像も、再生される。「フェイズ2発動に支障はないものと考えます」

ヴァルヴァラが、報告を締めくくる。

「いかがですか、ゴエンザレド殿」

難しい顔のXOが、クロヒヨウを見やる。

「問題ないでしょう。RQAFに、お任せします。いや、ご苦勞様でした」

クロヒヨウ……ゴエンザレドが、居並ぶ潜入隊のメンバーを労った。

「よろしい。フェイズ2発動する。攻撃開始は明日0900。統制機として、ジェットストリームを飛ばす。渚、君は同乗してくれ。

COの意向だ」

「はい、XO」

対地高度五千フィートでゆっくりと旋回するジェットストリームの窓から、渚は眼下のBVaコロニー……S1を見つめていた。このくらいの高さからでは、S1コロニーも単なる大きな円にしか見えない。だが、あまりに低く飛ぶのは危険である。五百ポンドクラス爆弾でも、高さ二千五百フィートくらいまで弾殻を飛ばすことがあるのだ。また、攻撃をかけて引き起こす機の邪魔にならないためにも、高度をとる必要がある。

ジェットストリームの後部は、一部のシートが取り払われ、そこにわか作りのコンソールが出現していた。無線機が置かれ、チャートや搭載兵器一覧表、搭乗割りなどがべたべたと張られたその一角では、XOと三人の技術者が厳しい表情で待機している。

渚は双眼鏡を取り上げ、二千フィートほど低い高度で旋回待機しているオームラABから飛来した二機を観察した。ホークと、MiG-21のペアだ。双方とも、M117と思われるずんぐりとした古臭い形状の通常爆弾を翼下に吊っている。M117についているサスペンション（吊り金具）の間隔はNATO規格の十四インチで、MiG-21に通常ついている二十五センチ規格のパイロンでは搭載できないはずだが……どちらを改修したのだろうか。

渚は時計を見た。0858。もうすぐ開始だ。

ホークとMiG-21のペアが、待機経路を離れ、渚の視界から消えた。ほどなく、XOが作戦開始を告げた。

その直後、渚から見て左方からホークが緩降下してきた。すぐに爆弾を全弾リリースし、左側へひねりながら急上昇する。

S1の中で、光がきらめいた。土煙が、どつとあがる。どんどんという音は、驚くほどあとから渚の耳に届いた。衝撃波だろうか、ジェットストリームがびりびりと震える。

三十秒後に、MiG-21が進入した。ホークと同じ要領で、投弾する。爆発。

BVaに対する、一方的な虐殺である。渚の心がわずかに痛んだ。凶暴とはいえ、BVaもジャンヌらと同じBVなのだ。それなりに知的で、ある程度の社会性をもつ、高度に進化した昆虫たち。

オームラABから飛来した十二機は、四機ずつがS1からS3までにそれぞれ投弾した。全弾が、コロニー内に命中した。ターゲツトは大きなものだし、対空火器の反撃も電子妨害も敵制空戦闘機の脅威もない。実戦経験豊富なRQAFのパイロットたちにとってみれば、いわゆる『ミルク・ラン』だったろう。

ジェットストリームが、高度を下げた。BDA（爆撃効果判定）を行うのだ。

爆撃の効果は凄まじかった。七百五十ポンド、五百ポンド、それに二百五十キロ爆弾の雨は、コロニー内にいた大半のBVaを、原型を留めないほどに引き裂いていた。だが、外縁部では生き延びた個体が数多く見られた。XOと技術員が、撃ち漏らしたBVaの位置を、正確にチャートの上に記してゆく。

「XO。マイラ・フライトはS1。チャンネル4。レナート・フライトはS3。チャンネル5」

指示を受け、待機していたグループ1の四機が低空に舞い降りた。マイラとサラップのペアと、レナートとブラサンのペアだ。兵装は爆弾ではなく、ロケットポッドとガンポッドである。渚は双眼鏡をマイラのA-7に向けた。SUU-23二本、LAU-3四基と

いう重武装だ。

四機が、技術員の誘導を受けながら、撃ちもらしたBVaを丁寧に仕留めてゆく。まず大きな目の集団にロケットを撃ち込み、確実に潰してから、さらに低空に下りて、ガンで一匹ずつ射撃する。十五分ほどで、すべてのスコロニーから動くものが消えた。

「よし。XO。作戦終了。マイラ・フライトおよびレナート・フライト。帰投せよ」

渚は双眼鏡でJコロニーを覗いた。静かだった。遠隔操作ビデオ映像を監視している技術員も、Jコロニー内に異常を認めなかった。フェイズ2は大成功と言えた。

だが、作戦全体が成功したかどうかは、フェイズ3まで待たねばならない。

翌早朝、二機の偵察機がオームラABから飛び立った。丹念に三つのスコロニーを調べたが、生きているBVは一切見当たらなかった。少なくとも、ジャンヌの属する群のBVaは全滅したのだ。

この報告を受けて、Fベースからピューマと援護機が飛び立った。進入隊のメンバーは、前回と全く同じだった。降着地点も同様。ただし、荷物は前回よりも多かった。数日間の滞在を予定しているのだ。一同は慣れた足取りでJコロニーに向かった。

BVbの様子も、前回とさほど変わらなかった。だが、ジャンヌを含むグエを付けたBVbのすべてが、BVaの全滅を喜んでいた。「身内の鼻つまみ者が死んでくれた親族一同、といった感じね」

一通り調査を終えたヴァルヴァラが、そう評した。

「よかった……」

渚はジャンヌの巨体に抱きついた。ジャンヌが一瞬ためらいを見せてから、おずおずと前肢を渚の背中に添える。

「まだ安心はできないけどね」

ヴァルヴァラが、厳しい表情で釘を刺す。

「生態系に強制的に変更を加えたのだから。他の群のBVaが、代

わりを務めるかもしれない。あるいはDDは単なる警護役で、それがいなくなったがためにこのコロニーが他の群の襲撃を受けるかも知れない。ひよっとすると、バランスを崩したせいで、このコロニー自体が衰亡するかも知れない」

「環境の変化つてのは案外恐ろしいからな。ルイーサ叔母さんも、若い頃はまじめ一本槍の人だったが、離婚したとたんに競馬狂いになっちまったからな。まあ、三レースに一回は当ててたから、身代は潰さずに済んだが」

至極まじめな顔で、ホルヘが言う。

「まあ、経過を見るしかないということだ」

通信機を据え付けながら、スンファが達観した口調で言う。

一同はジャンヌの許可を得て、彼女の住処のすぐ傍に寝泊りすることにした。スリーピングマットを敷き、寝袋にくるまるだけだが、草の上に直に寝るよりはるかに快適だろう。

いくら何でも火を使うわけには行かなかったので、食事は冷たいままだったが、缶詰とパンだけでも前回一泊した時の航空救命食よりははるかに旨かった。食事が終わると、ホルヘが自分の荷物から一本の瓶を取り出した。バーボンだ。

「へへ。さすがにビールは重いからな」

「だめよ。二時間交代で夜間当直があるんだから」

「明け方までには醒めるさ」

そう言って、手酌で飲み始める。護衛のメンバーもしつこく勧められたが、プロらしく応じるものはいなかった。

その夜は、何事もなく過ぎた。翌日も、Jコロニーに変化はなかった。Fベースから偵察機が飛ばされ、付近のコロニーの調査も行われたが、そちらにも顕著な変化は見られなかった。

三日目の昼に、渚らはいったんJコロニーから退いた。そろそろ、次の大規模襲来の時期である。DDの群がJコロニーに現われる可能性がないわけではないし、大規模襲来の時間帯に潜入隊になにか

トラブルが発生した場合、支援機や救出機を派遣するといった対処ができない恐れがある。

ピューマでFベースに帰還した渚は、集めた資料の整理を任された。ヴァルヴァラとホルヘはオームラAB行きの連絡便に乗り込んだ。もしDDの規模が予想を上回るものだった場合、余っている機体を駆って迎撃に離陸するのだ。護衛役の四人とスンプアも、本業がある。手が空いているのは、渚しかいなかった。

自室にこもると、渚はメモ類の清書に取り掛かった。グエは会話しか翻訳してくれない。昔はRQAFの標準語は日本語とドイツ語だったそうだが、いまではすっかり英語が標準語と化し、公的な書類の類はすべて英語で書かれていた。渚はヴァルヴァラの達筆やホルヘの殴り書きのメモを、事務室から借りてきたオリベッティのタイプライター……RQAFには、まだインテルとマイクロソフトの侵略の手はそれほど伸びてきていない……で清書した。

「いいか？」

ドアにノックがあつたのは、二時間もしんどい作業を続けていいかげん飽きてきた頃だった。

顔を見せたのはエリックだった。肩に、ユリとサビーヌを載せている。

ユリがさっそく飛び降り、渚に向けて突進した。長い間留守にしていたことを咎めるかのようにじーっと睨んでから、おもむろに頬を舐め始める。

「エリック。足首の具合はどう？」

「ほぼ完治したよ。痛みはもうない」

エリックが、左のつま先を立て、足首をぐるぐると回して見せた。

「そう。よかった」

「実験はうまく行ったようだな」

立ったまま、エリックが言った。

「今のところはね。まだ油断はできないと思うけど」

「次のJコロニー行きには、俺も付き合うよ。ジャンヌに、礼を言

「つておきたいからな」
「命の恩人だものね」
渚は微笑んだ。

11 実験（後書き）

第11話をお届けします。 用語解説 ダイポール・アンテナ/二本の直線状のエレメントを左右対称に取り付けたアンテナの総称。よく見かけるのはV字状や棒状である M117/旧式な750ポンド通常爆弾 ミルク・ラン/比較的安全な戦闘任務の俗称

12 失敗

本日午前中のDD襲来確率は、60であった。昨日の午後が20だから、まず間違いなく来る、と踏んだ渚は、朝食を済ませるとすぐに防空指揮所へと足を運んだ。

Fベースの防空指揮所は閑散としていた。実際の指揮はオームラで執られるから、ここでは万が一の場合に備え、バックアップ態勢を取るだけなのだ。XO他数名の技術員が詰めている他は、チャートに状況を図示する係りがひとり座っているだけだった。むろん、パイロットたちは全員が出撃準備を整えて待機している。

「あら。もう来てたの？」

渚はベンチに腰掛けているエリックを見つけ、歩み寄った。

「おはよう。DDは一時間以内に来るぞ。賭けてもいい」

自信ありげに、エリックが言い切る。

「乗らないわ。……コーヒーでも、飲む？」

「嬉しいね」

渚はエリックと自分の為にコーヒーを注ぐと、ベンチに腰掛けた。エリックの読みは、かなり正確だった。通信員がヒルトップ・レーダーからの警報を伝えた時には、まだコーヒーカップにはぬくもりが残っていた。

通信員が、状況を着々と中継する。係員が、オーバーレイの上に状況を図示してゆく。

DDの規模はレッドだった。五百以上七百五十未満だ。

「ちょっと多めだな」

エリックがつぶやく。

FベースとオームラABから、合計二十機が出撃する。オームラで全般指揮を執るCOは、予備機として確保しておいた六機も全機出撃させた。渚は搭乗割りを見た。ヴァルヴァラ・フライトはヴァーリヤとホルへのペアで、機材はL-39アルバトロスとミラージ

ユイユイだった。

じりじりと、時間が進む。先行偵察が行われ、DD群の数が六百と評価される。グループ1六機……二機が失われ、一機がエンジン換装待ちなのでいつもより機数が少ない……が交戦を開始した。次いで、グループ2本隊が交戦する。予備機の投入。それでやっと、残存DDが二桁となった。残る警戒機が交戦し、なんとか全DDを叩き落す。

「やれやれ。ぎりぎりだったな」

XOが言って、コーヒーを注いだ。

「管理部をせっ突いて、俺とヴァルヴァラの新しい機材を早く入れさせてくださいよ」

いい機会だと考えたのか、エリックがXOに嘆願した。

「いま、探させているところだ。ヴァルヴァラの方は、もう目処がついた。Su-22M3が、手に入る。エンジンがAL-7F3だから、整備が厄介だが。まあ、いざとなればR-29が余っているから、換装してしまえばいい。アルファジェットは元ドイツ空軍機が闇で何機かまとめて手に入らないかどうか、交渉中だ」

「俺のは複座型でなきゃ、だめですよ。渚を乗せるんだから」

「まあ、そちらもいざとなったら改造するさ」

XOが、苦笑いする。

「そうそう。複座と言えば、東欧某国からMiG-23UBがまとめて買えそうなんだが……乗り換える気はないか？」

「結構です」

エリックが、即座に断る。

「そうか。まあ、商談は進めてみるつもりだ。サラップはMiG-23の経験があるそうだから、乗り換えさせてもいいいな」

XOが言って、コーヒーを飲み干した。

大規模襲来から二日後、渚らは再びJコロニーへと飛んだ。いつもの潜入隊八人に、足首の癒えたエリックが加わり、総勢九名の陣

容である。いつもどおり、ヴァルヴァラの指揮で進んだ一行は、何事もなく「コロニー」の内部に入った。

一匹のBVbが、近付いてきた。グエを付けている。渚は急いで識別帖……デジタルカメラの画像をプリントしてまとめたもの……を取り出した。今までインタビューしたBVbには、みなABC順にフランス名前をつけてある。グエの位置からいって、この個体はおそらくコレットだろう。

前に出たヴァルヴァラが、挨拶した。コレットが、一言だけ軋り、歩み去った。

怪訝な顔のヴァルヴァラが、一同を振り返る。

「妊娠したそうよ」

「ほう。めでたいな」

のんびりと、ホルへ。

「でも、嬉しそうじゃなかったわ」

「……感情まで読み取れるのか？」

エリックが、驚く。

「なんとなくな。どう思う、渚」

「うん。喜んではいなかったわね」

ヴァルヴァラほどではないが、渚もBVbとの会話はそれなりにこなしている。口調だけで、喜怒くらいなら判別する自信はあった。

「まあいいわ。先にジャンヌに挨拶しましょう」

ヴァルヴァラが前進を促す。ほどなく、一行はジャンヌの住処に到着した。もはや懐かしささえ覚えるようになった場所であった。出迎えてくれたジャンヌと、皆が挨拶を交わす。ジャンヌはエリックのことを覚えていた。傷が癒えたことを報せると、ジャンヌは喜びの軋りを繰り返した。

ヴァルヴァラが、留守中の様子を尋ねる。途端に、ジャンヌの様子がおかしくなった。不安げに、啼く。

「何ですって？」

思わずヴァルヴァラが問い返す。渚も耳を疑った。

ジャンヌは言った。『妊娠。羽根のあるもの。判らない』

ヴァルヴァラが、冷静に一語一語区切って、質問を重ねる。ジャンヌが、ヴァルヴァラに合わせたのか、ゆっくりと軋った。

何度聞き返しても、答えは同じだった。……信じがたいことだが、ジャンヌは羽根のあるもの、つまりDDを孕んでいた。

「ありえない……」

渚は頭を抱えた。BVbは、DDを生まない種類のはずである。

「やはり、DDは生殖に係る種類だったのよ。だから、代償作用が働いたんだわ」

ヴァルヴァラが、悔しそうに言った。

「どうということなんだ？」

ホルヘが、また持ち込んだバーボンを瓶ごと呷りながら訊く。

「生物つてのは、子孫を残すためならばなんでもやってのけるのよ。結構多くの下等動物が、性比が崩れた時に性転換を行うわ。そこまで行かなくても、雄が雌の、あるいは雌が雄の代理を務めて、生殖システムの混乱を防止する例は多いの。人間だって、軍隊とか全寮制男子校なんて不自然な環境下に置かれれば、同性愛が増えるでしょう。同じようなことよ。あるいは、妊娠も出産もしていない女性が、乳児を与えられたことによつて母乳を出したるものもそうね」

ヴァルヴァラが、説明する。

「ヴォーゲオスにとつて、DDはなんらかの形で不可欠の存在。だから、BVaが全滅してしまうと、BVbの一部がBVaとなるわけか」

エリックが、言う。

「ええ。わたしたちは、BVbこそがヴォーゲオスの基本的な形態で、BVaはDDという特殊な存在を生み出すためだけのいわば変異体であるというような認識しかもっていなかった。それが、根本から違っていた可能性すらあるわ。ジャンヌらの視点に立ちすぎてね。BVaこそが真のヴォーゲオスで、BVbは単為生殖して数を

増やすことしかできない補助的な存在だったのかも知れない……」

ヴァルヴァラの言葉に、皆が沈黙した。

「まあ、実験が失敗しただけじゃないか。またスタートラインに戻ったと考えようや」

ホルヘが明るく言って、バーボンを呟った。

「だといんだけど……」

渚は唇を噛んだ。ヴァルヴァラも、表情が硬い。彼女も、この可能性に気付いているようだ。ため息をひとつついた渚は、メモを手にした。

「さつき、グエを付けたBVb七匹全部に当たってみたの。妊娠しているのは五匹。アメリー、ベアトリス、コレット、フローラ、ジヤンヌ。うち、DDを孕んでいるもの三匹。BVを孕んでいるもの二匹。しかも、すべてがBVa全滅直後に妊娠したことに気付いているわ。Jコロニーおよび補助コロニーに居住するBVbの数は、写真から概算した限りでは約千八百。もし、この比率……七分の三でDDが生まれれば、その数は約七百七十匹」

「多いが、対処できない数じゃない」

ホルヘが、言う。

「通常ならばね。しかし、生まれたDDの飛翔が大規模襲来の時と重なったら……」

渚は眼を閉じた。今まで、RQAFはゴールド……七百五十匹以上の襲来を受けたことは三回しかないという。しかも、その数は八百止まりだった。もしJコロニーのDDがすべてまとめて襲来するとしたら……。そしてもしそれが、大規模襲来と時期を同じくしたら……。おそらく千数百のDDが襲い来ることになる。現状のRQAFの戦力では、対処しきれない。なにしろ、想定外の規模……千匹以上の集団を呼称するカラーコードは存在しないのだ。まず間違はなく、知的哺乳類に死傷者が出るだろう。実に、二十年ぶりに。「各コロニーのDDが集合して飛来するという過去の襲来パターンからすれば、その可能性は高いな」

エリックが、言う。

「とにかく、確認してみましよう。もっとサンプルを採らなければ、なんともいえないわ」

ヴァルヴァラが、グエの入った箱を手にしち上がった。

「そうね」

渚も立ち上がった。たまたま、以前に話を聞いたことのあるBVbにDD妊娠者が集中していた可能性もある。千八百分の七では、有意な統計調査とは言えない。

得られた結果は、皆の気持ちをさらに落ち込ませた。新たに話を聞いた三十二例中、妊娠しているのは二十六匹。DDを孕んでいるのが二十例。BVを孕んでいるのが六例。

合計すれば、三十九例中妊娠三十一例。うちDD妊娠二十三例。

BV妊娠八例。全体でDD妊娠数推定……千六十匹。

代償作用どころではない。全滅したBVaとDDの数を一気に回復させようとした群が、いわば過剰反応しているのだ。

「XOに報告しましょう」

硬い声で、ヴァルヴァラ。

渚はぐつと拳を握り締めた。報告が行けば、出される結論はひとつしかなかった。Jコロニーの爆撃だ。千を超えるDDの襲来を防ぐためならば、国王陛下の裁可もすんなりと降りるだろう。そしてもちろん、その攻撃対象にはジャンヌも含まれる。

すべては渚が引き起こしたことであった。オークリヨアムとして、そしてCOとして、この世界に自分の人生を吸い取られないようにするための悪あがき。BVaの殲滅など考えなければ、ジャンヌを始めこの善良なBVbたちはその生を全うすることができたのだ。それを、渚が奪ってしまった。私欲の為に。

「自分を責めるな、渚」

渚の様子に気付いたエリックが、言った。

「君はプランを出した。だが、作戦を行ったのはRQAFだ。責めを負うべきは作戦を遂行したRQAF全体だ。責任を感じるのは構

わないが、責めを負うのは正しくないことだ」

「飲め」

ホルヘが、バーボンを差し出す。いつの間にか、量は半分に残っていた。

渚は瓶を受け取って、ちよつとだけ喉に流し込んだ。薰り高い液体が、喉を焼く。

「詳細は、国王陛下にご報告いたしました」

クロヒヨウ……ゴエンザレドが、静かに言った。

「陛下は作戦が失敗に終わったことを、大変悲しんでおられました。しかし、この作戦を裁可したこと自体を悔やんではない、とも申されました」

ゴエンザレドがいったん言葉を切り、黄色い眼で居並ぶRQAFの主要メンバーを見渡した。

「……国王陛下のお言葉を、そのままお伝えします。『RQAFの諸兄の勇気ある行動に、敬意を表する。キャリアス臣民をDDの脅威から救わんとした今回の作戦は、結果的に功を奏さなかったが、余は臣民と共にその努力を深く謝すものである』……以上です」

会議室の末席に座った渚は、ゴエンザレドの言葉をぼんやりと聞いている。すでに、Jコロニー爆撃計画は認可され、明日の決行を待つばかりとなっていた。

千八百のBVbに対する、死刑執行令状にサインがなされたのだ。実験で抹殺されたBVaが推定で三百。DDの幼生は……五十といるところか。妊娠していたBVaもいたろう。そして、おそらくJコロニーの個体のうち八割近くが妊娠していると推定される。合計三千六百以上。

これだけの生命を犠牲にしてしまったのだ。自分の都合と幸せの為に。

所詮昆虫。所詮単為生殖のクローン生物もどき。所詮敵。所詮低知能。

言い訳はいくらでもできる。だが、失われた生命は生命だ。意味もなく、無駄に失われた生命。一方的殺戮。

「渚殿！」

名を呼ばれていたことに気づき、渚ははっと顔を上げた。

クロヒヨウが、じっと見つめていた。

「な、何でしょう、ええと、ゴエンザレド殿」

渚は慌てて記憶の隅からクロヒヨウの名前を引っ張り出して応えた。

「本作戦の原案を提出したのは、あなたですね」

「はい、そうです」

「国王陛下が、お会いしたいと申されました。もしよろしければ、わたくしと共に王宮にいらしていただきたいのですが……ご都合はいかがでしょうか？」

……国王が、何の用だろうか？

「はい、伺います」

「そうとう気に病んでおられるようだな、渚殿」

国王が、言う。

「はあ。やはり、多くの命を犠牲にしたにもかかわらず、何の成果も上げることができませんでしたから」

椅子に堅苦しく腰を掛けた渚は、うつむき加減でそう応じた。

「いや、今度のことで、余は渚殿がRQAFを率いるにふさわしい方だと確信しましたぞ。ぜひ、重光殿のあとを継いで、オークリヨアムとなっていたきたい」

重々しく、国王。

「しかし……」

「知恵と勇気と他者を思いやる心。この三つが備わった者こそ、人の上に立つにふさわしい者です。そなたには、それがある」

国王が、濡れた瞳で渚をじっと見つめる。

「今回は結果的に失敗に終わったが、もしまたこの戦いを終わらせ

る知恵が浮かんだら、それを積極的に推し進めていただきたい。余は、あくまでそなたの味方ですぞ」

「コロニーおよびその補助コロニー爆撃作戦『オペレーション・フィッシュネット』は滞りなく行われた。生き延びたＢＶは皆無だった。その日、渚は終日宿舎で過ごした。会話した相手は、ユリだけだった。

「まあ、たしかにあんたの株は下落してるな」

相変わらず瓶ビールを飲みながら、ホルヘが言う。

バーのテーブルには、渚の他にエリック、ホルヘ、ヴァルヴァラ、それにプラサンの合計五人が集っていた。表向きは、ホルヘが発起人の『落ち込んでいる渚を励ますパーティ』だったが……単にエリックとホルヘがおおっぴらに飲む口実に使われたと言う側面も否定できない。

「株の下落？」

「本当のところ、次期ＣＯにはＸＯが昇格すべきと考えていた連中が多かったんだ。特に、パイロットの間ではね」

ホルヘが、瓶を手の中で転がす。

「整備や管理部門の上級幹部は、その半数近くが古株の日本人とドイツ人だし、下っ端の連中もＣＯのことを気に入っている。だが、現在のパイロットに、日本人はひとりしかないし、ドイツ人も三人しかない。そろそろ、ＲＱＡＦのトップに日本人以外が就任すべきとの意見が強まっていたことは確かだ。そこへ、あんたが現われた」

にやりと微笑んだホルヘが、渚に向けてビール瓶を振ってみせる。「一気に流れが変わったね。あんたみたいな可愛い子なら、指揮されてみたいって奴が続出さ。まあ、大半が若い連中だからな。無理もない」

「男性パイロットって結構単純な人種なのよね」

珍しくブランドーのソーダ割りを舐めながら、ヴァルヴァラ。

「ところが、今回の一件であたしの株は暴落した。まあ、仕方ないわね。完全なる失敗だったもの」

渚は肩をすくめた。

藪蛇であつた。オークリヨアム就任を回避しようとしてかえつてRQAF内での立場を悪化させてしまったのだ。

「まあ、そう落ち込むことはない。何か別の方法があるだろうし…

…」

エリックが言う。

「別の方法ねえ……」

渚はジンジャー・エールの入ったグラスを握って思案した。

「……基本的に立ち返る必要があるのかもね」

ヴァルヴァラが、ゆっくりと言う。

「案外肝心なことを見落としているのかも知れんぞ。よし、『魔のカーブ』の話をしてやろう」

ホルヘが、嬉しそうに両手をこすり合わせる。

「『魔のカーブ』?」

「マテオ叔父さんから聞いた話だ。ある地方都市の郊外に、自損事故が多発するカーブがあつた。憂慮した市長は、部下にカーブの改修を命じて、曲率を緩やかなものに変えさせた。だが、事故は収まらなかった」

ホルヘが言葉を切つて、一口ビールを飲んだ。

「市長は工夫を重ねた。カーブの手前に警告の標識を立て、ガードレールを蛍光色に塗り替え、制限速度を変更し、警察車両を常駐させることまでやった。だが、事故は続く。毎週何人も男が、病院送りとなった」

「オカルト落ちじゃないでしょうね」

ヴァルヴァラが、揶揄する。

「まさか。で、策に窮した市長は、市民対し交通安全のスローガンを募集した。多くの応募の中から選ばれたのは、ある小学生が考え

ついたスローガンだった。市長はその言葉を書いた巨大な横断幕を、現場に張ることにした。そうしたら、事故はぴたりと止んだ。喜んだ市長は、小学生に自腹で賞金を与えた」

「ほう。なんてスローガンだったんだ？」

エリックが、訊く。ホルヘが、にやりと笑った。

「くだらないスローガンさ。鍵は横断幕にあったんだ。市長が一度でも現場に足を運べば、事故原因はすぐに判ったはずだ。横断幕を張ったせいで、その奥にあるトッププレスの美女を描いたビール会社の看板が見えなくなったただけの話だ」

からからと笑うホルヘ。

「……ブラジル人って、幸せな人種ね」

惘然として、ヴァルヴァラ。

「教訓話としては、面白いですね」

微笑みながら、プラサーンが言う。

「制限された情報だけでは、真実は見えてこないということね」
渚はジンジャー・エールをすすった。そう。ヴォーゲオスについての知識は、まだ充分とは言えない。DDの正体すら、正確には判明していないのだ。このような段階で、B V a 殲滅計画を進めるのは、やはり無謀だったのだろう。

とにかく材料を集めねばならない。

翌日、定期連絡便に便乗しオームラA Bに向かった渚は、ドクター・ゲラの診察室を訪れた。応対に出てきた助手のウサギ……ジャスレインに依頼し、ドクター・アルベリンのヴォーゲオスに関する研究資料をすべて借り出す。次いでベース内のスウェーデン人二人に手伝ってもらい、生態その他に関する部分を抜き出して読んでもらった。だが、注目すべき記述はなかった。

夕食を採った渚は、事務方に出向いた。管理責任者の日本人から、R Q A F 設立当初からの出撃や偵察に関する文書記録の写しを借り出す。

宿舎に戻った渚は、メモをとりつつ出撃の記録を精査した。初期の記述は、かなり曖昧かつ断片的だった。ほんのメモ程度の戦闘記録がほとんどだ。幸い、大半が日本語……よく戦記ものに出てくるような、漢字とカタカナで書かれたもの……なので、読解に支障はなかった。時代が下るにつれ、その体裁はより詳細かつ整ったものになってゆく。やがて、手書きが英語でのタイプ表記になり、それに日本語とドイツ語が併記されるようになった。それが、七十年代半ばに英語オンリーとなる。渚はくたびれた眼をこすりながら手元のメモに視線を落とした。ほぼ白紙だった。……参考になりそうな事柄は、ほとんど見いだせていない。

偵察記録を開く。こちらは出撃記録に比べ、はるかに量が少なかった。地図上に、コロニーの位置が描き込まれ、数その他に関するデータが添えてある。

……おや。

渚はもつとも古い日付……四十四年一月七日とある……の地図と、最新のものを見比べて首を傾げた。すべて手書きの上、文字通り朱筆でコロニーの位置を描き込んだ黄ばんだ荒い紙と、淡い多色刷りで印刷された上にフェルトペンで描き込まれた紙……。二枚の地図に相似が見られたように思えたのだ。

渚はじっくりと両者を見比べた。コロニーの位置は異なっているし、その総数も同じではないが、どう見ても両者は似ている。しばらく考えてから、ふと思いついた渚は大きなコロニーの数だけを数えてみた。前者が四十八。後者は……四十八。渚は偵察記録から三枚をランダムに引っ張り出した。大きなコロニーの数だけ数える。

四十八。四十八。四十……八。

群の数は変わっていないのだ。

まあ、単為生殖をしているのだから、それは意外ではないだろう。最初になんらかの形で大陸からここキャリエス島に渡ってきた個体が四十八、ないしは最初に生まれた個体が四十八であれば、それをもとに各個体が単為生殖を繰り返して独自の群を作れば、いつまで

たつても群の数は増減することはない。

……いや、あたしが一個減らしちゃったんだっけ。

渚は腕組みした。しかしそう考えると、キャリエス島に渡ってきたヴォーゲオスがなぜ四十八もの群を作ることができたのか疑問が残る。単なるBVが、新たにひとつの群を作れるのならば、どこでも群の数を増やせるはずである。となると、キャリエス島に渡ってきたのはBVではない、という結論になる。DDでもないことは確かである。あれだけDDを生み出しているにも関わらず、群は現実に増えていないのだから。

……もう一種類いるのか。

そう考えるのが妥当だろう。BVでもDDでもない、群の元となる種類。おそらくは、DDが生み出すであろう種類。彼らがなんらかの形でキャリエス島に渡ってきて住み付き、四十八の群を作り上げた。

DDを捕獲して、飼育できればあるいは謎は解けるかも知れない。だが、どうやって？

渚は思案したが、DD飼育案は放棄せざるを得なかった。どう考えても、不可能だ。

ならば……大陸か。

大陸ではヴォーゲオスの大繁殖は見られない。しかし、群の元となる種類……仮にXと名付けるとすると……Xが大陸から渡ってきたことはほぼ確実とみていいだろう。Xが生み出されているにも関わらず、なぜ大陸がヴォーゲオスだけではないのか。いや、ひよっとするとすでに全土がヴォーゲオスに占拠されているのだろうか。

渚は地図を思い浮かべた。大陸までは……たしか千五百キロ程度。ちと遠いが、足の長いジェット戦闘機なら、余裕で往復できる距離だ。

偵察の必要がある。

12 失敗（後書き）

第十二話をお届けします。

13 大陸探検

「まあ……命令なら、行きますが」

長距離偵察機として白羽の矢が立ったのは、マイラのA-7だった。航続距離の長さはRQAF機の中でも随一。おまけにマイラは元アメリカ海軍エビエーターである。洋上飛行は慣れている。

「ドロップタンクの買い付けは終わっている。ステーション2に偵察ポッド搭載で、Fベースから片道八百五十マイル。問題はないだろう」

XOが、言う。

二日後、マイラのA-7は実に四時間を越えるミッションを終え、無事にFベースに帰還した。渚はじりじりしながら偵察写真が現像されるのを待った。

「やつぱり……」

拡大鏡を手に、渚は写真を精査した。なるべく広い面積を撮影するために高高度から写したので、ヴォーゲオスのコロニーは、大きなものでも五十円硬貨の穴くらいしかない。だが、見落とすほど小さいというわけではなく、渚はヴァルヴアラとエリック、プラサーン、それにホルヘに手伝わしてもらい、すべての写真からコロニーの位置を特定した。

「五万平方マイルほど探して、わずかに十八個。しかも、このあたりに集中している」

渚は、新たに描かれた大陸南東部の地図の一点を指差した。海岸に程近い、南端から二百キロほどの地点だ。

「南部に森林地帯があるところなんて、キャリエス島によく似てるな」

地図を覗き込みながら、エリック。

「氷河期があつたんじゃないかしら」

ヴァルヴアラが、言う。

「氷河期？」

「キヤリエス島って、意外と植生が単調でしょ？ 南部の森林地帯なんて、一種類の樹がまるで植林したみたいに延々と続いている。北部の草原地帯も、同じ草が一面に生えている。アルプス以北のヨーロッパに似ているわ。ヨーロッパでは、氷河の南下と共に植物も南下したの。暖かい地を求めてね。だけど、ほとんどの植物はアルプスとピレネーを越えられなかった。そこで、寒さに弱い植物は全滅し、氷河期を耐え切った寒さに強い植物のみがのちに繁茂し、種類の少ない単調な植生を作ったわけ。おそらく、この辺りも同じような経緯をたどったんじゃないかしら。最南部に森林が集中しているのも、その名残だわ、きっと」

「さあ、どうする？」

写真をもてあそびながら、エリックが問う。

「こうなったら、大陸に行って調べるしかないだろう。な、お嬢ちゃん」

ホルヘがにやりと笑った。

「どうやって？ 八百五十マイルもあるのよ。ヘリコプターで行くとなると空中給油が必要だわ」

ヴァルヴァラが、言う。

「シエルパかなにかで着陸できそうなところはなかったのか？」

ホルヘが、隅のほうで缶コーク片手に休憩しているマイラに問うた。

「平地は多かったけど、たぶん植生が密すぎて危険だわ。もし着陸に失敗したら、生きては帰れないでしょうね。それに、シエルパじや航続距離不足だわ」

「ふん。往復となるとC-130クラスが必要か。それでも、かなりの冒険だな」

エリックが、顎を掻く。

「船で行くか。その方がはるかに安全だ」

ホルヘが提案する。

「安全だけど、新たに船員を雇わないと。機密保持上、色々と問題が生じるわね」

ヴァルヴァラが、考え込む。

「あの……提案があるんですが」

今まで黙ってみなものやり取りを見ていたブラサーンが、控えめに割って入った。

「なんだ？ いい案があるんなら、遠慮しないで言ってくれ」

ホルヘが、促す。

「CL-215があれば、問題は解決すると思うんですが」

「あ、あつたまいい！」

渚は思わず手を打った。飛行艇ならば航続距離も長いし、滑走路のない場所でも十分な長さの水面さえあれば離着陸できる。

「たしかにいいアイデアだが……215にしろ415にしろ、簡単には手に入らないだろう」

エリックが、眉根を寄せる。

「日本にも、できのいい飛行艇があつただろう？」

ホルヘが、渚に振る。

「……絶対手に入らないと思う」

渚は首を振った。ホルヘが言っているのはUS-1やUS-2のことだろうが、すべてが自衛隊に納入されており、民間機として売り出されている機体はない。

「そういえば、アルバトロスを売りに出してた奴がいたっけ」

唐突に、マイラが言った。

「アルバトロスって……A-40か？」

「まさか。グラマンのよ。G64」

ホルヘの問いに、マイラが笑う。

A-40はロシア海軍の対潜哨戒／救難ジェット飛行艇である。

グラマンG64アルバトロスは軍用名HU-16として知られる救難飛行艇で、海上自衛隊でも長く使われた名機である。ただし初飛行は戦後すぐのロートル機だ。

「飛べるのか？」

疑わしげに、エリック。

「たぶん」

珍しく自信なさげに、マイラ。

渚によってC Oに提出された『大陸探査計画』は、予算の無駄遣いであるとして予想通りR Q A Fパイロットの過半の反発を招いた。そこへ乗り出したのは、国王だった。大陸探査をキャリエス王国のプロジェクトとして推し進めることを発表し、R Q A Fにその『助力』を要請する。R Q A Fとしては、スポンサーの意向に逆らうわけには行かない。反対勢力の声は行き場を失い、渚の『大陸探査計画』は、キャリエス王国の勅命プロジェクトの一部として具体化した。

C Oの指示を受けた管理部の手によってアルバトロス飛行艇が購入され、徹底した整備が施された。機体の状態は、思ったよりも良好だった。水上飛行機の経験が豊富なアメリカ南部出身のニックと言うパイロットがグループ3から呼ばれ、機長に任命される。

やがて準備を整えたアルバトロスは、装備を満載してF ベースを飛び立った。メンバーは、機長のニックと、副操縦士に志願したサラップを除けば、J コロニー潜入の時の面子と一緒にだった。隊長格のヴァルヴァラ、渚、エリック、ホルヘ、通信担当のスンファ、それに、護衛の四人。ただし、今回は知的哺乳類が加わっていた。国王名代のクロヒョウ、ゴエンザレドだ。表向きキャリエス王国のプロジェクトなので、ゴエンザレドが探検隊長を公的に名乗ることになる。

「問題が発生した」

そうヴァルヴァラが渚とエリックに声を掛けてきたのは、アルバトロスが飛び立ってから三十分ほどが経過したあたりであった。

ヴァルヴァラが、二人を機体後部へと導く。ネットで押さえられた雑多な物資の上に、ヴァルヴァラの私物を入れたものらしい大き

なバッグが置いてあった。それが、ごそごそとうごめいている。

「スィレブローを連れて来ちまったのか？」

すぐに察したエリックが、問う。

「それだけならよかったんだけど……」

ヴァルヴァラが、ファスナーをそつとあけた。

三匹のミャーシェが、いつせいに顔を覗かせた。

「あれま」

間違いない。ユリと、サビーヌと、スィレブローだった。それぞれの飼い主を見上げ、嬉しそうに首を振る。

「面目ない。閉めるときに気付かなかったのよ」

ヴァルヴァラが、謝る。

「いまさら引き返すわけにも行かないでしょう。それに、悪いのはそれぞれの飼い主だわ」

渚はユリをバッグから引つ張り出した。

「まあ、むこうにもこいつらの食い物くらいはあるだろう。問題ない」

エリックも、サビーヌを肩に載せる。

七時間あまりをかけて海原を乗り切ったアルバトロスは、無事に大陸南部に到達した。偵察写真上で選定した小さな入り江上空を低空飛行し、着水に支障がないことを調べる。得心したヴァルヴァラが、ニツクに着水を指示した。

すぐにゴムボートが膨らまされ、小さな船外機が取り付けられた。四名の護衛が乗り込み、海岸を指す。浅瀬にたどり着いたボートから飛び降りた三人が、G3アサルトライフルを手に散った。残る一人が、ボートを戻す。渚たちは、機内の機材や物資を次々とボートに積み込んだ。数往復で、すべての貨物と上陸班を運び終える。ボートが砂浜に引き上げられると、アルバトロスが向きを変えた。古臭いが信頼性の高いピストンエンジンが唸り、離陸滑走を開始する。いったんFベースへと戻り、主に予備燃料を積み込んで明日再

度飛来するのだ。

一同はゴムボートを波風にさらわれない位置に運ぶと、やや内陸に入った地点にベースキャンプを設営した。距離的にFベースに最も近いここを拠点に、大陸の探索を行うことになる。

「やはり寒いわね。季節的には、秋なんだと思う」

用意してきたウィンドブレーカーを羽織りながら、ヴァルヴァラが言った。周囲に生えている木々は針葉樹らしく、深緑の葉を茂らせてはいるが、まばらに生えているもつと低い樹は黄色い葉をつけている。ナスを思わせる紫色の実をぶら下げている樹も、何本か見えた。アケビのような実をつけた蔓植物をまわりつかせている樹もある。

「見てみる、渚」

エリックが、渚の肘をつつく。

三匹のミヤーシェが、鶏卵ほどもある何かの卵をひとつずつ抱えてちよこちよこと戻ってきつつあった。白地に薄茶色の横縞が入った、妙な卵だ。

「見せてもらんなさい」

ヴァルヴァラがしゃがみ、スイレブローから卵を取り上げる。

「キヤリエス島にはなかったわね、こんなの。殻が薄いから、昆虫の卵だろうけど……。まあ、彼らが食べる気である以上、毒ではないでしょう。いいわ、お食べ」

卵を返してもらったスイレブローが、さっそく前脚で殻を割り、かぶりつく。渚とエリックも、許可を与えた。三匹は、夢中で卵を食べつづけた。

「少なくとも、こいつらの食糧問題を心配する必要はないわけだ」
エリックが、言う。

翌日、予定通りアルバトロスが飛来した。機内に積み込んだゴムの燃料袋を下ろし、身軽になったアルバトロスに、渚、エリック、ヴァルヴァラ、ホルへ、それに護衛の二人が乗り込む。離陸したア

ルバトロスは、海岸線沿いに北上した。目指すは、ヴォーゲオスのコロニーである。いよいよ、本格的調査の開始だ。

空中からコロニーの位置を再確認したアルバトロスは、最寄りの海岸付近に着水した。手漕ぎゴムボートが二往復半して、六人と装備品を海岸へと運ぶ。荷降ろしが終了すると、アルバトロスはＦベースへと帰っていった。次の飛行予定は三日後で、ベースキャンプに燃料と消耗品を運んだあと、この場所へ回収に現われる手筈だ。それまでは、一日一回正午にＦベースより飛来するマイラのＡ－７が、唯一のキャリアエス島とのつながりとなる。

「さて、行くか」

ホルヘがＧ３を手にも、先頭に立つ。渚もＴＭＰのスリングを首に回し、荷物を背負った。空気はひんやりとしている。内陸に三十分ほど歩むと、前方にコロニーが現われた。ヴァルヴアラが、手書きの地図を参照してコースを決める。やがて一同は、ＢＶｂのものと思われるコロニーの外縁にたどり着いた。

何匹かのＢＶｂはすでに人間の接近に気付いていた。一匹が、好奇心を持ったのか近付いてくる。護衛の二人が、Ｇ３の狙いをつけた。ヴァルヴアラが前に出て、絶妙のタイミングでグレネードを投げる。

命中。

「わたしの言葉が判る？」

ヴァルヴアラが語り掛ける。

ＢＶｂが軋った。

幸いなことに、大陸でもＢＶｂは友好的であった。

ヴァルヴアラと渚は手分けしてコロニー内のＢＶｂの話聞いた。ここでも、ＢＶｂとＢＶａの仲は悪かった。ＤＤを生むのはＢＶａだけ。ＤＤが何のために生まれ出るかは知らない。

だが……。

「興味深い話を聞いたわ」

食事休憩を兼ねた報告の際に、ヴァルヴアラが勢い込んで言った。

「このB V bは、いずれ全滅すると覚悟しているの」

「寒さで死んでしまうんでしょ？ あたしも聞いたわ」

ホルヘが開けてくれたショートパスタの缶詰にフォークを突っ込みながら、渚は言った。

「じゃあ、本当らしいわね」

ヴァルヴアラが、うなずく。

「B Vたちは、冬に堪えられないと言うわけか。このD Dもキャリエス島と同じように南下するの？」

「おそらくね」

エリックの質問に、ヴァルヴアラが簡潔に答える。

「じゃあ、D Dは生き延びるために暖かい南を目指すわけか」

パンを千切りながら、ホルヘが言う。

「もうひとつ、重要なことを聞いたわ。羽根のあるB Vについてヴァルヴアラが、続ける。

「何だって？ それって、D Dのことじゃないのか？」

エリックが、聞き返す。

「いいえ。D Dじゃないわ。あくまで、羽根のあるB Vよ。あたしが聞いたB V bも言ってたわ」

渚はそう断言した。

「彼らに言わせると、この地のB Vが寒さで全滅しても、また暖かくなれば羽根のあるB Vが飛んできて、コロニーを復活させてくれるそうよ。あたしが調べた百年前の探検隊の記録に、羽根のあるB Vに関する目撃談が載っているの。読んだ時にはびっくりD Dの誤認だと思ったけど……どうやら正確な情報だったようね」

「コロニーの復活だって？ 伝説とかそんなんじゃないだろうな」
疑わしげに、ホルヘ。

「生物学的には辻褄が合ってるわ。南を目指すD Dが、そこで羽根のあるB Vを生み育てる。冬季を乗り切るために、ある種の必須移住性生活環を作り上げているのよ。……似たような事例は、地球の昆虫にも見られるわ」

ヴァルヴァラが、分析する。

「おそらく羽根のあるBV……仮に、BVcと名付けましょうか」

「おいおい。BVaだのbだのcだの、ややこしすぎるぞ」

ヴァルヴァラの命名に、ホルヘが突っ込む。

「じゃ、BVwにしましょう。推測だけど、BVwは有性生殖で生まれた個体じゃないかしら。あるいは、BVwには雄雌両方いて、コロニーに戻ってきてから交尾し、生まれた仔が単為生殖で増える

……」

「あるいは、南で交尾して、胚子を宿してから雌だけ戻ってくるのかも」

渚はそう指摘した。

「その可能性も否定できないわね」

「ともかく、鍵は南にあるわけだ。そこでDDもが何をやっているかを突き止める必要がある」

エリックが、言う。

「やれやれ。DDのベッドシーンを覗くわけか。気乗りしないねえ」
ホルヘが肩をすくめる。

「ところで、DDの出現頻度なんかについては判ったのか？」

エリックが、ヴァルヴァラに訊く。

「ひとシーズンに一回だけだそうよ。寒くなる前……つまり、秋に一回大量に生み出されるだけ。キヤリエスに移住した群は、おそらく環境の変化によってサイクルを狂わされて、一年を通してDDを定期的に生み出すようになってしまったんじゃないかしら」

「あるいは、気温が高すぎて正常に反応できないのかも知れんな」

エリックが、唸る。

「……てことは、そろそろこの辺りのDDも大発生が近いってことか？」

ホルヘが、そわそわとあたりを見渡す。

「BVbによれば、あと一週間程度で飛び立つらしいわ」

落ち着いて、ヴァルヴァラ。

「……まずいな。のんびりしていると、DDの大発生に巻き込まれる恐れがある」

ミネラルウォーターのボトルを開けながら、エリック。

「ところで、素朴な疑問なんだが」

ホルヘが、芝居がかって拳手する。

「なんですか、セニョール・ホルヘ」

ヴァルヴァラが、これまた芝居がかってホルヘを指差す。

「なんで、BV自体が南にコロニーを作らないんだ？ そうすれば、寒さで全滅しないで済むだろうに」

「おそらくは、昔からの習慣なのよ」

「習慣で……全滅するのか？」

「生物って、間尺に合わないことをするものなのよ。渡り鳥を見てごらんなさい。一年中暖かな場所にいれば苦労して何千キロも往復しなくて済むのに、わざわざ寒冷地へと帰ってゆくわ。産卵のためにだけ、激流を遡る鮭。わざわざ食べるものが得られない奥地で卵を産み、子育てするペンギンたち。それに、食糧の問題も大きいと思うの。南部には、彼らの主食たる草が少ないんじゃないかしら」

「前にヴァーリヤが氷河期の話をしたじゃない。それが原因じゃないかしら」

渚は考えつつ言った。

「全くの仮説だけど、昔のヴォーゲオスはごく短距離の移住だけで生活環を保ってたと考えてもいいんじゃないかしら。そこへ氷河期が来て、有性生殖に必要な森がほとんど南下していつてしまった。DDの飛行能力の向上も、ひよっとするとそれで説明がつくかもしれない」

「ちよつと強引ね。でも筋は通ってるわ」

「しかし……」

言いかけたエリックが、口をつぐんだ。

護衛の二人が、血相を変えて駆け寄ってくる。G3の銃口は、上を向いていた。

渚は空を見上げた。

「DDだ！」

ホルへの声。

おびただしい数のDDが、迫りつつあった。

渚は反射的にTMPをつかみ上げ、コッキングハンドルを引いた。ヴァルヴァラは、BVbに必死に話し掛け始めた。はっと気付いた渚も、グエを付けたBVbのところへ駆け寄った。とても数挺の銃とグレネードランチャーで追い払える数のDDではない。BVbの庇護を受けない限り、全滅は必至だ。

渚が話し掛けたBVbは、即座に保護を承諾してくれた。だが、彼女いわく、あのDDを危険視する必要はないという。

『南。飛ぶ』

同じ単語を繰り返して軋る。

ほどなく、コロニー上空にDD群が差し掛かった。わーんという圧倒されるような羽音が、辺りを包み込む。巨大な影が、次々と地面を駆け抜けてゆく。

片膝をついた渚はTMPの銃口を空に向けて、DDどもが飛びすぎてゆくのを見つめた。……北爆に向かう米軍機を見つめる北ベトナム兵士の心境、といったら言いすぎだろうか。他の面々も、銃口を空に向けたまま微動だにしない。

やがて、DD群は去っていった。

「ふう。死ぬかと思った」

ホルヘが言つて、手を私物袋に突っ込んだ。バーボンのボトルをつかみ出し、ぐいっと呷る。渚も、冷たい風が吹いているのにもかかわらず額に吹き出た汗をぬぐった。

「参ったわね。スンファたちに警告してやる方法がないわ」

苛立たしげに、ヴァルヴァラ。持参したラジオは短距離用のFM無線機だけである。

「DD大発生は一週間後じゃなかったのか？」

ホルヘが訊く。

「このコロニーではね。たぶん群によって、若干のずれはあるのよ」
「ともかく、明日の昼にはA-7が来る。アルバトロスを呼んでもらって、いったん撤収しよう。DD出現のシーズンが終わってからまた来ればいい。南部の森を調べれば、羽根のあるBV……BVWの秘密も判るだろう」

エリックが言う。全員が、賛同した。

翌日正午に、予定通りマイラのA-7が飛来した。ドロップタンク四本の長距離飛行仕様である。

ヴァルヴァラがPRC-90でDDが南部へと向かったことを知らせる。すぐさま、マイラが機首を南へ向けた。渚らは内心の苛立ちを押し隠しながら、マイラから通信が入るのを待った。やがて再びA-7が飛来した。

「ベースキャンプと通信ができない。低空で目視観測した限りでは、ベースキャンプは放棄された模様」

PRC-90から、マイラの声が聞こえる。

ホルヘが憤み深く、グエを外してから悪態をつく。渚には、『フイーリョダプッタ』と聞こえた。

「マイラ、生存者のいる可能性は？」

硬い声で、ヴァルヴァラが訊く。

「不明。航過しただけでは、判らなかった。しかし、フレアその他救助を求める信号はなかった」

ラジオを通してやや歪んだマイラの英語が、一同を打つ。

「ともかく、アルバトロスを寄越して。我々はここから撤収するわ。そのあとでベースキャンプを搜索、生存者を収容する予定」

ヴァルヴァラが、ちらりと皆の方を見てから、告げる。

「了解。しかし、アルバトロス到着は明日の午後になると思う」

「……仕方ないわね」

すでに正午から一時間半近く経っている。アルバトロスの巡航速

度はわずかに百三十ノット。これからマイラがキャリエス島付近まで戻り、ラジオでアルバトロスの緊急離陸を要請したとしても、大陸到着は確実に日没後になる。リーダー高度計すらついていない旧式機で夜間着水など、正気の沙汰ではない。明日の早朝離陸するとなれば、大陸到着は早くても昼過ぎだろう。

「明日正午に出発します。いいわね」
ヴァルヴァラが、一同を見渡した。

……また死者を出してしまった。

スリーピングマットにぺたんと座り込んだ渚は、深いため息をついた。国王勅命の探検とはいえ、今回も発起人は渚である。

すでに周囲はとつぷりと暮れていた。夜空には、合計四つの月がそれぞれ微妙に異なる色合いの光を放っている。反射能が違うのだろうか。

「渚。しっかりしろ」

エリックが、渚の肩を揺さぶった。

「後悔はあとでもできる。今は、状況を確認して、もし生存者がいれば早急に収容しなければならん。人手は少ないんだ。君だって、貴重な戦力なんだからな。ぼんやりしていられては、困る」

「……そうね」

「ほら。これでも飲め」

ホルヘが、バーボンのボトルを押し付けてくる。

「それはちよつと……」

「じゃあ、これだ」

今度押し付けられたのは、ジンジャー・エールの缶だった。渚はありがたくいただいた。生ぬるい液体が、喉を流れ下る。

「連中、まだ全滅と決まったわけじゃないしな」

エリックが、言う。だが、スンファは通信の専門家だし、残る二人……グレッグとレフもそれぞれイギリス陸軍と『ソビエト』陸軍で軍務経験のあるプロである。たとえ通信機器を失ったとしても、

A-7が飛来したことに気付けば、何らかの通信を試みようとは
はずだ。それが一切見られなかったということは……やはり死んで
いる可能性は高いと言わざるを得ない。ゴエンザレドは、逃げ足の
速さを活かして生き延びたかも知れない。ヒヨウは猫科の大型獣の
なかでも、もつとも適応力に富んだ種類だと以前に聞いたことがあ
る。

「……稚拙すぎたわ、計画が」

独り言のように、渚は言った。

「急ぐ必要はなかったのよ。無理してアルバトロスで来ることはな
かった。船でよかったんだわ。十分な火力さえあれば、DDの襲撃
くらい防げたのに」

「いまさら言っても始まらない。反省するのは、それが活かされる時
でいい」

バーボンを呟ったホルヘが、自分に言い聞かせるように言った。

「ボールを相手に奪われたら、反省する前に足を出せ、走れ。相手
に喰らいついて、奪い返せ。それが無理なら、パスコースを消しに
いけ。それも無理だったら、せめてシュートを打たせるな。反省は、
ハーフタイムにしろ……。そんなことを、ペドロ叔父さんに言われ
たよ。昔な」

「……ブラジル人らしいな」

エリックが、笑う。

「というわけだ。あんたは、たしかにミスをした。だが、そのミス
が取り返しのつくものになるかならないかは、今後のあんた次第な
んだ。判るな」

ホルヘが重々しく言いつつ、渚のジンジャー・エールの缶に勝手に
バーボンを注ぎ入れる。

13 大陸探検（後書き）

第十三話をお届けします。用語解説 C-130/アメリカ製の四発ターボプロップ戦術輸送機 CL-215/カナダ製の双発レシプロ飛行艇。CL-415はその発展型で、エンジンをターボプロップに換装したもの

14 第四のBV

翌日昼前に、一同はコロニーを後にして、海岸へと向かった。

アルバトロスが着水したのは、正午から一時間ほど経過した頃だった。すぐにゴムボートを往復させ、一同は機内へと乗り込んだ。

「助っ人を連れてきた。ショーレンラムと、レディンホルだ」

サラップが、二匹の知的哺乳類を紹介する。茶色い毛並みのヒグマと、黄ばんだ白毛のホッキョクグマのペアだった。……両方とも、地球の実物よりも小柄で、せいぜいツキノワグマ程度の大きさしかない。

「火器も強化した」

サラップが指す先には、ごついりボルビング弾倉を備えたグレネードランチャー二挺と、コンパクトなマシンガン三挺があった。ミルコールMGLと、おなじみのミニミだ。

「離水するぞ。座席に着け」

機長のニックが怒鳴った。

一時間と掛からずに、アルバトロスはベースキャンプ上空に達した。低空で観察した限りにおいては、DDの姿はなかった。ラジオで呼び出しても、生存者の反応はない。

着水したアルバトロスから、機長のニックと副操縦士のサラップを除く全員が、ゴムボートで海岸へと向かった。二匹のクマは重武装だった。ミルコールMGLを抱えた上に、首からスリングでFNC突撃銃を吊っている。腰にまわしたベルト……長さは三メートルはあろうか……には、四十ミリグレネードが詰まった袋やFNのライフルグレネード、NATO標準の5.56ミリ弾三十発箱弾倉が入った弾薬パウチ、破碎手榴弾などを鈴なりに下げている。ヴァルヴアラとエリックとホルヘも、得物をミニミに持ち替えた。余ったHK79グレネードランチャー付きG3自動小銃は、渚が持つことになった。凄まじく重い。七キロ近くあるのではないか。

一行はヒグマを先頭に、ホッキョクグマを殿にしてベースキャンプを目指した。DDに遭遇することなく、目的の場所に到着する。ベースキャンプは、恐れていた通りのありさまだった。

いたるところに、DDの死体があった。グレネードを撃ち込まれて胴体を引き裂かれたDD。銃弾で穴だらけとなったDD。流れ出した体液が、地面を暗褐色に変色させている。テントは引き裂かれ、食糧その他の装備品が散乱していた。短波無線機はDDの前肢の一撃を喰らったのか、真つ二つに割られていた。

ホルヘが、落ちていた薬莢のひとつを拾い上げて、臭いを嗅いだ。「発砲したのは昨日だな」

「判るの？」

疑わしげに、ヴァルヴァラ。

護衛の二人……マットとアフマド、それにクマ二頭を周辺警戒に立たせて、残る渚らはベースキャンプを詳細に調べた。ほどなく、死体が見つかった。砂色の短い髪……元イギリス陸軍のグレッグだ。頭部にDDの打撃を喰らったのだろう、頸部がありえない角度で捻じ曲がっていた。左大腿部も茶色く変色した血に染まり、折れて尖った骨が、皮膚を突き破って露出している。

渚は歯を食いしばりながら、搜索を続けた。幸い、それ以上の死体は見つからなかった。

「銃の数が足りない。スンプアとレフ、それにゴエンザレドは、襲われて反撃し、森に逃げ込んだんだろう」

エリックが、SEM-52SL/FM無線機のスイッチを入れ、コールする。

反応はなかった。

「二手に分かれて探しましょう。わたし、渚、マット、ショーレンラムで西側。エリック、ホルヘ、アフマド、レディンホルで東側。

……三時間後にここに集合。正時に相互連絡。いいわね」
ヴァルヴァラが命ずる。

元アメリカ陸軍軽歩兵だというマットを先頭に、渚とヴァルヴァラ、そしてヒグマのショールンラムは行方不明の二人と一頭を捜すために森へと分け入った。時折SEM-52のスイッチを入れ、コールする。だが、反応はなかった。

樹木の間隔は開いていたが、丈の高い下生えが密生しているところが多く、森の中は見通しが悪かった。地面は厚く積もった腐敗しかけた落ち葉のせいで、妙に柔らかい。

不意に、マットが立ち止まった。チョコレート色の片手をすっと垂直に上げる。停止のハンドシグナルだと気付いた渚は、音を立てないようにして足を止めた。気配で、背後のヴァルヴァラとショールンラムも立ち止まったことを知る。

渚は外していた指を引き金にそつと当てた。DDか？

がさり、と前方の茂みが動いた。反射的にG3を肩付けにした渚だったが、狙いをつける前にその茂みはDDが潜むには小さすぎることに気付いた。

茂みから、五つの小さな頭が同時に飛び出した。

ミヤーシェたちだった。しかも、そのうち三匹は見覚えのある顔だ。

その三匹が、いつせいに茂みを飛び出した。凄まじい速さで、ユリが渚に、スイレブローがヴァルヴァラに駆け上る。残されたサビーヌは、ちよつとためらった後に、遠慮がちにマットの身体をよじ登り始めた。

「なんだよ。あんたらのペットか」

小声で、マット。

「ごめん。でも、無事でよかった」

渚は例によって頬をぺろと舐め出したユリの姿に眼を細めた。「どうやら、友達を見つけたようだね」

ヴァルヴァラが、茂みから顔だけ覗かせているミヤーシェを手招きする。だが、キャリエス島に住む同類と違い警戒心が多少強いらしく、二匹の大陸ミヤーシェは近付いては来なかった。

「先を急ごう」

ショーレンラムが、促した。

二時間探しても、行方不明の二人と一頭は見つからなかった。無線連絡によると、エリックのグループも、手がかりなしという。

小休止ののち、渚らは搜索を再開した。二十分ほど歩んだところで、いきなりユリが渚の肩から飛び降りた。マットとヴァルヴァラの肩からも、サビーヌとスイレブローが飛び降りる。

「なにやってんだ？ あんた方のペットは？」

脚を止めたマットが、後足立ちで鼻をひくつかせている三匹を見下ろしつつ、訊く。

「ちよつと緊張しているみたい。妙な臭いに、気付いたんだと思う」周囲に警戒の目を走らせながら、ヴァルヴァラが言う。

不意に、サビーヌが走り出した。俊敏な動きで、前方の茂みの中に飛び込む。一瞬遅れて、ユリとスイレブローも続いた。

「ユリ！ どこ行くの！」

思わず追いかけようとした渚の肩を、ショーレンラムが押さえる。

「待て。不用意に飛び出すな」

「そういうことだな。気を引き締めて行くぞ」

マットが言い、前進の合図をする。

一分足らずのちに、三匹は戻ってきた。ユリとスイレブローはそれぞれの飼い主の肩に駆け上がり、前方に向けて歯をむき出し、きいきいと啼き出す。サビーヌは、地面に後足立ちしたまま、同じように啼いている。

「……これは、前方に敵あり、と言ってるのかしら」

渚は興奮しているユリをなだめようと、腹を搔いてやった。

「ちよつと見てくる」

マットが言つて、前方の茂みを迂回し始めた。

三匹は相変わらずきいきいと啼いている。

と、背中を見せていたマットがいきなり発砲した。素早くセミオ

ートで二十発撃ち尽くし、さらにグレネードを水平に放つ。

渚はG3を構えて前進した。仁王立ちで弾倉交換を行うマットの傍らで、膝射の姿勢を取る。

木々がやや疎になった場所に、おびただしい数のDDが集っていた。すでに一匹はマットのグレネードに引き裂かれ、体液を撒き散らしながらのた打ち回っている。残るDD……三十匹というところか……は、危機を察知し前肢を振り上げながら集まりつつあった。

渚はランチャーの左側にあるプレス・トリガーを押して、四十三リグレネードを放った。密集していたDDの只中で、激しい爆発が起こる。飛び散った弾殻が、DDの外殻に突き刺さる。

ヴァルヴァラが、ミニミを横射した。一拍遅れて、ショールンラムがグレネードの連射を開始する。

渚はHK79のバレルを下方に開いて排莢すると、オレンジ色に塗られたグレネードを装填した。バレルを上方に向けて閉じ、その直後にあるコッキングハンドルを引く。狙いを付け、放つ。何度も練習したので、自分でも驚くほど滑らかに排莢から発射までをこなすことができた。

グレネードの猛射で、動くDDの数は極端に減った。だが、数匹は渚らの至近に迫りつつあった。十五メートルほどの近距離では、信管の安全装置が解除されないので、グレネードは効力を失う。

「伏せる！」

マットが叫び、手榴弾を投げた。渚は急いで伏せ、自らも手榴弾を取り出した。安全ピンを引き抜き、マットが投げたものが炸裂したのを確認してから上体を起こし、投擲する。伏せている限りにおいては、五メートルほどの至近距離で手榴弾が炸裂しても、負傷するようなことはない。少なくとも、理論上では。

ショールンラムがFNCに持ち替え、撃ち始めた。ヴァルヴァラは二百発を撃ち尽くし、箱弾倉に切り替えつつある。マットがさらに手榴弾を投げた。渚は伏せたままG3をセミオートで連射した。グレネード弾の破片を浴びながらも果敢に突っ込んできたDDに、

銃弾が集中する。わずか五メートルほど手前で、そのDDはやつと崩れ折れた。前方に投げ出された前肢の先が、伏せている渚の眼前の地面に、振り下ろされる鶴嘴つるはしの切っ先のごとく突き刺さる。

マットが振り向いて、手のひらを顔の前で激しく振った。……撃ち方やめのハンドシグナルだと気付いた渚は、引き金から強張った指を離れた。なおも撃ち続けるショーレンラムには、ヴァルヴァラが手を振って合図して止めさせた。

DDはすべて倒れていた。まだ息のあるものもいるようだが、少なくとも、向かってくる奴はいない。

「今のうちに装弾を済ませろ。各自、残弾数を報告」

すっかり実戦モードになったマットが、きびきびと命ずる。

グレネードを装填した渚は、急いで弾薬数をチェックした。グレネード弾は金色の通常榴弾が三発、オレンジの対装甲弾が二発。弾倉は五本。手榴弾は三発。

「見て、渚」

ヴァルヴァラが、渚の肩を叩いた。

「あ」

渚は思わず絶句した。戦っている時は気付かなかったが、倒れているDD……少なくとも、腹部を上にして倒れているDDには、すべて共通の特徴が現われていた。

腹部が、異様に膨らんでいる。

「妊娠してる」

「道理で、動きが鈍かったわけだ」

MGLを肩に担いだショーレンラムが、言った。

「飛ばうと試みた奴もいなかった」

マットが、指摘する。

「解剖してみたいわ。いい？」

ヴァルヴァラが、マットに許可を求める。

「レフとスンファ、それにゴエンザレドを探す方が先だろう？」

「いずれにせよ、もう時間切れよ。集合時間に間に合わないわ。マ

ット、エリックたちに状況を報告して。ショーレンラム、周辺警戒をお願い。渚、援護して」

一方的に決めたヴァルヴァラが、DDの死体に歩み寄った。肩をすくめたマットだったが、素直にSEM-52を取り出した。ショーレンラムも、MGLを手に歩み去る。

渚は装弾をもう一度チェックすると、ヴァルヴァラのを追った。おあつらえ向きに腹部をグレネードで引き裂かれて横たわっているDDに近付いたヴァルヴァラが、慎重にミニミの銃口で肢の一本を突いてみる。DDは微動だにしなかった。ミニミを構えたまま、周囲に倒れているDDの様子をうかがったヴァルヴァラが、満足したのかミニミを下ろした。渚が油断なくG3を構えて控えていることを確認し、腰のガーバー・ナイフを引き抜く。

「やっぱり、ナイフじゃ無理ね」

しばらく開口部に刃を突っ込んで動かしていたヴァルヴァラが、首を振った。手近の草で体液をふき取ってから、ナイフを鞘に収める。

「手榴弾を使うわよ。渚、ミニミを持って行って」

ヴァルヴァラが命ずる。渚はG3を肩にかけると、ミニミのキャリングハンドルとグリップに手をかけて持ち上げた。二十メートルほど後退し、身を低くする。M26手榴弾を手にしたヴァルヴァラが、セイフティ・ピンを抜いた。セイフティ・レバーを外してから、DDの腹部の破口にM26を突っ込み、駆け足で退避する。

くぐもった音とともに、DDの外殻の一部が吹き飛んだ。

ミニミをその場に置いたまま、渚はDDに駆け寄った。先に戻っていたヴァルヴァラと肩を並べるようにしながら、大きく裂かれたDDの腹部を覗き込む。

体液にまみれた内臓の中に、明らかに内部臓器とは違うものが見えた。

「卵ね。これなら、ナイフでも歯がたちそうよ」

ヴァルヴァラが、再びガーバー・ナイフを抜いた。やや黄色がか

つた白に見える卵……大きさは、二十キロ入りの米袋よりやや大きい程度か……に、刃を突き立てる。すでに爆発で一部が破壊されていた卵は、易々と切り裂かれた。

内部には、思ったとおりヴォーゲオスの幼生が入っていた。もうかなり成長しており、特徴的な前肢やほっそりとした頭部などがはつきりと見て取れる。腹部は爆発の為に損なわれていたが、おそろくは同じような成長過程にあったのだろう。色がごく薄い黄土色であることを除けば、成虫とほとんど変わらない。

「羽根がないわ。B V Wじゃないみたい」

ナイフであちこち探りながら、ヴァルヴァラ。

「どういうこと？」

「ちよつと待つてね」

ヴァルヴァラが、さらに深くナイフを幼生に突き刺した。まだ柔らかい身体を切り開いて、観察を続ける。

「身体の特徴は、B V aやB V bによく似ている。でも、細部に違いがあるみたい。少なくとも、Jコロニーで見た幼いB V bとは異なるわね」

「あとから羽根が生えてくるってことはない？」

「まずありえないわね」

渚の意見を、ヴァルヴァラが一蹴する。

「既知のヴォーゲオスの生態からすると、そこまで劇的なメタモルフォーゼは考え辛いわ。それに、この頭部の貧弱さを見て。脳が凄く小さいわ。まず間違いなく、第四のB Vね」

「……ややこしい」

渚はつぶやいた。D Dを生む凶暴な種類がB V a、生まない大人しい種類がB V b、まだその存在が実証されていない『羽根のあるB V』がB V w。それに加え、新しいB Vが見つかったしまった。

「名付けるとすれば……なんだろう」

ヴァルヴァラが首をひねる。

「B V sでいいじゃない」

渚は言った。

「Sはなに？」

「ストレンジのS」

ヴァルヴァラがくすりと笑う。

「いいわ。BV Sにしましょう」

渚は頭の中を整理した。外郭の小コロニーに存在し、DDを生み育てる凶暴なBV a。普遍的な種類で、友好的なBV b。南方から飛来して、コロニーを復活させてくれるらしい羽根のあるBV w。そして、DDが孕んでいた謎のBV s。

「もっとサンプルがいるわ」

顔をあげたヴァルヴァラが、言った。

ヴァルヴァラによるDD解剖は、三十分に渡って繰り広げられた。

「やつぱり。このBV sには、雄が含まれているわ」

「DDは有性生殖を行う世代を生み出すための種類だったのね」

渚は言った。

「じゃあ、この有性世代が交尾して、BV wを生むのね？」

「結果的にはそうなると思うけど……」

ヴァルヴァラが、体液まみれのナイフを手を考え込む。

「有性生殖と単為生殖を繰り返す周期的単為生殖。冬季を乗り切るための必須移住性。……思い出した。アブラムシよ」

「アブラムシ？」

「そうよ、地球のアブラムシによく似た生態の種類がいるわ。たしか……一匹の雌が、樹にある種の巣を作るの。これが単為生殖で増殖し、そのうち有翅虫が生み出される。これが離れた場所にある草本へ飛び、また単為生殖で増殖する。そこで今度は有翅の産性虫が現われ、樹に戻る。そこで有性世代を生み、交尾し、卵を産む。その卵が孵り、たった一匹から同じサイクルを繰り返す……」

「なんか、ややこしいだけで無駄が多い生き方に思えるんだけど」

「そうでもないわ。単為生殖ならば有性生殖よりも速く増殖できる

し、有性世代の出現によって遺伝子の組換えという利点も失わない。そう、たしかアブラムシは冬季を卵という有利な形態で乗り切るために、こんなサイクルを確立したのよ。ヴォーゲオスも、それに類似した生態を持っている可能性が高いわ」

「じゃあ、このBV Sが交尾して、卵を産むわけ？　そしてそれが孵ったものが、BV W？」

「……おそらくは」

「となると……」

渚はイメージしてみた。BV Wが、草原地帯に飛んでゆき、そこで単為生殖によって数を増やし、コロニーを作る。生まれるのはBV bばかりである。そのうち寒くなってくるとBV aが生まれ、Dを生み育てる。DDは暖かい南部森林地帯へと飛行し、そこで有性世代であるBV Sを生む。BV Sが交尾し、卵を産む。卵は冬を乗り切って孵り、BV Wとなる。BV Wは草原地帯に帰り、また自分の羽根のない複製を作って増え……。

「……あらためて考えてみると、それほど複雑なシステムではないようだ。」

「おそらくは、なんらかの形でBV Wがキャリエス島にたどり着いてしまったのでしょうかね」

ヴァルヴァラが、推測を述べる。

「しかし、冬がこないからそのサイクルが狂ってしまった。だから、一年中DDを生み出すようになった。DDは本能に従って南下し、胎内の胚子を護るために知的哺乳類を敵とみなし、襲い掛かった。そんなところじゃないかしら」

「無駄な戦い……」

なんとも不毛かつ無意味な殺し合いである。

「とりあえず、ベースキャンプに戻ってエリックたちと合流しましょう」

行方不明の二人と一頭は、依然見つからなかった。

「いったん撤収しましょう。装備の大半は海岸に残し、後日あらためて捜索隊を派遣するのが上策だわ」

ヴァルヴァラが、決断した。

「グレッグは、連れて帰るぜ」

ホルヘが、言う。

「もちろんよ」

撤収準備を終えた一同は、海岸へと向かった。ビニールシートにくるまれたグレッグの遺体は、マットとアフマドが丁寧に運ぶ。

アルバトロスへ乗り込んだ渚は、疲れた身体をベンチシートにあずけた。窓から海岸を眺め、ため息をつく。ヴォーゲオスの生態はほぼ解明された。だが、犠牲が多すぎる。得られたのは、人命を費やしてまで獲得する必要のある知識ではない。

おや……。

渚は眼を凝らした。岸からさして遠くないところで、黒っぽいアザラシのような生き物が泳いでいる。

アルバトロスのエンジンが、唸りを高めた。機体がゆっくりと動き出す。

本当にアザラシか？ それにしては、泳ぎが下手くそのように見える。まるで、溺れているかのような……。

「離陸待った！」

渚は慌てて操縦席に駆け込んだ。驚くニックとサラップに対し、海上を指差してみせる。

泳いでいたのは、ゴエンザレドだった。

「いやあ、助かりましたぞ。元来、泳ぎは不得手でしたからな」
機内に引き上げられたずぶ濡れのクロヒョウが、荒い息をつく。

「良くぞご無事で。さっそくですが、レフとスnpアの消息を」

勢い込んで、エリックが訊く。

「残念ながら、お二人とも亡くなりました」

いきなりDDの群に襲われたベースキャンp。三人の人間は激し

く応戦し、多くのDDを倒したが、乱戦に持ち込まれてグレッグが死に、スンファも負傷する。ゴエンザレドはレフの援護を受けながら、スンファを背負って逃げた。その後海岸を目指したが、別のDDの群と出くわしレフが戦死。スンファもそこで死んだという。

「ずつとあちこち逃げ回っておりましてな。何度かRQAF機を見かけたので、ベースキャンプの方向へ向かっていたところ、この機が降りてきたのに気付きました」

「そうでしたか」

ヴァルヴァラが言いながら、タオルでゴエンザレドの身体を拭いてやる。

……結局また三人もの命を失ってしまった。

渚は再びベンチシートにへたり込んだ。もはや限界だった。これ以上、犠牲者は出したくない。何があるうとも。

「離陸する」

ニックが告げ、エンジンの唸りが高まった。がくんがくんと波にぶつかりながら、アルバトロスが滑走してゆく。機体がふつと浮き上がり、すがりつく海水を振り切った飛行艇は、翼のある船から艇体の飛行機へと変身を遂げた。

「渚殿。ヴァルヴァラ殿から話を聞きましたぞ。ついに、ヴォーゲオスの生態を解明したそうですね。素晴らしい成果です」

十分ほど飛行したところで、生乾きのゴエンザレドがぬつと近付いてきた。

「……ほとんどヴァルヴァラのお手柄ですわ。それに、三名もの犠牲を払ってしまった。成果とは言えません」

ベンチシートに沈み込んだまま、渚はぼんやりと応じた。

「成果は成果です。探検に危険は付き物。国王陛下も、お喜び下さるでしょう」

「はあ」

「ヴォーゲオスの生態が完全解明されるまで、あなたには探検に付き合ってもらいますぞ」

ゴエンザレドが、渚の手に自分の前脚を重ねた。思ったよりも柔らかな肉球の感触だ。

「ですが……」

「お忘れですか。此度の探検、隊長はわたくしですぞ。犠牲者が
出た責任は、渚殿ではなくわたくしにあるのです」

ゴエンザレドが言って、ウィンクしつつ鋭い歯を剥き出した。

14 第四のBV（後書き）

第十四話をお届けします。本作は次の第十五話が最終話となります。なお、次回投稿は作者都合により（ぶっちゃけ夏休みなので）投稿日ないし時間が前後する可能性があります。あらかじめご了承ください。

用語解説 SEM-52/ドイツ製のポータブル軍用無線機

15 名なしの森

一週間後、再びアルバトロスは大陸へと飛んだ。完全武装の知的哺乳類十二匹とゴエンザレド、それに当座の物資を海岸へと降ろし、すぐにFベースへと帰還する。

翌日も飛んだアルバトロスは、大量の物資と知的哺乳類六匹を運んだ。さらに翌日の便には、渚とヴァルヴアラ、エリックとホルへの姿があった。

「では、参りましょうか」

知的哺乳類十二匹の護衛で、ゴエンザレド率いる一隊が新たに設営されたベースキャンプを出発する。むろん、渚ら四人の人間も加わっていた。渚、ヴァルヴアラ、エリック三人の肩には、それぞれのペットが載っていた。前回早期警戒用として役立ったことを考慮しての起用である。

三時間ほどの搜索で、一行はDDの死骸十数体が蟠集する林間地を発見した。今度も、最初に気付いたのはミヤーシェたちだった。

「すべての個体が、自然死している。生殖口の様子からして、おそらくは幼生を産んだあとだわ」

ざっと死骸を調べたヴァルヴアラが、告げた。

「もう用がなくなれば、死ぬのね。昆虫ではよくあるケースだわ」
渚はかぶりを振りつつ言った。それが生物の定めだと判っている、女性としてはやるせない気持ちになる。

「……ってことは、近くに幼生がいるわけか。いわゆるBVsが」
小声で、ホルへが訊く。

「そうね。探しましょう」

ヴァルヴアラが、護衛の知的哺乳類たちに合図を送る。

ほどなく、BVsの群は見つかった。その数……十三匹。
「なんか……無警戒だな」

エリックが、つぶやく。

B V s たちは、あきれるくらい外部に注意を払っていなかった。渚らが三十メートル程度まで近付いても、気付いたそぶりさえ見せない。動きも不活発だった。

「グエでコミュニケーションが取れないのか？」

ホルヘが訊く。

「……見てのとおり、頭部が小さいでしょ。卵を解剖した限りにおいては、脳容量も小さかったわ。おそらく、言語システムは持っていないんじゃないかしら」

ヴァルヴァラが、答えた。ホルヘが、薄く笑う。

「子孫を残すためのセックスマシーンに過ぎないと言うわけか」

「まあ、試すだけ試してみましようか」

慎重に近付いたヴァルヴァラが、一匹にグエを投じた。だが、話し掛けても反応は絶無だった。

「やっぱり、セックス馬鹿だ」

ホルヘが、鼻を鳴らす。

観察を続けるうちに、一匹のB V s が、別のB V s に近付いた。

後ろ向きになり、自らの尾部を、相手の尾部に押し付ける。

「なんだ、ありゃ」

ホルヘが、首を傾げる。

「交尾よ。反向き型。蝶やカメムシに多いやり方だわ」

しごくまじめな表情で、ヴァルヴァラ。

「色気のない方法だな。……人間に生まれてよかったよ、ほんと」
しみじみと、ホルヘが言う。

B V s の観察は、実に二週間に渡って行われた。アルバトロスの往復により継続して物資の補給を受けながら、渚らは静かにB V s を見つめ続けた。交尾の回数は、観察開始から三日で実に四十六回に及んだ。七匹の雌のほとんどが、六匹の雄すべてと交尾した。同じ組み合わせで複数回交尾した例も見られた。

「確実に受精するためよ。昆虫では普通だわ」

ヴァルヴァラの説明に、男二人がうんざりした表情で目配せを交わす。

観察開始から四日目には交尾が一度も見られなかった。五日目には、すべての雄が死んだ。雌は一切食物などを採ることはなく、静かに横たわったり、ゆっくりと歩き回ったりしている。八日目からは、雌たちの腹部が目立って膨らんできた。十三日目に、最初の卵が樹の根元に生みつけられた。産んだ雌は、前肢を使って卵の周りに枯れ枝や枯葉を使って器用にバリケードを築き、ほどなく死んだ。十四日目にはすべての雌が卵を産みつけ、そして死んだ。

エリックとホルヘが、ナイフとエントレンチ・ツールを使って卵のバリケードを取り除いた。きれいな卵だった。アクアマリンを思わせる透明感のある水色をした、ラグビーボール型の卵だ。大きさは、長さ四十センチ、直径二十センチくらいだろうか。

「ここからBVWが生まれるんだな」

エリックが、しみじみと言う。

「そしてサイクルが始まる。……いくつかは、念のため持ち帰って孵化寸前まで育ててみる必要があるわね」

ヴァルヴァラが言って、卵にナイフの刃を滑らせた。外殻は柔らかだが厚かった。内部はまだ液状で、切り口から粘性のある透明な液体がどろりと流れ出す。

「でも、BVW一匹でひとつのコロニーが形成されるとすると、辻褄が合わないわね」

映画の『エイリアン』シリーズのワンシーンのような画にちよつと怖気をふるいながら、渚は問題提起した。

「そう。もつと大陸でヴォーゲオスが繁殖してもいいはずだわ。それを少なく保つシステムがあるはずなのよ。卵が意外と寒さに弱く、生き延びる数が少ないのか、BVW同士が争うのか、あるいはなんらかの天敵が存在するのか……」

ヴァルヴァラが、考え込む。

キヤリエス島で大きなコロニーの数が一定だったのは、言うまでもなくDDが南部森林地帯に到達することができず、それゆえにBVもBVWも生み出されなかったからだ。しかしここ大陸では、多数のBVWが毎年生み出されているはず。なぜ、大繁殖しないのか……。

「あー、皆さん」

背後から、ゴエンザレドが遠慮がちに声をかけてくる。

「はい？」

渚は振り返った。

「この卵は、持ち帰って研究する重要な資料ですよ」

「そうです……」

「あなた方のペットが、問題行動を行っているのですが……」

ゴエンザレドが、前脚で三ヶ所を示す。

「ユリ！」

渚は思わず叫んだ。ユリとサビーヌとスィレブローが、それぞれ別の樹の根元で、BVWの卵に挑みかかっていた。バリケードの一部を剥ぎ取り、できた隙間に小さな頭を突っ込んでいる。渚に呼ばれて隙間から頭を抜き出したユリの口元から、透明な液体が糸を引いて落ちる。

「これだわ……森には卵を捕食する生物がいるのよ」

かすれた声で、ヴァルヴァラ。

「そうか。無敵の生物も、卵になってしまえば脆弱なんだ」

渚は思わず両手を打ち合わせた。

「寒さにも弱い」

エリックが、言う。

「RQAFも天敵のひとつに数えていいんじゃないか」

こう言うのは、ホルヘ。

渚の頭に、DD対策の具体的なアイデアが浮かびつつあった。

「ねえ、ヴァーリヤ。BVWの卵を死滅させることについて、国王陛下は反対するかしら？」

「しないでしょね、たぶん」

「もし、DDに特定の場所でBVSを産ませることができれば……」
「問題は解決するわね。確実に」

渚とヴァルヴァラは、顔を見合わせて微笑んだ。

「おいおい、何を企んでいるんだ？」

エリックが、訊く。

「うまく行くかどうか確信はないけれど……包括的な解決方法が見
つかったように思うの」

晴れ晴れとした表情で、渚は答えた。

「では、国王陛下。どうぞ」

渚に促され、歩み寄った国王が、前脚でそつと土をかき寄せた。
居並ぶRQAF幹部の人間たちが拍手する。知的哺乳類は、それぞ
れ特有の方法で拍手に相当する音を奏でた。

国王が退くと、控えていたトビネズミが進み出て、国王が寄せた
土をしっかりと前肢で固めた。植え付けられた若木が、トビネズミ
が触れるたびに頼りなげに揺れる。

「作業開始」

ゴエンザレドが、命ずる。待機していた百頭にもおよぶ知的哺乳
類が、いつせいに動き出した。あらかじめ掘った穴に若木を入れ、
シャベルや前脚や牙を使って植え付けてゆく。

あたりには、土の匂いが立ち込めていた。国王が、渚に歩み寄る。
「余の見立ては間違っていないかった。そなたなら、この不毛な争い
を終結させてくれると信じていたのだ」

「いえ、まだ実験は端緒に過ぎただけです。まだ、予想通りDD
を阻止できるかどうか、判りません」

北部辺境域における大規模な植林計画……。これが、渚とヴァル
ヴァラがたどり着いた最終的解答だった。DDがBVSを産むため

に、南部森林地帯への飛行を行っているのだとすれば、その眼前に新たに森林を……つまりはB V sの交尾と、B V wの卵を産むための適地を設けてやれば、それ以上の南下を防ぐことが可能ではないか、と考えたのだ。

もちろん、簡単にできる解決方法ではない。地球のそれと同様、大森林を一から作るのは数十年掛かりの大事業である。将来森林が形成されたとしても、そこでD DがB V sを産むという絶対的な保証はない。もしうまく行ったとしても、産み付けられた卵すべてを処分し損ねて、たとえ一匹でもB V wを草原地帯に逃がしてしまえば、あらたなB V コロニーの出現を許してしまうことになる。

だが……。

「余は信ずる。この計画の成功を」

国王が、言った。

「素晴らしい解決方法だ。D Dはいわばその生物としての使命を全うして、自然死することになる。生まれ出るB V sも同様に、交尾を行って自然死する。生まれたB V wの卵も、その大半が小動物に捕食され、自然なサイクルの中で死を迎える。不自然な殺害は、小動物の顎を^{あきこ}躲して生き残った少数の卵だけで済む。なんと自然で、なんと慈悲深いやり方だろうか」

「国王陛下のご指導と、R Q A Fに属する者すべてと、陛下の臣民すべての協力があればこそその成果です」

渚はそう応じた。嘘偽りのない心境だった。渚はわずかなアイデアを提供し、事態解決の方向付けに多少寄与したに過ぎない。

国王が、渚を振り仰いだ。

「余はおそらく、そなたのこの計画が成就するまで生きてはおらぬだろう。だが、心配はしておらぬ。わが臣民のために、そなたは立派にこの計画をなしとげてくれるであろう」

「……全力を尽くします」

渚は厳かに応えた。植林計画自体は、すでに渚の手を離れ、キャリエス王国政府の一部局が主体となって進めることになっていた。

すでに五千本を越える若木が南部森林地帯から移植される手筈になっている。団栗に似た実から苗を大量生産する育苗場も、すでに複数設けられ、地面からは黄緑色の芽が次々と顔を覗かせている。

RQAFは、変わらずDDの迎撃に勤しむことになる。しばらくの間は、誰も失業しなくて済むわけだ。計画が滞りなく進み、数十年後にすべてのDDがこの『南下阻止ライン』を越えなくなつたとしても、念のためにRQAFは規模を縮小しつつも存続することだろう。

「では、そちは将来のオークリヨアム就任を了承したと考えていいのかな？」

国王が、訊く。

「はい。曾祖父の跡を継ぎます、国王陛下」

渚はきっぱりと答えた。もう後戻りはできないと、渚は覚悟していた。ここで投げ出しては、死んでしまった命に申し訳ない。RQAFのメンバーたち。ジャンヌを始めとするBVbたち。過去に失われた幾多の命。知的哺乳類。DDですらも。

それに、渚もこの植林計画が最終的解答であることを内心では確信していた。所詮ヴォーゲオスは昆虫である。大陸でのDDやBVsの振る舞いを見て、渚はヴォーゲオスもその生態に忠実なだけであると見抜いた。条件……高い気温、適切な密度の森など……さえ整えば、DDはそこでBVsを産むはずだ。BVsは交尾して卵を産む。そしてそれらの大半は、ミヤーシエのような小動物に喰われるに違いない。それが、この世界の神が生物としてのヴォーゲオスに与えた自然なサイクルなのだ。RQAFは、その卵をすべて破壊するか、孵化したBVwを一匹残らず叩き落すかすればいい。

「ありがとう、渚」

重光が、渚の手を取った。

「これで安心して死ねるなんて、言わないでね」

「まだまだ。おまえを一人前のCOにしてからでなくては、死ねんよ」

重光が、笑った。

「失礼、渚殿」

ゴエンザレドが、割り込む。

「何でしょうか？」

「陛下のご提案なのだが……この新たな森の名を『ナギサ』と名付けることを承諾してもらえるかな？」

「はあ？ なに言ってるんですか？」

渚は国王陛下の御前であることを忘れて、ゴエンザレドに突っ込みを入れた。

「新たにできる森には、やはり名前が必要だ。名なしの森では、都合が悪い。そちの業績を記念して、名前を拝借したいと考えてな」

国王が、言った。

「……どうだろう。名前を貸してもらえんかな」

「そんなそんな……。あたしの名前を付けるなんて、滅相もありません」

渚は慌てふためいた。とてもではないがそれにふさわしい業績をあげたつもりはないし、はっきり言って恥ずかしい。それに、森に渚などと海辺の名前をつけるのも不自然だ。

「もし人名を元に名付けるのであれば、あたしよりヴァルヴァラの名前の方がふさわしいかと……」

「そんな。わたしにそんな資格はありません」

パイロットたちの列から慌てて飛び出したヴァルヴァラが、ささず言った。

「そうですか。では、『ヴァルヴァラ』ナギサ』でいかがでしょう」
ゴエンザレドが折衷案を出す。

「それも恥ずかしすぎます」

渚は即座に反対した。ヴァルヴァラも、反対に同意する。

「そうか。では、せめてそちたちに名をつけてもらおう」

国王が、ヴァルヴァラと渚を前肢で指し示した。

「名付け親……ですか？」

「それならば、構うまい。ぜひこの場で、よい名を付けていただきたい」

国王が、眼を細める。

「どうしよう……」

渚とヴァルヴァラは額を寄せ合った。国王とその側近たちは、二人が話し合うのをじっと見つめている。重光以下RQAFの幹部たちも、興味津々でこちらを注視している。

「……そうとう期待されてるわね」

小声で、ヴァルヴァラ。

「受け狙いで変な名前付けたら、責任問題に発展するかも」

そつと周囲をうかがいながら、渚はそう言った。

「二日ぐらい考える時間を下さい……とか言いたいんだけどな」

渚は脳味噌を絞った。だが、考えれば考えるほど、くだらない名称ばかり頭に浮かんでくる。『サダム・ライン』『DDホイホイ』『マジノ線』『三十八度線』『バーレブ・ライン』

「壁……」

不意に、ヴァルヴァラがぼつりと言った。

「壁はどう？ 『緑色の壁』」

「方向性はいいと思うけど……なんか、安っぽいペンキを塗っただけの壁みたい」

「……じゃあ、城壁。『緑色の城壁』」

「エメラルドの城みたいでかっこいいわね。でも、いまひとつ……」

「判った。『緑色の盾』」

「さすがヴァーリヤ。完璧よ！」

渚とヴァルヴァラは、国王陛下に森の名を告げた。

「良き名を付けてくれた。礼を言うぞ。皆の者、今後この森は『緑色の盾』と呼ぶように。名付けたのは、この渚殿とヴァルヴァラ殿である」

国王が告げる。

一斉に、拍手とそれに準ずる音響が巻き起こった。若木を植え終

わった知的哺乳類たちも、ある者は手を打ち合わし、ある者は地面を踏み鳴らし、またある者は吠え、新たな森の誕生と命名を祝った。

15 名なしの森（後書き）

最終話をお届けします。最後までお付き合いいただきありがとうございます。ございました。次回作ですが、新作がいまだ書き上がりませんので（汗）旧作を改稿したものを投稿させていただきます。初回は八月十五日土曜日に投稿、以後毎週土曜日に連載という形で行きたいと思っています。ジャンルとしては……一応SFになりますでしょうか。長さは中編、女性主人公の一人称ものです。雰囲気としては好評とは言えなかった「バタメモ」に似た感じですので、アクセス数に不安が残りますが、こちらもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8048g/>

グリーン・シールド

2010年10月8日12時41分発行